

(反對)「下院では、「アイ(賛成)か」「ノー(反對)かを議員に唱へさせて、大抵其の聲の大ききで議長が判断するが、若し之に異議の申立があると、改めて氏名點呼を行ふことになる。其の時は議長の宣告と同時に、急に右の砂時計を顛り返す。同時に議長はロビーに居る人を立退かせる。圖書室、喫煙室、食堂、廊下の處々に取附けた電鈴は、急に出して議員を呼立てる。廊下に立つた守衛は、大聲で氏名點呼が初まると呼んで歩く。之を聞くと、内閣員は部屋から出て来る、議員は讀みかけた新聞、さしかけた將棋、飲かけた茶、刈りかけた頭、――いや頭は別だが、兎に角何もかも其處へ棄置いて飛んで来る。戸口には自黨の院内總理が立つて居て、入り来る人々に一々何れに投票すべきかを教へるのである。其中砂時計の砂がきつかり二分で盡きると、各所の戸口々々は閉ぢられ、電鈴の音はやんで、議長の命に従つて、反對派は議長の正面左側の反對派廊下へ一人づゝ出て行く。賛成派は議長の右の後なる賛成派廊下へ出かける。而して書記官が一人づゝ雙方のロビーに立つて居て、賛否の數を數へるのである。此の採決の法はリニューイス、ハリコ

トトといふ人の案で、此の案に従へば、氏名點呼に七分乃至十二分しかかゝらぬといふ。日本の氏名點呼に早くも四十分はかゝるので、大變な相違である。――てなことをいふと、如何にも僕は議會通のやうだが、有體に手品の種を明せば、斯なことは、前刻ホーニマン君から一同に呉れたワード、ビンセント大佐の英國議院記といふ二十八頁の小さな本にちやんと書いたことで、之さへ讀めば誰にも分ることだ。人の案内記や旅行記を翻譯しておいて、一廉自分が調べた様な顔で吹き廻る人の多い世の中に、僕だつても、仕やうと思へばそんな事位は出来る、といふことを明かにしておくのである。

お茶の用意が出来たといふので、我等同勢一同はぞろ／＼とテレースの食堂に入つて、久しぶりで香の高い日本茶の御馳走になつた。忽ちがらやんと天井の方で鳴る物がある。見れば例の欄間にとりつけた自動装置の院内報知機で、今しも愛蘭事務大臣のビレル氏に入れ代つて、ダブリン選出の反對黨議員ロング氏の演説が、四時三十分から初まつたのである。(五月七日)

後の「タイムス」

九、後の「タイムス」

百三十四

「タイムス」社三を伯父様の宅の様に心得た僕は、ブラックフライヤースの通で馬車を下りると其の儘、正面の玄関口には脇目もふらず、其の横の細い小路を通つて、工場の受附の前にある中庭へ出た。正面の戸口の上には、見覚えのある例の有名な記念標が見える。先づ初に、

「實業界稀有の一大詐欺事件を曝露し、之が爲に莫大の訴訟費用を費すに至れる「タイムス」新聞の非常なる功勞を記念せんが爲に、此に此の石標を建つ。」

と大字で書いて、其の下には細々と記した由來書——千八百四十年の頃、ボーグル對ローレン事件といふ有名な詐欺事件に「タイムス」が全力を傾倒して、一詐欺師の大山仕事を摘發し、之に依つて倫敦の實業家が蒙るべかりし多大の損害を免れしめたことがある。實業家連は之を徳として、千八百四十一年十月一日、時の倫敦市長が司會の下に、マンショ

ン、ハウスで一大集會を催した。此處で「タイムス」に對して謝意を表することに決議し、「斯の如き努力は、金銭上の取引に於ける細心の注意を促したる點に於て有利なるのみならず、商業上の信用安固を破壊せんとする不法行爲の摘發處罰を資けんが爲、公共の精神に富める獨立不羈の一新聞紙が、如何の援助を之に與へ得べきかを明かにしたるものにして、實業社會に對して極めて有利有益なるものなり。」との廉で、其の頌徳の方法を調査すべき幾名かの委員を擧げたのである。ところが「タイムス」の方では、前に費つた訴訟入費一切を支辨しやうといふ實業家側の申込を固く峻拒したので、委員は更に義捐金を募集し、翌年二月九日再び集會を開いて、應募高二萬七千圓の中、千六百餘圓で此の石標を造り、一は「タイムス」社に、一はロイアル、エキステンデ(商人集會所)に長へに掲げおく事とし、又殘額は之で三分利附のコンソル公債を買ひ入れて、二箇の「タイムス」奨學資金を作り、オックスフォードとケンブリッジの兩大學へ、一人宛學生を送ることにしたと書いてある。

後の「タイムス」

百三十五

後の「タイムス」

百三十六

此處を入つて、受附で總取締役のベル君に會ひたいと言ふと、小さな紙片を呉れて、之に委細書き入れて呉れといふ。西洋の新聞社では何處でも斯な物を書かせるが、「タイムス」で之を書かせられるのは、何だか伯父様の宅へ墓所から入り掛けたのを、玄關へ廻らせられた様な気がする。仕方がないから「會はんとする人」の欄へモーバリー、ベルと書き、「訪問者」の欄へ自分の名を書いたが、「用事の要旨」の欄へは、棒を引張つて何も書かすに出した。受附の男は兎見角見て、「御用事は」と聞くから、「用事も何も無い」と突慥貪に答へたが、尙何か言ひさうなので、「僕の名を言つて呉れたら分る」と早速二の矢を足した。我ながら大きく出たなど可笑じかつた。

之で受附は大に恐縮して、叮嚀に僕を待合に案内して呉れた。間もなく、何か此處へと来たので、活版工場の脇から二階に通ると、ベル君は僕が座に着くが早いか、例の大きな口を開いて、からりと笑ひながら、「いや五十人のお傳は中々えらからう」と突然に言ひ出す。僕は朝日新聞を代表して、電報の禮やら去年世話になつた禮やらを述べた後、

彼のヘアスンのタイムス乗取策に及んで、「一時は社でも驚きました」と言ふと、「いや私も少々驚いた」と、又此然と笑つた。

實にもヘアスンの事は一時日本でも大分問題になつて、既に「タイムス」がヘアスンの手に歸したと迄傳へられた位である。併し、肝腎の「タイムス」社では丸で一步をだに踏み入れさせなかつたのだといふ。ヘアスンが「タイムス」の社長たるべき柄でないことは誰も心得て居る。彼れが手をかへ品をかへて之に斬入らうと企て、自分の關係した新聞雑誌には、事既に成つたものゝ如く盛に吹き立て、遂に「タイムス」の社告に迄彼れの名の現るゝに至つたのは、唯彼の陰謀の第一歩たるに止まつて、其の實彼の入社は社中でも異論があり、倫敦はいふに及ばず、尙くも「タイムス」の讀者を有する限りの世界各國から苦情が起つて、丸で物に成らなかつた。路透社の如きも、畢竟あの社告に根據を置いたらしいが、抑も彼の社告なるものは一種の行違から起つたに過ぎぬといふ。そんな行違で有つたか略見當はついて居るが、此に書き立てる程のことでない。之を要するに、彼の驕き

後の「タイムス」

百三十七

後のサットン、プレス  
以来雨降つて地固るの譬の通り、「タイムス」の現組織は益鞏固になつて、延いて「タイムス」と我が社の關係も、益鞏固を加ふるに至つたことを、謹んで此に明かに告白しておく。

一周會員の爲に印刷工場縦覧の切符を三四枚請求すると、器械も近日新しい大きいのをに入れる筈だと言ひながら、切符に署名して呉れた。去年迄は社長ウアルター君の名で此の切符が出たのである。家で家内と晚餐を差上げたと思ふのだが、といふのを、何分時間がないからと斷つて此處を出た。社の前は直地下鐵道のブラックフライヤース停車場、去年は、能く夜深に月を浴びて、此處を通つたものだ。(五月五日)

十、後のサットン、プレス (二)

ライターール停車場を二時に出た臨時列車は、威勢よく三時少し過にギルドフロード停車場に着いた。プラットフォームに吐き出された百餘名の中には、背の高い「メー」の

主筆マローロ君が見える、マクフワースン君、ビニーツ君など大分見知つた人々が出て来る。打連れて一同停車場を出ると、前の廣場には、二頭立の馬車が二十餘臺すらりと列を正して、其の四邊には村の老若男女袴と遠巻きに取り圍んで、一人も見逃すまいと許りに眺めて居る。我等の姿を見るところ均しく、何とはなしに歡呼の聲を上げた。見渡せば、停車場前の大通り、大小商店の軒を列べた兩側には、黒山の様な見物人。兎ある右側の三階からは、高々と掲げた日の丸の旗が、そよよと吹く春風に翻へつて居る。

後のサットン、プレス

サットン、プレス



ノースクリップ卿の秘書が出迎に來て居て、僕と婦人客だけは、自動車で一步先に來て呉れといふ。今日を晴と着飾つた柳子夫人、美智子夫人、美智子夫人を、僕は西洋流に、一々車へ扶け載せて、先づ一番に駆け出した。見物の若い娘たちが、頻りに此の車に向つて手巾を振る。キモノ、キモノの聲が彼地にも此地にも聞える。名にこそ聞きつれ、本家元祖のキモノを、此の邊の村人は恐らく今迄に見たことがあるまい。珍らがるも無理はない。昨日男爵夫人から態々寄越した手紙の中にも、婦人は三人共是非キモノで來て呉れと書いてあつた。ふる亞米利加のふりにし際は言はずもあれ、近くは鴉鳥の英吉利の都に入りてこの方、キモノと到る處に持囃さるゝこととて、注文がなくとも何で之を着ずには行かうか。

去年は倫敦から自動車で來たので氣が着かなかつたが、停車場からサットン、ブレース迄は思ひの外遠い。菜敵の香り麥浪の躍るはないが、メー、ライラツクの若葉、櫻桃李の花、其の間に胡蝶の狂ひ戯るゝ様、流石に春の趣は何處も變らぬ。砂塵を蹴立てゝ過

ぎ行く道の邊の草原には、蒲公英やバタカップが今を盛りと咲き亂れて、空には高く雲に入る雲雀の聲。

見覚えのあるサットン、ブレースの前へ車が着いた。手輕な主人の男爵は、鼠色の中折帽子を被り、背みがよつた脊廣を着て、つかつかと車の傍に歩み寄る。僕が先づ下りる。又もや手を取つて、婦人を一人づつ扶け下す。其處へ、男爵夫人が満面に笑を湛へて出て來る。互に手を握つて、打連れて正面の客間に通れば、片隅に置いた大聲蓄音機が朗々と、「君が代」を奏し出した。昨日蓄音機會社から人が來て、若し譜の違つたものを入れては相すまぬから、一應聞きに來て呉れぬかとのことであつたが、今聞けば、結構に出來て居る。此處を通り貫けて屋後の庭園に向へば、廣々とした芝生に喫茶店が出來て、其の側に伊太利人の樂隊が何かやつて居る。男爵は笑つて、「伊太利人といふことにはしてあるが」と云ひかけて、夫人と顔を見合せた。英吉利で樂隊とさへいへば、必ず伊太利人に限り、他國の人とあつては丸で御馳走にならぬ。其處で英吉利人を使ふ時にも、態々之に伊太利

シルクハットの滅亡  
の服を着せて、伊太利人といふことにするのださうな。『何故だか知らぬがさういふ習慣  
だ』と、男爵は庭を歩きながら言葉を足した。

其の中馬車の軋る音が連りに玄關先に聞えて、お客が追々に着いた。男爵夫妻は之を迎  
へんとて、急に其處に引返して行く。(五月九日)

十一、シルクハットの滅亡(大夢)

今度の旅行中僕が一番恐れたのは、シルクハットに燕尾服で有る。何が嫌だと言つて、  
凡そ世の中に此の二つ位厭なものは無い。是れは僕ばかりぢや無い、西洋人にも同感の奴  
が随分有る。現に亞米利加で一番シルクハット、燕尾服の流行るワシントンに燕尾服排斥協  
會と云ふ會が有つて、如何なる場合にもあんなものは着ないと極めて居る。是非着て來い  
と言へば、そんな大事の宴會でも決して出席しない。所が本家本元の英吉利人は、物堅い  
と云はうか、頑冥と云はうか、何處までも舊來の慣習を守りつめる。苟も紳士と自稱す

る輩は、明けても暮れてもシルクハットを頭から放さぬ。午後六時になれば、宅に居ても  
ちやんと燕尾服を着る。白シャツの胸を突出して大得意である。晝間は又決して燕尾服を  
着ないが、フロックコートを屹度着て居る。此の服にプリンス、アルバート(アルバート  
親王)の名があるからと言つて、まさか王室に對する忠義を表すのもあるまいに、い  
やはや窮屈千萬な事である。夫を又真似て、小さい頭にストープの煙突見たやうな物を被  
り、短い身體に外套かど疑はれるフロックコートを羽織り、ステッキを逆さに持つて、い  
ぢかり股で歩行き廻る日本人も有るが、其の見苦しい體裁と言つたら、實に堪まつたもの  
では無い。

我が一行五十六人、日本の樂屋で見たまには中々の好男子も有つたが、世界の槍舞臺へ  
出して見ると、何だかどうも餘り感心しないのが多い、と言つて海坊主やヒポ、タマスの  
やうな怪物は居らぬが、五十六人すらり並んだ場合には、思はずくすく笑ひ出すやうな  
事もある。偕其の人々が英吉利に着く、見ると滿街のシルクハット、フロックコートに羊

シルクハットの滅亡

シルクハットの滅亡 百四十四

皮の手袋、のの字に曲つたステッキの逆さ持は何と無く奥床しい、紳士たるものは斯く有らざる可からずと來たらさうだらう。倫敦の町は廣く、英吉利の人は神經鋭敏ならずとも、生きたボンチの出現には驚くに遠く無い。昔シルクハットの初めて市中に現れた時、犬が盛に吠え立てた爲、馬車馬が荒れて怪我人が出來たさうだが、一周會員が英吉利に來た爲に、再び其様な騒ぎが持上つたら、同盟國に對して何共相濟さぬ次第では有るまいか。

斯う思ふと心配で堪まらないが、それぢやと言つて英吉利行を止める譯には行かぬ。船は着いた、リバプールに上る、汽車に乗つた。いやに速い。情ない、さうく又倫敦に來た。ヤツ是れは稀代、滿街のシルクハットが何時消え失せたか影も形も無い。全で無いことも無いが、非常に少い。従つてフロックコートも從來九分有つたのが、一分位に減つた。そして其の缺を補つたものは、モニングコートにダービー(山高帽)だ。此のダービーの馬乗帽も僕は餘り好かぬが、ストロップの煙突よりは手輕で好い。兎に角僕は此の有様を見つてラツと胸が透いた。

それにしては如何して此の頑固な英吉利人が其の大切な甲冑を脱いだか、不審で堪らぬ。或は女皇が崩御されたからプリンス、アルバートにお暇乞し、序に煙突も片附けたのか、又或は率先して白い羊皮の手袋を履したツェルズ親王がエドワード七世になられたから、更に又此の大々的改革を促されたのであらうか、なご獨り考へて見ても分らぬから、英吉利人に質問と出掛けたら、それは人間が道樂になつて、窮屈な風をすることを厭ふやうになつたからと答へた。聞けば兩三年前倫敦の夏が非常に暑くて、如何な英人もシルクハット、フロックコートを着て居られぬ事があつたさうで、其の時を境に此の甲冑を脱ぎ棄てた者が多いさうだ。或は此の現象を見て英國人氣風の變化を卜すべしと言ひ、英國風の米國風に負けた證據だなど論ずる人も有るが、然らぬ鹿爪らしく觀察するにも及ぶまい。

僕は兎に角大愉快だ。其處でクロソン老爺を引張つてホテルの酒場に行つた。ジンリッツキーと云ふ亞米利加酒を二杯拵へさせて、將にシルクハット衰滅の萬歳を唱へんさうとつふいと傍を見るとき、是はさうぢや、黄色い奴が一人、其のシルクハットを頭に戴いて、

シルクハットの滅亡

滑稽妖曲ネルソン  
ベネチクチンか何かを呑んで居る。誰だらうと思つて好く見たら、英吉利崇拜の達人楚人冠杉村廣太郎君。

十二、滑稽妖曲ネルソン（大夢）

「東に回る荒金の、土の極みを尋ねん。」  
「是れは世界一周の僧にては。我れ久しく倫敦を見ず程に此の度思ひ立ちては。」  
「天照す、大日の本を立出で、船路遙けき旅の空、降るアメリカも早過ぎて、風も長閑き春の日の、イギリスにこそは着きにけれ。」  
「急ぎに程に、是れは早倫敦の都にては。人馬雑沓肩摩殺撃の有様、昔見しよりも尙一層の賑ひにては。又あれに見えたるは、名高きセントポールの御寺にては。彼處には彼のネルソンの御墓の程に、立寄りて一拜せばやと思ひは。」  
「四海の波も静にて、治まる御代ぞゆたけき、それ世界の國々は多しと雖も、自由の光照り添ふ故か、我イギリスの繁榮に如くは無し。さればにや、東西南北の奇し貨、商人の庫にうづ高く、風帆蒸氣の船の影、ドッ

クの中に連なれり。何事も心に協ふ時なれや、白銀も、黄金の花も盛りにて、實に倫敦の春の空、四方の國々自から、歸服を見ゆる景色哉。」  
「如何に是なる老人に尋度事の由。」  
「此方の事にてはか。何事にてはぞ。」  
「見申せば、黒き法服を着、此の堂の内に在り給ふは、若當寺の長老にて在るか。」  
「さん、是は此寺の長老にてはが、何時も朝の程は此の處に在り、參詣の人を眺め申は。」  
「實に、由有げに見え給ひては。倍承り及びハネルソンの御墓は何處に御座はぞ。」  
「是は此國の人とも見えぬはぬに、近頃殊勝の御尋にては。此方へ御出はへ教へ申はべし。」  
「心得申ては。」  
「先づ彼方に當りて石像の見えては、音に名高きウエルリントンの御墓にては。又あれに石碑の見えは、南阿の戦に身を擡げし若き人々の記念にては。」  
「此の階段の下に數多の石像の見えては、如何なる由來にてはぞ。」  
「是は就れも此の國に出でたる英雄豪傑等の骨を埋めたる處にては。」  
「實に有難うは。斯く此寺に數多の墳墓の由は、如何なる仔細にてはぞ。」  
「抑も當寺セントポールと申すは、女王アンの御建立、我が國教の大本山にしが、何時の程よ



滑稽妖曲ネルソン  
百四十八

りか當國に大功有る人々を、國葬に行ふ靈場となりて、數多の人の葬られては。御覽はへ、此の柱の間床の下までも。「功は高き人々の」シテ「名は香しく止りて、」遠き世までも忘られぬ」地「其の習慣こそ尊けれ。實にや益荒雄の、生死を天に任せつゝ、唯一筋に國の爲め、盡す心は千早振、神も守らせ給ふへし。或は大海の底の藻屑と身を碎き、或は高山の、雪に跡なき通路を、千里の外に踏開き、寒風に肌を劈くも、後へは引かぬ梓弓の矢竹心ぞ實なる。」ワキ「此處に黒く大なる柩の柩は、誰人にてはぞ。」シテ「是れこそ御尋ねはネルソンの柩にはよ。」ワキ「偕又その傍なる殿めじき車は、何の御爲にてはぞ。」シテ「それこそ此の柩を、此の處まで運び來りし車にては。」ワキ「あら尊とや。傳へ聞くネルソンは、大小百餘回海戦常に勝を占め、」シテ「さしも傲れる佛王も、其の兵船を碎かれて、」ワキ「イギリス國へ進入の、彼の大望もうたかたの」シテ「泡と消えにし我も亦」地「トラフワルガーの夢の痕、訪ひ來る人は多けれ、遠き東の果よりも、我が墳墓に詣で給ふ、御僧に見え申さんとして、假に姿を現せり。我にな恐れ給ひそ」と言ふかと思へば失にけり、形は消えて失せ

にけり。」ワキ「偕はネルソンの亡靈假りに現れ、我れに言葉を交しけるぞや。いざ申ひて浮べんと、善後の花環を捧げつゝ、柩の下にひれふして、唱ふる法の聲清むや、耶穌の祈禱と諸共に、此の英魂を弔はん。」後シテ「あら有難の御弔ひやな、トラフワルガーの沖つ波、寄せては返す仇の船、打沈めたる功を、今の世迄も傳へたる、我れネルソンの亡靈なるが、邪淫の業の消えやらず、宙宇に迷ふ苦じみを、御僧は知ろし召されずや。」ワキ「若能一懺悔、衆罪即消滅、況してや是れは當國の守りとなれる英魂の、何疑ひも波の上」シテ「水の底なる魚族や」ワキ「乃至草木國土まで」シテ「悉皆成佛」疑ひ無し。上同「婚しや偕は我魂の、輪廻を巡れ天國に、入る箭の如き戦船、假令風強く、浪は立つとも、何か厭はん敵船の、浮める限り打ち沈め、海を清めの神風に、吹掃はせん四方の國。抑もトラフワルガーの戦ひは、一千八百五年十月の二十一日、敵は名に負ふフランスの船將ビレニユーブ、西班牙の援軍を合して船數凡そ三十餘隻、我はそれより少かりしも、彼のナポレオンを取ひしぐは、唯此の一戦に外なしと思ひ、掲げ出せし信號の、文字は八字に過ぎざれども、國に盡すの

滑稽妖曲ネルソン  
百四十九

非寶石同盟  
百五十  
義務を知れど、勵まされてはイギリス人の、心鐵石に堅めつゝ、打出す矢玉に徒は無く、片はしより敵船を焼沈め、紅波楯を流し、白及骨を碎く有様、勝誇りたる味方の船より、揚る間の聲ぞ勇まじき。「我も素より其時は、必死を期せし事なれば、今日を晴の装ひに數多の勳章を赫やかし、船上に立ちて指揮せしに」。「半は碎けし敵船の、狙ひ寄りて打つ玉に、身を穿ぬかれ敢なくも、トラフワルガーの夕霜と、消えにしかども魂は、残りの敵を打亡ぼして、さしにも雄きナポレオンの、翼を折りし勳は、今の代までも香はしき、是迄ぞ御僧、御身還りて人々に、此の事を語り玉ふとも、我にも勝る東郷を、努忘れ給ふな」と、言葉て失にけり、言葉てこそは失にけれ。

十三、非寶石同盟

日本の國旗は昔に日本の國家を代表して居るのみならず、同時に日本の國民を代表して居る。何れの國の旗にも三色以上を使はぬものは殆どないが、日本の白地に赤の日の丸

一つ。其のあつさりとして飾り氣のない所は、正に日本國民の好尚其の儘である。衣服、飲食、家屋から初めて、凡そ一切の事に日本人ほど淡泊を好む者は餘り世界中にない。衣物をいふと、寶石一つ使ふでなし、管々しい縫一つ取つた所も見えぬ。食事はといふと、魚の作身大根下しを初め、生の儘で間に合せるものが頗る多い。若し夫れ家屋に至つては、室内の裝飾に掛物一つ花瓶一つ額が一つ二つある切り、凡そ天下に之ほど簡單なものがあるか。

所が近來西洋風とても言ふものだらうか、次第にいつつ、い奴が流行り出して來た。油こい、こつてりとした奴が到る處に勢を占める。食物然り、住居然り、衣服及之に附屬する一切の裝飾盡く然りである。食物は濃厚な方が滋養に富んで居るといふなら、夫も已むを得ぬ。住居は西洋風の方がコンフォートが多いといふなら、夫も強て悪いとは云ふまい。唯併し衣裳類のいやに華奢を衒ふに至つたのは誠に以てうるさい。うるさい許りなら、うるさいで済むが、其の實は延いて國書を醸す、民を毒すること之より甚しきはない。

西洋の女は能く珠數玉のやうなものを身體一面につけてぎら／＼と光らせて歩くが、夫が何で面白からうか。指輪、腕輪、頸飾、襟止の類に白金、黄金、金剛石、紅寶石の數を盡して富を誇るが如きは、畢竟趣味の墮落で有つて、其の愚を指先や、腕先や、頸や、襟やに表はしたに過ぎぬ。日本でも貴婦人といふ手合には、衣物や襟に仰々しい寶石をちりばめて得意がつて居る者が大分出て来たが、斯ういふ貴婦人に限つて、多くは役者狂ひを事として居る奴原であるといふことを、僕は貴婦人の仲間中から聞いた。

西洋では、此の濃厚な裝飾に對して大分反動の勢が見える。英國に於て殊にさうらしい。僕は此の春倫敦で、知り合ひの某時計商に金時計を一個注文したら、之が最新の流行だと言つて持つて来たのは、片硝子の銀針の頭丈な大きな時計であつた。こんなものが流行るのかと聞いたら、近頃は何でも質樸な飾り氣のない奴が流行つて来たのだといふ。

去年僕が倫敦に居る時聞いた話に、或る大舞踏會があつた。所謂貴婦人令嬢が今日を踊と着飾つて、金銀珠玉の光人目を眩しつべき許りであつた中に、今日こそこんな装ひに人を

驚かすべきかと、孰も目を時て待つて居た某女優は、純白の装ひに黒眞珠のブローチ一つ傾しげに胸にさした切り、何一つ裝飾らしい裝飾といふものが無かつたので、之が列み居る一同を且つ驚かせ且感心させて、此の夜の綺羅錦繡を飾つた中の一異彩とたゞへられたといふ。

今年朝日世界一周會員を引連れて世界を一周した時、到る處に日本の婦人の装の淡泊とて居ながら、恰好のよいのを賞めぬ者はなかつた。日本のキモノなるものは今や倫敦邊では貴婦人の間に盛に流行つて居るのである。又或日一周會の人々を連れて、寶石商の店に買物に行つたことがある、買物の翌日此處の主人は四方八方の談の次手に盛に日本人の趣味の高きを賞めた。「初は田舎のお客と侮つて、夫れに相應した品物が買れる積りで居たが、買ふ物も飾り氣のない淡泊な物ばかり、寶石入のピン一つと言つても、寶石は一つだけ入つたのよりは取らず、時計の鎖にしても簡単な物く選る。夫で居て値段の張ることは一向厭はぬ。實に妙にひねくれた好みを持つて居る。」と言つて笑つた。其の時僕

非寶石同盟

百五十四

は、日本で普通羽織の表が木綿でも、裏には大抵絹地を使ふといふ話をしたら、主人は思はず之れある哉と言つた様な顔で、小膝を打つた。

日本の様な貧乏な國の貧乏な人間が、いくら金銀珠玉で競争じやうごしたとて、迎も歐米先進の國に及ぶものでない。そんな下らぬことに金をかけるよりも、日本は飽迄も日本趣味でやつて、趣味の上に於て競争をしたいと僕は考へて居る。

非寶石同盟といふ様な物を作つて、日の丸の旗印を真向に、先づ役者狂ひをする貴婦人原から征伐してやりたい。

「ロギー」といふのは、英語の「グラー」なをいへるに似て、其の音甚陽氣なり。「ロギー」といふのは、シーンに似て、其の音頗る振はず。——金を取るるるに似て、其の名の陽氣ならんことをいへ。——「七花八裂」

### レム の 里

一はしがき

明治四十年の六月十四日、大森の宅では麗子が今日明日をも測られぬ大病に罹つて、家内一同上を下へと大騒ぎの最中、知らぬが佛の僕が倫敦の宿へ、次のやうな手紙が「デーリー、メール」社から轉送せられた。

拜啓、君が英國の風俗習慣に對する精到犀利なる批評は、日々「メール」紙上にて面白く拜見せり。生は昔て日本に於て生が生涯中の最も愉快なる日月を消したることあるを以て、日本及日本人に對して懐かしさを感ずること一方ならず。随つて、君の文に對して興味を感ずること、亦一般の我が國人に比して深きものあるを覺ゆ。生は東海道に於て徳川前將軍に謁したることあり。前年物故したる福澤先生は、生の友人にして、暫く生の横濱の宅に同居したることあり。斯の如き知名の士を知り得たるはしがき

百五十五

はしがき

百五十六

は、生の光榮とする所にして、氏が日本の大使に隨從して當英國に向はんとするや、生は之を當國の知人に紹介し、此等知人は皆然るべき款待を與へたり。斯く申さば君は「あなた、おちいさん」と言はるゝなるべし。實にも生は「ちいさん」なり。されども生は未だ日本が露國と戦つて敗北すべしと思惟する程に老練いたし居らず。生老いたり雖も、戦役の當時、自ら一隊の騎兵を率ゐて、行いて日本が哥薩克と戦はんとするを助けんと企てたることあり。唯國際の繁文縟禮遂に生をして其の志を遂げしめ能はざりしのみ。——好矣、斯る事共は今語り出でたりとて詮なし。生が今君に對して言はんは欲する所のものは唯一のみ。曰く願はくは、君の文に依りて、日本が世界第一の感奮なる國民を有すること、及其の正義と勇敢とに於て世界の何國にも劣らざるものなることを、深く英人の腦底に印せしめ玉へ。

尙次ぎに一言すべし。君若し喧しき倫敦を避けて、數日の休息を田園に取らんことを望み玉ふが如きことあらば、生は何時にも喜んで君の爲に我家を宿とし參らすべし。

し。生は富める者に非ず。されども、教育ある日本の紳士を迎へんことは生の最も喜ぶ所なり。且つ又ウワリック城趾、及沙翁の生地ストラトフラード、オン、アボンなどを訪はんも、亦興あるべし。此等は孰も生が居村より遠からず。

生は日本を去りて後加奈陀に住したるを以て、加奈陀が今後如何に日本の用に供すべきものなるかを知れり。此の點に就ては、ゆるく君と相語るの機會を得んことを切望す。さりながら君の多忙なる、恐らく其の時を得ざるべきか。

五月十四日

レミントン、スバにて

デー、アール、ビー、デビス

此の手紙を読んだのは、恰度夜の十二時過、ハイド、パーク、ホテルで催された小村大使の夜會から歸つた時であつた。「メール」に僕の投書が出て以來數々の書面を受け取つたが、今晚のは僕を動かしたものは無い。兎に角も返事は明日のこととして、手早く窮屈な燕尾服を脱ぎ棄て、臥床に入つたが、さまざまのことが胸に浮んで、何しても眠られ

はしがき

百五十七

はしがき  
ぬ。先づ此の書面の差出人の顔が目に浮ぶ。雪の如き白髪半は禿げて、鼻の先にべらぼうに大なる眼鏡をぶら下げたのが出て来る。暖爐の側に身を屈めて、鵝ペンの手もと危うく、何やら認めて居るのが出て来る。三四人の可愛い縮れ毛の孫らしいのが出て来て、老人の膝や背中に飛び上る。六十ばかりの品の好いお婆さんが、其の後を追つて来て、手紙の邪魔をするものでないと言つて聞かせる。やがて突然舞臺は一轉して、老人はいつしか義勇兵將校の軍服に身を固めて、濠洲産の逞しい白馬に跨がり、長鞭を揚げて三十餘騎の先頭に立ちながら、蔦直にボグラニチヤの停車場を歩み行くを見る。今度は二十足らずの若い福澤先生が、丁髷に大小殿しくぼッ込んで、赤ら顔の背丈の矢鱈に高い人と横濱の海岸をぶらり〜やつて行くを見る。想は夫から夫へと飛んで行つて、眼はばつちりと刃え切つて仕舞つた。

眠つたか眠らぬかの間に一夜を明かして、翌朝は起き出でると直ぐ返事を認めた。返事の要旨は、厚く態々の來書を謝して、時間の都合がつか次第是非お邪魔に出るといふので

あつた。次手にウヲリック城趾は豫てより一度行つて見たいと思つて居た所、ストラトフライド、オン、アホンは此の前友人何かごと一所に出かける積りで、既にメリアルポーン停車場迄踏み出したのを、途中でホテルが満員と聞いて引返した位所であることを書き加へておいた。越えて十六日、再び老人から書面が来た。其の文に曰く、

昨日附御手紙有りかたく拜見。愈生が望に任せ、三五日を生がいふせき宿に過さるゝこととなりたる由、欣喜極りなし。斯くして生はウヲリック其の他レミントン附近の名所舊蹟に君を案内し参らするの好機に接するを得んか。

さりながら、此處にて君に富士山の如き麗はしきものを見せ参らせんことは、我が方の及ぶに非ず。生は日本駐劄の和蘭公使故フラン、ホルスブルーク伯と、古風の服装面白き日本の衛士に護せられて、富士に登れることあり。嗚呼其のいそ〜と東海道を駆け下り、さては恍々として函嶺の山水に見惚れたる昔の戀ひしくもあるかな。

左れどもわが愛する君よ。先づ此の地に來り玉はんとする日を報せ玉へ。生は倫敦

はしがき  
發の最上の列車を報すべければ、其の中にで然るべきを選び玉へ。思ふにパチントンより大西線を取らんこと、最も便利なるべし。此の線はオックスフロードを通過して、二時間と少しにて當地に着すべく、生が其の折プラットフォーム迄出迎へ申さんことは言ふ迄もなし。生は背丈極めて高く、白髪にして、厚き眼鏡をかけたれば、萬見誤らるゝことあるべからず。

君の文は實に名文なり。

五月十六日

「君の文は實に名文なり」とは聊か恐れ入つたが、今度は文體も大分碎けて来て、やゝ老人の面目が見えて来た。背高く、髪白く、夫に厚い眼鏡をかけて居るといふので、大凡老人の様子にも見當はついたが、此の日合宿の若い女から、レミントンとは倫敦の西北に當つて、左ながら書いたやうな奇麗な町で、昔は有名な湯治場であつたこのことを聞いて、大凡レミントンなるものゝ見當も亦ついた。

夜に入つて、今度はデ君から小包が二つ届いた。一には汽車の時間表、レミントン、ウヲリック、ストラトフロード、ケニルウアース、オックスフロードなどの案内記やら地圖やらを、十幾冊といふ程入れてあつた。今一つの包を開くと、開かぬ前から、花やかな春めかしい香が其の中より洩れて、厚いボール紙の函の中から、白と紫とのライラックの花が一束づゝ現はれた。函の裏には見覚えあるデ君の鉛筆の走り書きで、

「我家の庭に咲き出でたるライラックの花を、先づ君に贈り参らす。君が來玉はん迄に萎まんことを恐れて。」

とあつた。騎兵を募つて哥薩克兵と戦はうなど言ふかと思ふと、又斯う優にやさしい所がある。全體デピスとはどんな人であらうか、餘程變化に富んだ人に相違ない。僕は益早く行つて見たくて堪らなくなつた。

初に二十五日と言つておいたが、丁度二十日に伏見宮殿下の倫敦御出發といふことに定つたので、又日取をかへて、今度は六月一日に出向くことにした。此の由先方に報じた時、

百六十二  
次に、呉々も客分としての大層なもてなしは御無用と断つておいたが、之に對する老人の返事に、

十八日附貴書辱なく拜見。六月一日愈々御入來の由謹んで御待ち申すべし。別に前以て何等の沙汰なくば、同日午後一時十八分停車場にて相見ることとせん。伏見宮殿下の御事は、記者として主要の用に相違なかるべしと、察し居れり。今後君が都合に依りて、幾度日取を取り代へらるゝとも、常方には一向差支なし。

生は君をもの／＼しき賓客と見ずして、打とけたる我家の一人としててもてなすべし。君も亦心おきなく我家に留まりて、遠慮なく何を食ひ、何を飲み、又如何の煙草を吸はるゝかを打明けて語らるべし。唯生の此の際甚しく遺憾と感ずるは、貴國の盛に坐らせ、貴國の火鉢を出し、貴國の富士を見せ得ざることは是なり。此等は今も尙寤寐に生が心に浮び來て、忘るゝ能はざる所なり。

英人は打見たる所冷やかなれど。心はなかくに暖かなり。日本の同胞に對して殊

に然り。

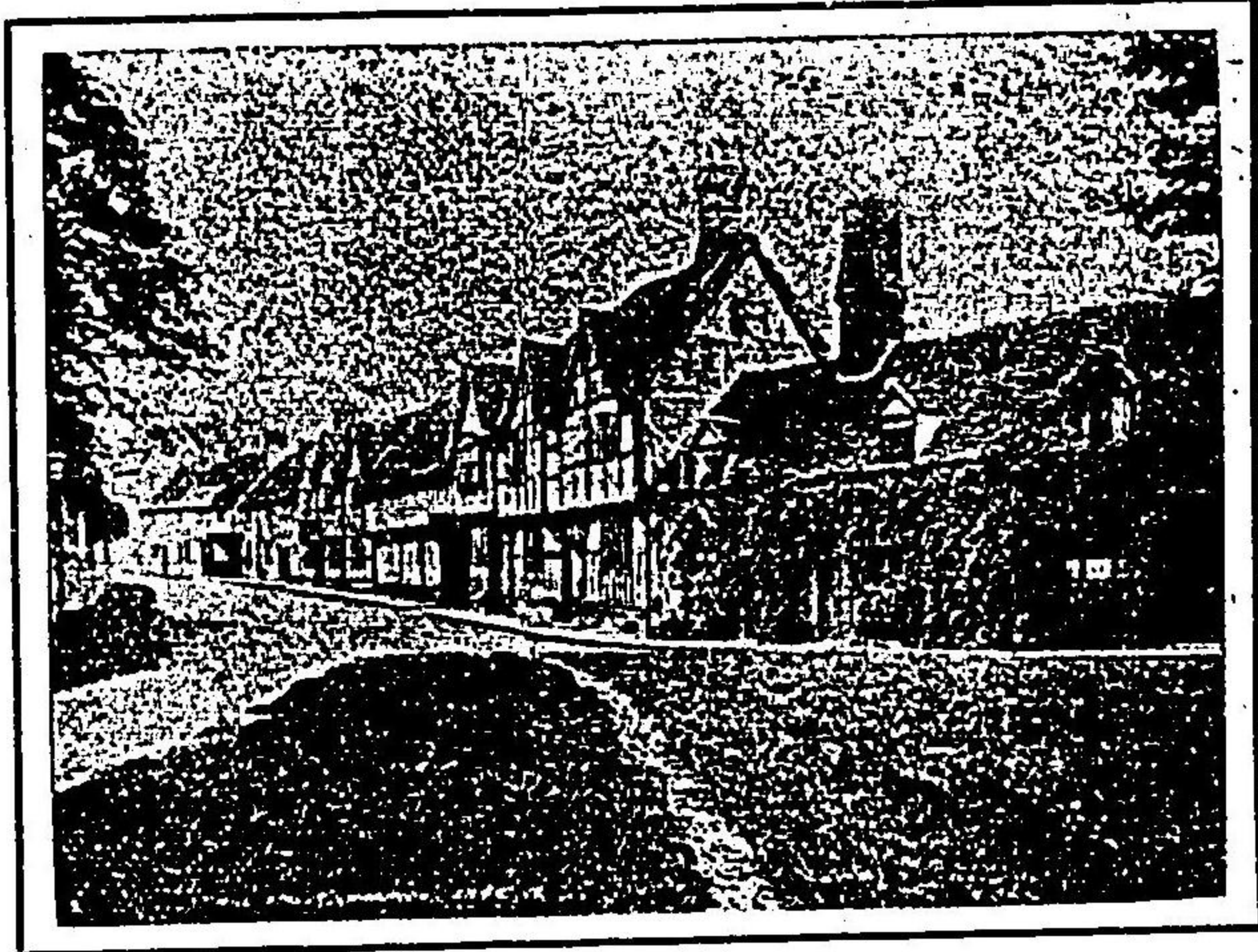
なごゝあつた。

此の頃は恰度麗子が大學で見て貰つて、逆も七月中命があるまいと診斷せられた時であつた。麗子とは今年七つになる僕が長女の名である。

### 二、レミントン

いよ／＼六月一日は明けた。宿の傍のグロスター、ロード停車場から地下鐵道に乗つて、パチントンに出で、此處から十一時何分かに發するレミントン行の列車に乗り代へた幸に客も餘りこみ合はず、天氣も例に依つて曇つては居るが、降り出すほどのこともないらしい。車輪の市中を離れると同時に、追々に日の光も雲間から洩れて來る。沿道見渡す限り青草滿地、さながら鹿を敷くが如く、小川の岸、森の下陰には、快よげに羊が群れ遊んで居る。暇つぶしにぞとて、テ君から送られたレミントン案内記を讀んで見る。レミントンはリ





家跡のクツリラウ

レミントン

百六十四

ム川の邊に立つた町の意で、サキソン時代から開けた所である。所はウヲツク州の中で、倫敦からは西北に當る。古くより此處に鑛泉の湧き出ることが知られて居たが、前世紀の初めに、新に一鑛泉が発見せられてから、追々に新しい家が立ち、新しい橋が架り、新しい道も開けば、新しい園も作られた。道といふ道に綠樹鬱葱たらざるはなく、園といふ園に百花爛漫ならざるは希で、左ながら全市を一九に打って大公園を形づくり、「花園の町」の名も空しからぬ。ホーンソンが「われらが舊居」の中に此の地の美を説いて、「レミント

ンは四時花を見ざることもなく、一年を通じて家なき者の爲に家となる。町の内麗しく、町の外美しく、所によりては、壯麗雄大の景をさへ示し來る」とまで言つて居る。一時は湯治場として其の盛を極めたもので、前世紀の初には、ビクトリア女皇がまだ位に即かせられぬ頃、行啓になつたこともある。其の頃から「ロイアル」の肩書を許されて、「ロイアル、レミントン、ホテル」「ロイアル、ボムプ、ルーム」(浴場)などいふのが今に在る。尤も今日では湯治の方が餘り盛でないが、町の美しいのと、サキソンのガイが舊居ウヲツクの城も、スコットの筆に名高きケニルウヲリスの城址も、ジエークスピアの故園と知らるゝアボン河邊のストラトフアードも、皆此處から一二時間で行ける近くにあるのと、而して倫敦から來る途中の丁度中程に、大學で名高いオックスフアードの町が有るのや何かで、レミントンの名は歐洲大陸及亞米利加に迄知れ渡つて、春先此處へ遊びに來る者が、其の數を知らぬといふ。

成程さういふ所かと、愈々面白くなつて來た。汽車は小憩もせず走りに走つて、何時しレミントン

百六十五

デビス老人  
百六十六  
かオックスフロードを過ぎ、それから一時間許りにして、列車は依然として進行を続けながら、唯僕等の乗った最後の客車だけは、はたとレミントンに留つた。スリッパ、カーと唱へて、マンチエスターとか迄急行する途中、一車をオックスフロード、一車をレミントンといふやうに、途中、最後の客車を一つ一つ切つて捨て行く仕組である。勘定尻の厘位のやうに切り捨てられた客車から、プラットフォームに下りて見ると、果して、背の高い、髭の白い、厚い眼鏡を掛けた老人が、づかくと寄つて来た。

### 三、デビス老人

一目に夫と知つて、思はず、デビス君と聲をかける。老人は満面に笑を湛へて、突然僕の革鞆を引き取つて、右の手で堅く僕の手を握りめめた。双方無言。唯じげくと顔を見合つたさき、感極つて殆ど何といふべきかを知らなかつたのである。  
つい近いのだからこのことで、革鞆を居合せた若い男に持たせて、二人はてくくと歩

いた。デビス君は思つたより元氣な、快活な人で、歩きながらもさまざまのことを尋ねる。何しろ四十年前に六年ほど横濱に居たことがあるだけだといふので、今日の日本といふものは全く知らぬ。僕の洋服を見て、今ではもう誰も袴を着たり大小をささぬかど問ふ。女は今でも矢張り眉を剃るか、鐵漿をつけるか、東京や横濱にはちつと煉瓦の家が出来たか、電車はあるか、モートルバスがあるかなど、さし詰め引き詰め、殆ど應接の暇がない。僕が、今の日本は老人の居た頃の日本と大分變つて居る次第を述べると、老人は且つ喜び、且つ哀んで、今一度昔のまゝの日本を見たいなといふ。殊に近頃日本に女學生といふものが出来て、葡萄色の袴を着けて、靴を穿き、頭髮は廂髪といふものに結ぶ由を語つた時は、老人目を丸うして打驚き、そんな變な物が日本にも出来たか、夫れでは遠からずサッフラゲツ（婦人選舉權獲得運動者）も出来やうと言つて、からくと笑つた。いや「出来やう」の段か、もう既に出來ると言つたら、老人又目を丸うした。

デビス老人

停車場から二三町ばかりで、愈々其の宅に着いた。入口から大きな壁で、お客様が見え

午  
たと呼ぶると、奥から甲走つた女の聲で、待つて〜待ち焦れて居たのです、といふのが聞える。

四、午餐

兎も角もこて、デ君に連れられて、僕の部屋に宛てられた二階の一室に通ると、寢臺には新しいシートが敷いてある。手水臺にはちやんと湯が取つてある。埃だらけの顔を洗つて、上着の塵を掃つた後、客間に案内せられて、此處で初めてデビス夫人に紹介せられた。夫人は小柄な丸顔の人で、質素な身扮はして居るが、何處やらに氣高い所がある。左ながら遠方から歸つた自分の子でも迎へるやうに、兩手で僕の手を握つて、實は最前から立つたり、坐つたり、窓を覗いたり、二階へ上つたり、そは〜として一向おちつかず、愈々宅へ見えたとき聞いた時は、飛でも出て行きたい位であつたが、強ておちついて、紹介を待つて居たといふ。デ君、其の後を引き取つて、古い話に誰かど水に濡れかけて居た所を、一

向平氣で見て居る人があるから、なせ助けに行かぬかと問ふたらば、いやまたあの人と紹介が濟んで居ないので、答へたといふことがある。馬鹿々々しい話だが、之も英吉利の儀式だから仕方がない、心よげに笑つた。

三人向ひ合つて午餐の卓子に就く。食事の間も老人絶間なく日本の昔を語り出して、神奈川の何處とかで、浪士が英國の士官を斬つて鼻首に處せられた時、自分は斯いふ浪士こそ一國の生命だと思つて、其處を通る毎に、必ず脱帽したといふことや、日露戦争の初に、此の邊では誰一人日本の無謀を笑はぬ者はなかつた時、自分は日本人が成算なくして事を醸すやうな國民でないことを確信して居たから、誰やらと賭をして幾何やら勝つたといふことや、浪士の辻斬が盛に行はれて物騒だといふので、横濱で義勇兵を組織した時、同僚の中に飲んだくれの葡萄牙人があつて、始末に終へなかつたのを成敗したことや、日本から加奈陀に移つて何とかの商賣をしたことや、南亞弗利加でセシル、ローヅの下に、探險事業に従つたことなどを、酒々を辯じ出して、横濱に居るかと思へば、キムバレーに行き、加奈陀の話と

午餐  
百七十  
聞いて居る中に、東海道に立ち戻り、過去四十年の経歴を一舉に語り盡さうといふ勢、其に手真似が加はる、道具立が要るので、何時しかナイフやフォークは二三尺も前の方に飛んで行く。夫人が時々注意して、肉が冷える、茶がさめるといふので、其の度毎に、老人初めて我に歸つて、一々、あゝあの時は面白かつたを結んで、又皿に立ち戻る。  
老人の談中最も僕を驚かせたのは、日露戦争中露艦が上海に逃げ込んだ時の話で、老人は其の時自ら上海に下り、夜陰に乗じて露艦の碇綱を切つた上、之を港外へ曳き出して日本の艦隊に引き渡さうと計畫したが、愈出發といふ前日急に激烈な眼病に罹つて中止したのだといふ。

馬車が前刻から待つて居ると、女中が報せに來たので、一同は初めて食堂を立つた。

五、ストーンレー、アベ

デビス老人夫妻と馬車を驅つて、レミントン太守の屋敷を見に行く。降りみ降

らすみ定めなき水無月の空の、何とやらん鬱陶しい中を、何くれと語り合ひながら、愈々其の屋敷に着く。レー卿の家は昔しモンクの住んだ跡とて、今も尚ストーンレー、アベと唱へて居る。レー卿は生憎と居なかつたが、卿が前以て命を家の者に傳へて置いてあつたので、行くと直ぐ迎に人が出て、邸内邸外残る隈なく案内せられた。チャールズ第一世がクロムウエルの軍に追ひつめられて、愈々其の手に落つる前日、一夜を明かしたといふ室がある。寢臺も窓掛も、昔の様を其まゝにして居ることであつたが、之が最も僕の心を動かした。其の次はモンクが穴居同様の住居をして居た石室の跡で、此處へ來ると、其の薄暗い中で、經を譯し神を禮した様があり、と眼に浮ぶ。室は暗いが、太古の文明が西羅馬の滅亡と共に潰えて、世は俄か暗の淺ましい代となつた時、幸く一道の光明を傳へて近世文明の繁きになつたのは、此のモンクのお蔭だと思ふと、何となく尊い心地がする。  
アボンの流に沿うた庭園を見廻る。赫と目を剝いたやうな大輪の牡丹が盛に咲いて居る。五時過、家に歸つて茶を入れる。世界中を一足に飛び歩く老人の談は、止度もなく夫か

ストーンレー、アベ

ら夫へと續いて、間もなく晚餐の支度が出来た。家内同様にいふことで、質素な食事を済ませて、夫から客間の暖爐の前で煙草を吹かしながら又語る。談は中々盡さぬ。老夫人は甲斐々々しくピアノの前に坐つて弾き出す。デビス君も之に促されて、濁聲高く之に合わせて何やら歌ふ。何でもラサが何したとか斯いたといふのである。歌ひ終つて、私等が若い時は斯なものも歌つたものだといふ。夫人も後ふりむいて笑ふ。ピアノが終つて、又語り出す。とうとう十一時過になつて、初めて臥床に就いた。

六、デビス一家

翌朝は八時頃に目がさめる。衣を改めて食堂に下りると、老人夫婦は新聞を讀みながら待つて居る。天氣は相變らずどんよりと曇つて、降りさうにもないが晴れさうにもない。デ君と庭に下り立つ。庭といふは屋後の二百坪許りの空地に一面の芝生、其の彼方に少し許り島がある。日本とは違つて、之だけの空地はあつても、四方は三階四階の、無風流

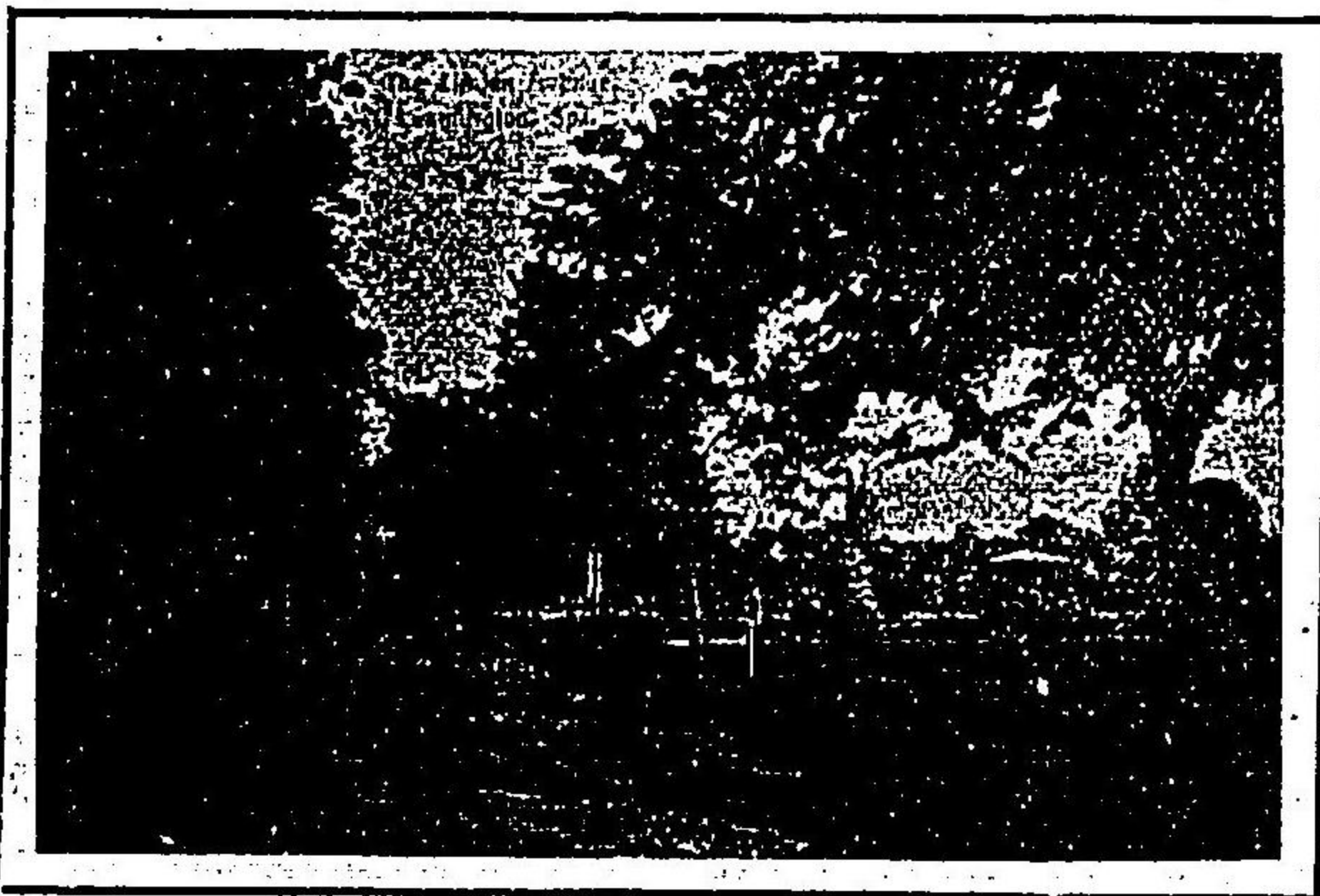
な煉瓦造りで圍まれて居るから、くわらりとした所が一向ない。此の芝生の周囲をぶらりぶらりと歩きながら、話好の老人片時も黙つて居らぬ。宅の方からすと兩三軒列んだ隣の家を指さしながら、昔は之だけ盡く自分の工場であつて、此處で活版事業をやつて居たが、面白くないから已めて、三分の二は賣り拂つたといふこと、自分が濠洲や加奈陀に居る間は夫人が一切留守を引受けて、寸分の手隙もなかつたといふこと、一人の娘がブルゲリアとかの貴族のお附で、オデッサに居るとかいふこと、従兄の何某が露國に歸化して、大地主になつて居るが、意氣が投合せぬ爲、絶交同様の姿であるといふこと、其の外何やかや大分話して居る中に、朝食の用意が出来て、一同食卓に就いた。

七、レミントンの公園

今日は日曜とて、見物に出かけるべき所もないので、老人と二人、朝食をすませて後、直ぐ公園へ散歩に出かけた。

レミントンの公園  
 ジェフソン公園、ボムブ、ルーム公園、ヨーク  
 公遊園地、ビクトリア公園と四つの大公園が殆ど  
 相接して、リームの川岸にある。僕は英國を思ひ  
 出す毎にレミントンを思ふが、レミントンを思ひ  
 出す毎に、此の美しい四個の公園を思ひ出すに  
 居れない。ジェフソンに入れば、見る限の大芝生  
 を圍んで、紅黄白紫の色香めでたき花のさかり。  
 ボムブ、ルームに入れば、亭々たる巨幹老樹。ヨ  
 ークとビクトリアとの中は、一望際なき青野原。  
 ジェフソンは、ボは瀟洒、ヨとビとは壯大。成程、  
 レミントンを「園から出来た一町」といふのも無  
 理でない。僕等は先づジェフソンから入る。門を

通樹提菩のントンミレ



入つて直ぐ兩側は、青々と茂つた木立で、栗の花の白き、バーナムの黄なる、メーの紅  
 なる、ライラックの薄紫なのが、取り／＼に咲き亂れて居る。リームの川邊に出れば、  
 兩岸から、かぶさるやうな森が川水に映つて、其の間に、鶺鴒が悠々と泳いで居る。其の邊を  
 見巡つて後、最後にビクトリアに行けば、此處はからりと打開けた芝原で、其の間を眞直  
 な砂利道が突きぬけて居る。日曜日とて、會堂の鐘の音が右にも左にも聞える。

八、ホウ井ツトナツシユ村

歸つて午餐の後、客間の暖爐の前でごろ／＼と居睡りをして居ると、デビス老人、ぬき  
 足に入つて来て、そつと僕の顔を覗く。僕は何だか人の氣色がすると思つて、眼を開いて  
 はつと老人と顔を見合せた。睡たいなら寝て居ても宜いが、此の町外れに、エリザベス朝  
 の遺跡があるから見に行かぬかといふ。僕はがばと起きて老人と一所に外へ出る。春は末  
 なから、英吉利の今日此頃、何とやらん風が寒い。



ホウ井ツトナツシニ村

寺のニシツナツキウホ

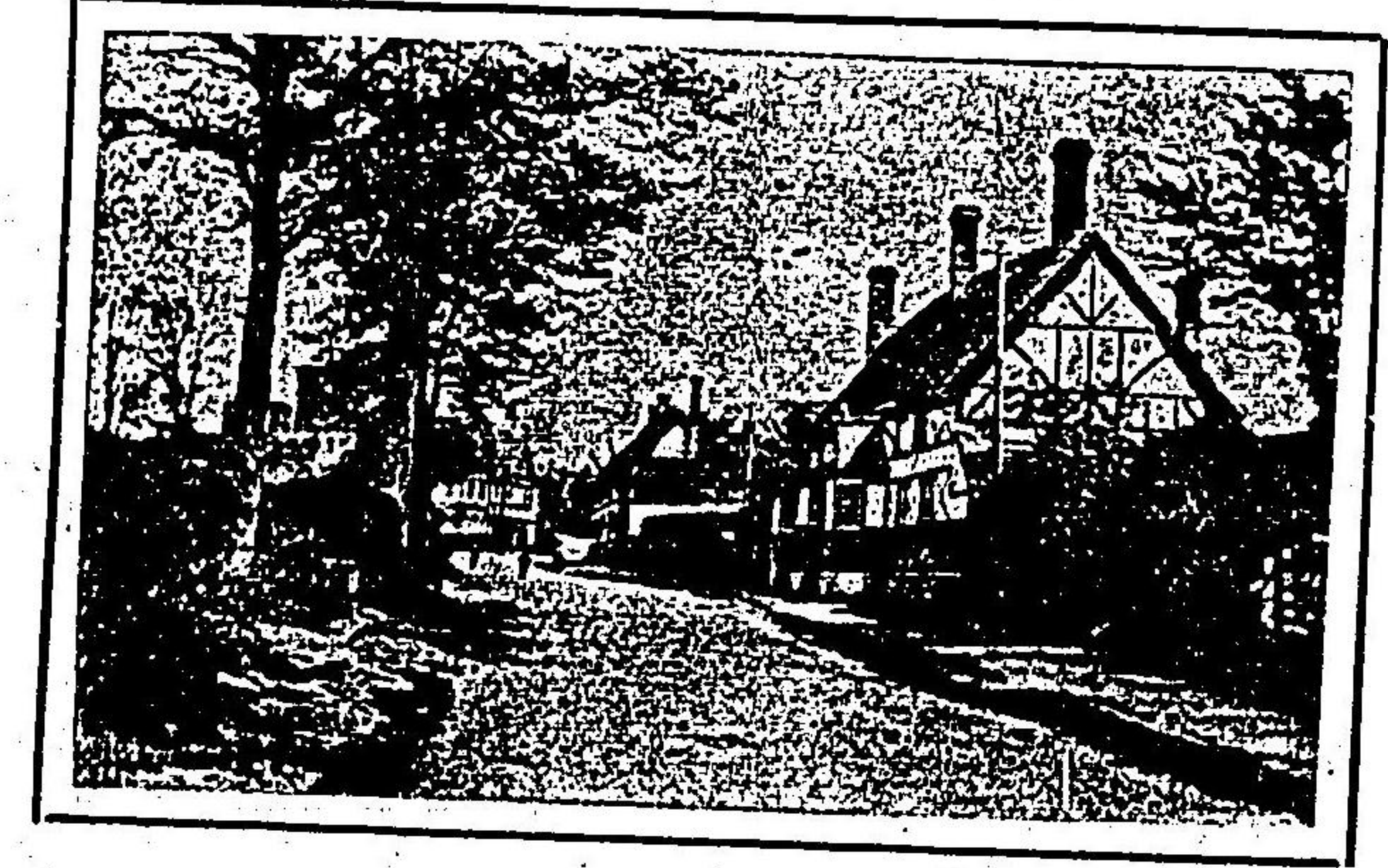
老人と道を歩くと、僕は遙に小さい。二歩三歩行く中に、互に歩調が亂れて来る。老人は刻銘に僕の足もどを見て、必ず踏みかへをする。やつと揃ふと又亂れる、又踏みかへる。之が老人の癖と見える。尤も、僕の足並は滅多な人と揃はぬので、倫敦では、人と連れ立って歩く毎に、いつも何だか気が置けたのである。

彼此二哩も歩いたと思ふうちに、目ざすホウキツトナツシニ村に着いた。小さな村で、別に見るに足るほどの物はないが、此の村にはエリザベス女王の頃に出来た家が、其の儘残つて居るので、  
亞米利加の觀光客などは、態々見に出かけて來

るといふ。家は凡て平家造で、煉瓦は使はず、小砂利を交へた土の壁を塗りめぐらしてある。其の壁の中へ無風流な太い柱や梁がはみ出して、之れが黒々と塗られて居る。屋根は古風な細かい瓦を用いたのもあるが、概して藁葺だから面白い。年所を経ること三四五十年にも及んだところで、中には軒傾き柱歪むたのもある。シエークスピアなどが悪戯さかりに遊んで廻つたのは、斯な家の列んだ所だつたらうかと思ひ出すと、急に其の頭に立ち返つて来たやうな気がする。町は人通りも少ない淋しい所で、如何にも田舎じみて居る。ストラトフロードを初め、ウリック州の各所に、此

ホウ井ツトナツシニ村

家のニシツナツキウホ



技師が家の晩餐  
百七十八  
の類の家がないではないが、斯う棟の低い藁葺の揃つたのは、成程此處に限る。  
村を一巡りして後、又老人に連れられて、レミントンに歸つた。此の邊の町々は、町とは  
いひながら、流石に鄙びて廣々と開けた草原もあれば、雲を透く大木の列んだのもある。道  
に墓地と覺えて、石碑の累々と立ち列んだのが見える。デ君、之を指さして、此の次の僕  
の住居は彼處だといふ。僕は聊か挨拶に困つた。

九、技師が家の晩餐

今晚は日の暮れ方から近所の森へ、ナイチンゲールの啼聲を聞きに行く約束であつた。  
ナイチンゲールの啼聲は、僕がレミントンに下つて來た目的の一つで、之は豫てデビス老  
人も承知して居た。連れ立つて家に歸ると、當地の電燈會社の技師長ジョーンス君といふ  
のが來て居る。四十少し過ぎた、悠長な物の言ひ方をする人で、殆ど金盃同様に耳が遠い。  
デ君は僕を此の人に紹介した後、ナイチンゲールの一件を話すと、ジョーンス君はやゝ暫

らく沈吟した後、おつくと語り出した。デ君は、僕とデ君とに電氣工場を見せて、夫れ  
からデ君の宅で晩餐を共にして、其の上で一所に連れて鳥の啼きさうな所へ出かけやうと  
いふのである。僕等は一も二もなく同意した。

此に於て、デ君は一步先きに歸る。僕等は後から工場に出かける。工場には格別變つたこ  
ともない。一巡見廻つて後、愈々デ君の宅へ行く。デ君の細君は病氣とかで家には居らず、  
可愛い男の子が二人あるばかり。日曜日といふので晩餐は極あつさりとするませる。デ君の  
耳の遠いので、デ君の眼の近いので、時々飛んでもない問答が初まつて随分笑はせられる。  
食事がすむと、デ君は此の向ふに居る時計屋の主人のチャンドラー君の宅へ行つて、娘の  
ハイオリンを聞くことになつて置いたから行かうといふ。僕もデ君も大賛成である。午後十  
時に近いに、此の邊の日はまだ全く暮れ切らぬので、僕等は食後の音楽をチャ君の家へ聞き  
に行く。チャ君は快活な、氣さくな人で、日本の珍客だとして快く僕を迎へた。十三になる娘  
がハイオリンを弾く、チャ君の妻君がピアノを弾く。興に乗じてジョーンス君もデビス君も



土産の懐中時計  
百八十

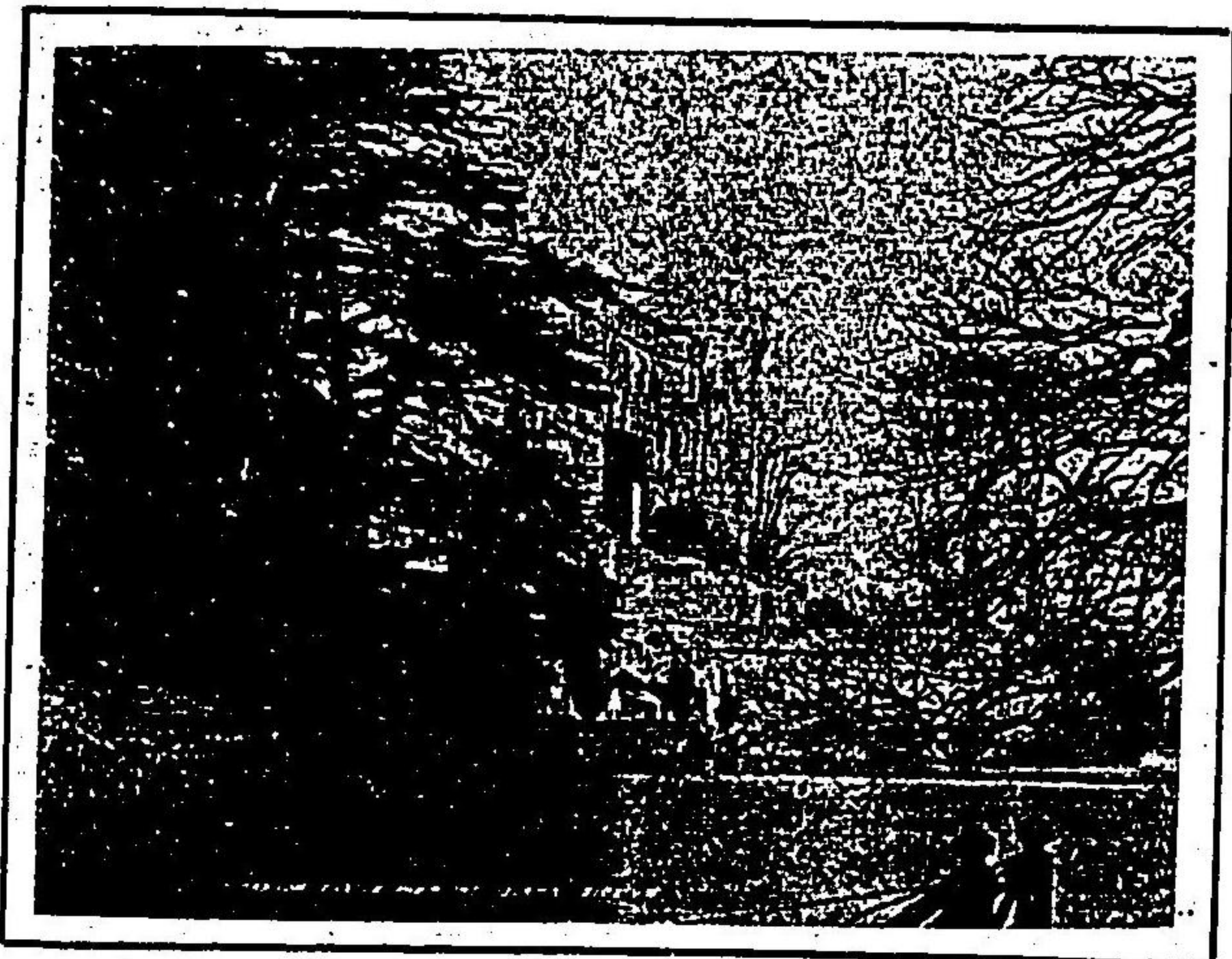
歌ひ出す。段々面白くなつて来た。ナイチンゲールは啼いたか啼かなかつたか、そんなことはお留守になつて仕舞つた。暖爐の前の椅子に身を横へて、シガー片手にウキスキーを啜りながら、音楽を聞くの樂は、實にも英吉利ならではと、僕は思つた。

妻君と娘が眼を告げて退いた後は、男ばかり四人居残つて、骨牌を取り出して、ポーカーを初める。夫が面白さについて、夜を深かして、愈此處を出たのは、十二時に近い頃であつた。

楽しい日曜日であつたと、僕は永く忘れられぬ。

### 十、土産の懐中時計

翌六月三日は、豫てデビス老人が拵へて置いた日程通り、朝から老人に連れられて、汽車でウァリツク城を見に行く。封建時代の舊城趾を見んことは、僕が年來の希望であつたが、此の初めて此の望を半ば遂げた。



城クワリヲウ

土産の懐中時計

城を見果て後、今度は馬車を飛ばせて、十字軍の猛將サキソンのガイが舊居であつたガイヌ、クリツフを見に行く。ガイヌ、クリツフは、パーシー卿の所領で、此處にガイが遠征より歸つて後、其の爵位城地を棄て、自ら切り開いた石室に隠れ住んだ故跡がある。此處を見終つて、又汽車でレミントンに歸つた。

停車場からデ君の家に向ふ途中で、自轉車を片手に引きながら、いそぐと来る老夫人がある。僕を見ると均しく、手を舉げて、餘り歸りが遅いから、晝飯は女中に任

せて置いて、之から何處やらへ出かける所だといふ。誰かと思つて能く見れば、デビス夫人である。老體を鼓して自轉車で遠飛とは、流石に迷宮露艦の碇綱を切つて、之を上海港外へ引き出さうとした人の妻君だけあつて、中々えらい。

歸つたのは彼此三時。デ君と差向ひで、延引ながら晝飯を喰べて、夫から今度はチャンドラー君の店へ時計を買ひに行つた。僕は倫敦で新聞の原稿を書いて、四百圓許り原稿料を貰つたから、紀念の爲に母と妻とに時計を買つて歸らうと思つて居た折、幸に昨晚チャ君と相識るに至つたので、デ君の忠告に従つて、此處で買ふことになつたのである。チャ君の住宅は一寸山の手と云つたやうな閑静な所に在るが、店はレミントンの大通パレード街の真中に在る。レミントンの時計屋の主人と聞くに、つい大磯鎌倉邊の小さな時計屋の親父を聯想するが、チャ君は獨逸、佛蘭西に永く時計の研究に出て居たこともあつて、學識もあれば、獨佛兩國の語も自由に話す。歸來壯大な時計店を此處に開いて、グリーンニツチから標準時の電達も受けければ、自分の考案で、電氣仕掛のシンクロノミーター装置（レミン

トン全市の時間を一定する仕組）もやつて居る。餘り馬鹿には出来ぬ人である。

時計を二つ買ったが、金がまだ少し餘つたので、麗子の大病を毛頭知らぬ僕は、麗子の爲に又一つ七寶側の懐中時計を買つた。之を買ふ時、何だか折角持つて歸つても、麗子が喜ぶだらうか何だらうかといふやうな、變な疑を不圖起した。其の時は馬鹿々々しいと我から打消して、格別氣にも留めなかつたが、今考へると、此の日は、丁度麗子の病勢次第に險惡を極めて、逆も見込はあるまいが、先づ千番に一番の果敢ない望をかけて、明日愈々大學病院へ入れると定まつた日であつた。

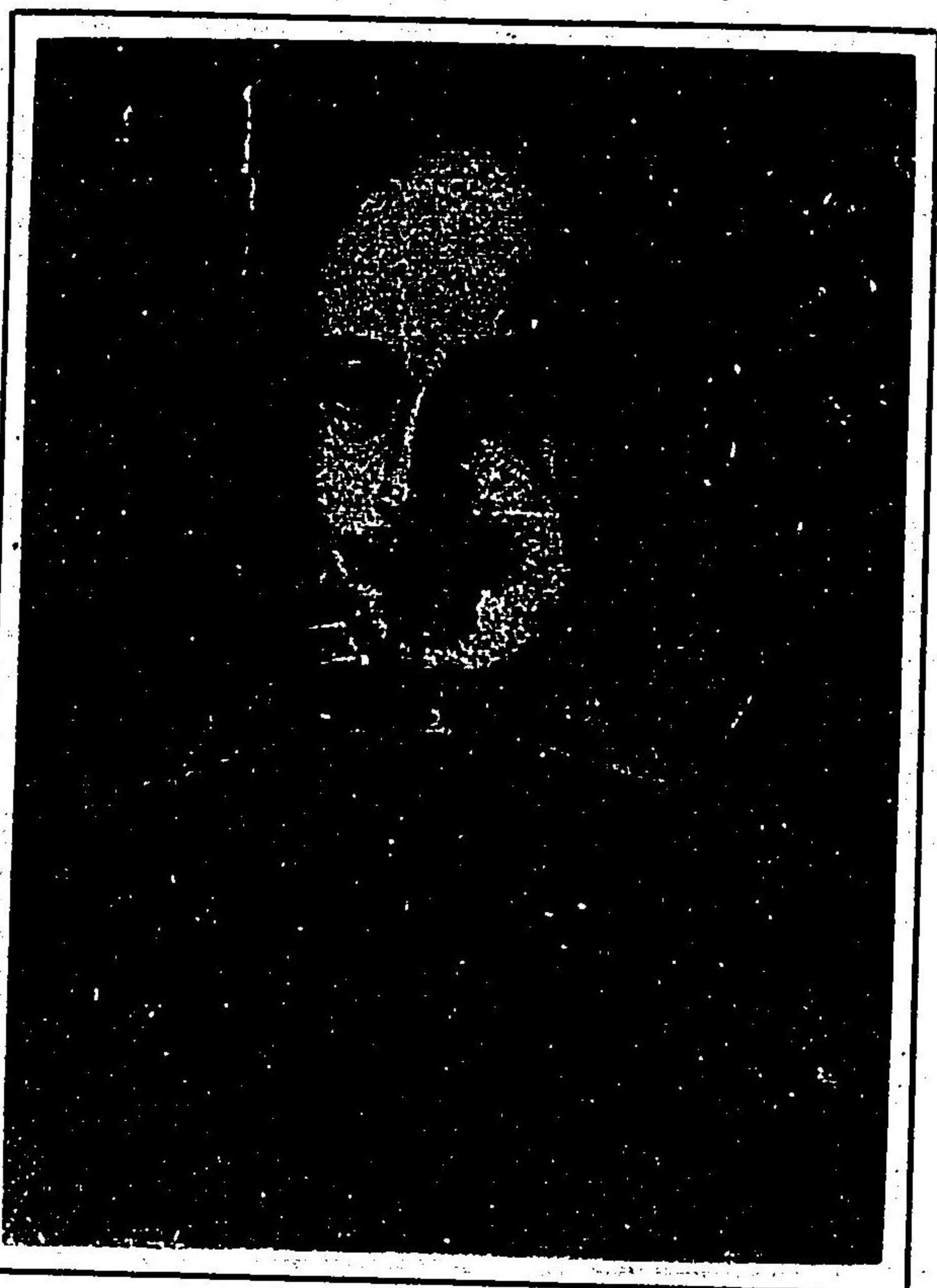
そんなことは知らず、此の夜はデ君の宅で、ジョーンス君を招いて晚餐を共にした後、一同打連れ立つて、ジ君の家へ出かけ、更にチャンドラー君を此處へ招いて、朝の一時近く迄、又もや例のポーカーをやつたのである。

兎角して、ナイチンゲールは此の夜もさうく聞き損つて仕舞つた。

### 十二、沙翁の生地

ストラトフロード、オン、アボン

六月四日には、老人と沙翁の生地ストラトフロードへ出かけることになった。朝食は済んだが、老人中々腰を上げぬ。生温くなった茶に咽喉を湿はして、先づ加奈陀殖民策を論ずる。加奈陀は何でも日英兩國人で開發しなければならぬといふので、其の手初めとして、兩國人互に相接觸する機會を作る爲には、クリケットの選手を雙方から送るのが一番だといふ。夫れから話頭が太平洋を越えて、支那分割論に及び、更に大西洋岸に舞ひ戻つて、葡萄牙滅亡論などに説き入つた。斯う話が大きくなると、老人椅子の脊へぐつたりと凭れて、左の手を振りながら、右の眼の左の隅から、凡そ九十度の角度に僕の右の方を睨んでやり出す。夫人が氣を揉んで汽車の時間を注意しても、中々動くものでない。



沙翁の生地

アービスクレーエシ聖詩  
(のもしせ存保に業生のド-ラフトラトス)

夫れほど落  
着いて居なが  
ら、いざ發車  
時間十分前と  
なるに、急に  
話を切つて急  
ぎ立ち上る。  
帽子を被るが  
早い、僕の  
手を取らん許  
りにして、停  
車場に駆け出

した。此處からストラトフロードは四十分の道程、何かといふ中はや着いた。汽車の中では、老人必ず僕に機關車の方を後にして腰を掛けさせる。正面に向くと能く風を引くといふ。先づ沙翁が生れた家といふに行つた。荒壁を廻らした低い木造の二階屋で、大阪邊の町家で見える様な格子窓が上にも下にもある。此の曠世の詩人の生れた室といふのには、沙翁の像と古ぼけた椅子が一つある切り、がらんとした大きな暖爐が室の隅に口を開いて居る。此の又暖爐なるものが馬鹿に大きくて、小さな人なら結構其の中に住める位ある。此處へ来る人は誰でも其の中へ一寸一度入つて見るものだと、番人が言ふから、僕も一寸入つて見た。何の面白くもない。

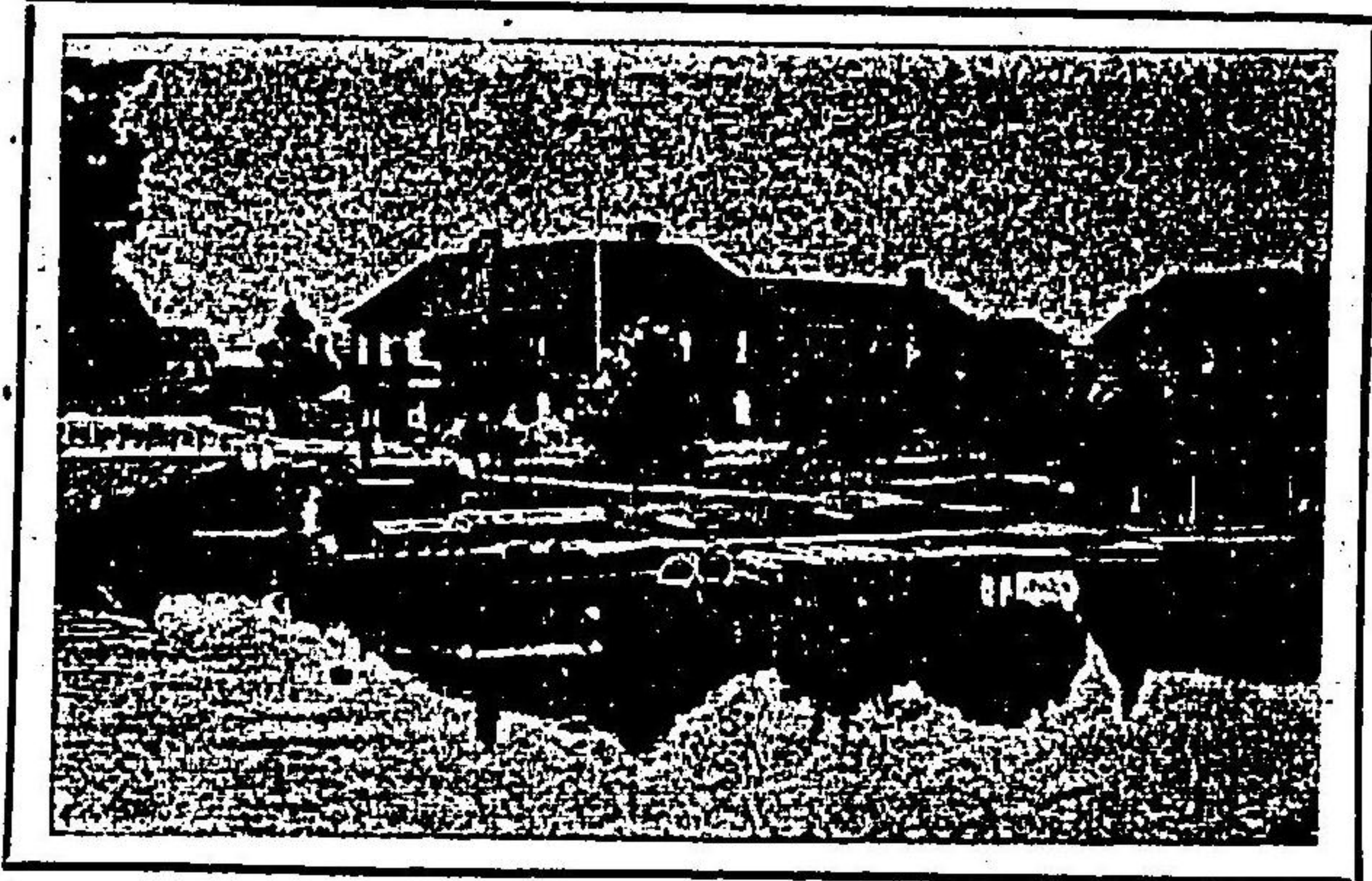
二階の一室に博物館が有つて、沙翁の遺物が數々列べてある。此處の番人は品の好い老女で、僕が此の家のことはワシントン、アーピングの書物で讀んで、子供の時から馴染だといふと、婆さん非常に喜んで、日本人は来る人も大抵アーピングを言ひ出すのが不思議だといふ。と言つて僕を兎ある柱の所へ連れて行つたが、此處にアーピングが直筆

で書いた沙翁を巾着に短詩が貼りつけて有る。「私もアーピングが大好きです」と婆さんは言つた。「卿の様に何もかも承知で来て下さると嬉しいが、亞米利加邊から見える方の中杯には随分ひどいのが有る。先達でも「シエキスピア君は今御在宅か」と尋ねて来た方が有つて大笑ひしたが、其の後門から一寸首を出して、「先生今書き居るかネ」と左も知つた様な顔で来た人があります。毎年六十箇國許りの人々が此處へ来るが、其の中數から言へば亞米利加人が半分です。」沙翁が生れた程も知らぬ様な人が、唯其の名だけを聞いて、人並らしく出掛けて来るなどは、餘程可笑しい。

屋根裏の寢室から階下の臺所迄残りなく見たが、アーピングで見た沙翁の椅子といふのは一向見當らぬ。聞けば、其の頃の什器で今は何一つ遺つたものがないといふ。尤も什器と言つたことで、其の頃の邊では、床の上に柔かい草の葉を敷物代りに敷いたといふ位だから、何せ大した物は無かつたに相違ない。之が今六十箇國の人の尋ね来る所とはえらい。歸りに入口の番人に一體此の家は今誰の持物だと聞いたたら、番人は得意氣に唯一語「ネー

シヨン(國民)とばかり答へた。成程、斯う來なくてはいかぬ。沙翁を埋めたトリニチー會堂に詣で、沙翁の誕生を書入れた古い記録や、教壇の後にある碑などを見る。有りし世の昔を思ひ出だして感頗る深い。此處に備へ附けた大きな訪客簿も二冊用意して、一冊は亞米利加人専用としてある。寺の門の扉には、丸い鐵環が一つあつて、昔はどんな罪人でも此處まで逃げて來て、此の環に手を觸れさへすれば、寺領内の民となつて、警吏も如何ともすることが出来なかつたのだといふ。老人はジャスチス、オブ、ピースとて、地方の司法事務に與る一種の名譽職を帯びて居るだけに、斯なことを頻に感心して聞いて居る。

之から沙翁記念劇場を見て、岸邊に立つた鴻巣ホテル(モで酒を酌んだが、微酔で外へ出ると、アポンの川風をぞ寒く身に沁みて、川水に映つたトリニチー會堂の塔の影が縁樹の間にほの見える。有り合せた端艇に飛び乗つて、老人自ら櫂を取り、此處を漕ぎ上り漕ぎ下ること數回にして、初めてレミントンに歸つたは彼此五時過である。歸つても老人は



ルアホトスホスンワス

沙翁の生地

妻君に叱られるとて、鴻巣ホテルのことは決して言はぬ。偶妻君が居なくなると、僕に目配せして、「宜い巢だつたな」と來る。

ストラトフアードから歸つて直ぐ茶になる。一體今頃迄何處に居たかと夫人が尋ねるのを、風に柳と受流して、老人はがぶりくとお茶のお代りばかりして居る。夫人が何かいふ毎に、頻りに僕の方へ目配せをする。夫人は夫れとも知らず、チーズの容器の蓋を明けて、「ひどい臭なこと」と言ひながら微の生えたゴルゴンゾーラを僕に侷めた。通を言ふ様だが、チーズは微の生えて青苔の様な香のするゴルゴンゾーラに限る。此處で老人の加奈陀經營策と夫人のク

リスチャン、サイエン、福がちやん、ぼんに初まつて、良暫く僕は相手をして居たが、餘り疲れたので、其の儘二階の僕の部屋へ歸つた。

十二、村の縁日

ぐつたり寢臺の上に寝そべつた間もなく、老人の靴音が聞えて、「面白いいものがあるから見に行かう」と引張出しに來た。何だと聞けば、「フエアだ」といふ。何だか分らぬが、一所に戶外へ出ると、村の人々が三々伍々相次で、南の方へ出かける。何したのかと聞くと、「フエアだ」といふ、彼れ此れ三四町も歩くと、左の方の空がばあど明るくなつて、電燈が輝々と見える。彼れは何だと聞いたら、「フエアだ」といふ。此の邊から人通が大分繁くなつて、頓て其處へ着くと、押し合ふ程の雑沓だ。方三四町も有らうといふ廣場に、幾つか天幕を張り渡して、見世物がある、蓄音機がある、道化芝居がある、メリーゴーラウンド(自動木馬)がある、スキッチバック(自動鐵道)がある、何の小屋の番人も聲を喚じ

て客を呼び立て居る。一體は何ですと聞くと、老人は相も變らず「フエアだ」といふ。成程、斯なのがフエアかと初めて合點が行つた。フエアといへば、ウアルーズ、フエア(世界博覽會)などの大きなものか、夫でなくても物の賣買を主眼とする市場と許り解して居たが、フエアの語原が「休日」の意味である所から見ても、斯な縁日の様なものがフエアの本義に叶ふものかも知れぬ。昔は此處へ田舎から連れて來た女を列べて、下女に賣つたものだが、近頃は唯もう子供の遊び場となつて仕舞つたと、老人が説明した。何でも一年に二度ほど開けて、其の日は村中の男女が總出で遊ぶのだといふ。如何にも老若男女、出も出たりだ。中にも子供が多い。太つちよりの娘が十人近くの腕白さうな小僧許り連れたのも見える。若い娘が七八人連で練り歩くのもある。總じて美人の多いレミントンのこととて、斯うして出歩く娘達にも、十人並勝れたのが八分通ある。之が腕白りの白い薄いシャツを着て、質素な壁の少いスカートを小りしく穿いた所は、淡泊として如何にも高尚で宜い。殊に見渡した所、此の大勢の娘の中で寶石一つ光らした

者が殆ど見えぬ。白粉をへこ／＼とさせた者に至つては、丸で唯の一人もない。大に我輩の「自然主義」を合する。

メリーゴラウンドには、年頃の娘が乗つてきやッきやと騒いで居る。スキツチバックには、子供を連れだつた勿體らしい村の學校の先生らしいのが、滑り下り滑り上る毎に、手を拍つて喜んで居る。如何にも面白さうだ。僕にもやらぬかと老人は言つたが、何ほ何でも、僕は彼の木馬に乗つて、嵯峨野の仲國といふ見えは出来ぬ。僕には出来ぬが、老人には随分乗つて見る氣が有つたらしい。とある見世物の前へ出る。薄汚い身なりの村の子供が十人ほど其の前に立つて、看板を見ながら、何やら喋つて居る、老人の姿を見ると、一齊に此方へ向き直つて、軽く禮をした。老人は衣囊から掴み出した幾何かの金を木戸番にやつて、此の子供残らず入れてやれと言ふ。さう言つたきり、さつさと此處を通り過ぎて、「ブーア、ブーイズ」と獨言の様に老人が言つた。其處へさや／＼と十七八の背の高い娘が三四人來る。老人は其の後姿を感に堪へた様な顔で、頭から足許迄見上げつ下しつして、「近頃英吉利

では女が段々大きくなつて、男は次第に小さくなる傾きがあるさうな。日本でもさうならうか」と聞いた。

餘り喉が渴いたので、近くの酒屋に入つて、僕は炭酸水を一本飲んだが、此處を出て家路に就くと、「炭酸水といふ奴は——」と、少し言ひ澁りながら、老人は初めた。「恐ろしいデギリレーチング（故と英語の儘でおく）の効のあるもので」と、漸々言つて仕舞つて、夫から頗る奇抜な實例を擧げて、盛に炭酸水論をやつた。併し如何な自然主義の僕も、之を此處に書く勇氣はない。老人は炭酸水に限らず、何でも手當り任せに問題を捉へて、議論の種にする人で、此の前にも金剛石が必ず日本にもあるといふ原理（？）を散々説いて、さて君さりの話だがと、自分がトランスバールの専門家から聞いて居た、金剛石を探し出す秘訣を僕に教へて呉れた。僕は自身で探しに行く氣はないが、誰か此の秘訣を百萬圓位に買つて呉れる人はないかと待つて居る。

歸れば晚餐の支度が出來て、老夫人が心盡しのアスバラガスが出た。風呂も沸いてると

古城の敗  
いふので、二階迄入りに行く、隣の居酒屋で酔われた村の百姓が、濁聲高く何やらん歌ふ聲が聞える。夫れが止むと、手を拍つ音、笑ふ聲、縁日だけにさも陽気な。

### 十三、古城の敗墟

ケニルウヲース

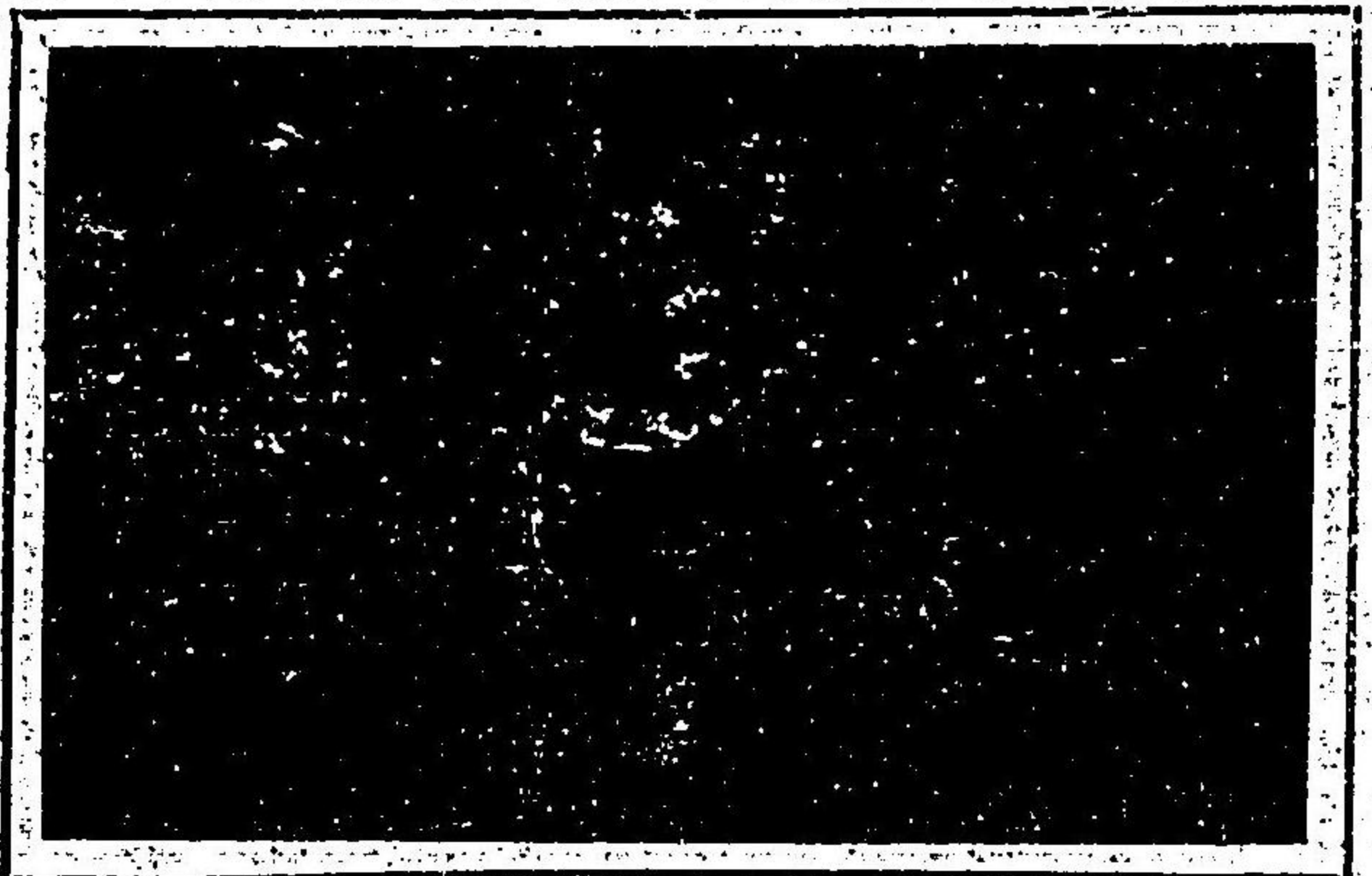
五日の朝早く倫敦の加藤中佐から電報が着いた。今夜ハイド、パーク、ホテルで催す山本海軍大將の晩餐會へ出て来いとの案内である。さては大將愈其の齎し來つた使命を全うして巴里へ立つのだなど、僕は心私かに祝賀した。後で中佐から聞けば、用が済むと殆ど同時に、それ出立といふので、大急ぎに晩餐會を開くことになり、請待状の印刷が間に合ぬ爲一々電報で案内したのだといふ。電報で「誰某大將某日某時某所の晩餐に於て誰某君の出席を求む」と三人稱の請待状を受取つたのは、僕も之が初てだ。宴會にも出たいし、此處にも居りたいし、何うしたものかと思案に迷つて居る所へ、老夫人が来て、配達人が待

つて居るから、返事は何うすると言つて來た。此の邊の電報配達は届け放しにせずして、一々返事の有無を聞いた上、返事があると聞けば、料金を一所に持つて歸つて呉れるのである。日本でも夫位の手数は見ても宜さうなものだ。僕は兎も角も出席の旨認めて、返電を頼むことにした。

夕の七時三十分開宴であるので、遅くも此處は三階の汽車で立たなければならなくなつた。夫迄に是非とも今日見に行く筈であつたケニルウヲースの古城趾へ出掛けやうと、急ぎデビス老人を促して家を出た。此處から道程は凡そ五哩、僕等は背の高い電車の吹送しの二階に乗つて、六月初の

古城の敗墟

川小のスーラウルニケ





古城の敗墟 百九十六

うすら寒い風を受けながら出かけた。電車の上でも、老人の加奈陀開發策が盛に出る。遠い昔を言へば、今のケニルウアースの古城の在る所には、羅馬時代に建てられた古い城砦が有つた。其の城の趾へ紀元八百年にサキソン王ケネルフが新一城砦を築いたのが、抑此のケニルウアース城の初まりで、ウキリアム征服王の子ヘンリー一世が之を其の臣クリントンに譲り、クリントンが之に大修理を加へた以來、更に世々の主が櫓を加へ岩を擴げて、遂に儼然たる英蘭ミッドランド諸州の雄鎮となるに至つたのである。其の間或は王の直轄する所となり、或は武臣の管領する所となり、花開き花散す幾春秋、城濠の水長へに碧を湛へ、樓臺の輪奐に依つて其の面目を改めはしなかつたが、果敢なき城の主は幾度興り幾度亡びたか知れぬ。兎角する中、エリザベス女王の朝に至つて、之を其の嬖臣レンスター伯爵に賜はり、伯爵自ら工を督じて、新に之を玉敷の臺に作り做した。工成つて後女王を此處に請じて、十有九日の間金殿の歌吹、玉樓の絃舞、心ゆくばかりに之をもてなし参らせたことがある。其の折レンスター伯爵が王の寵を恃んで、自ら之が配たら

んことを企て、奸臣ゾーニーに煽がれて、其の妻エミー、ロンサードを殺した顛末は、スコットが名著「ケニルウアース」の中に事も細に出で居る。僕等が城の由来を知るに至つたのも、實はスコットの此の小説から来たのである。是より後七十年、ステュアート王統一たび倒れて、クロムウエルの執政時代になつた時、城内の目ぼしい物は賣り飛ばす、城濠や城を圍んだ湖水は埋る、堅固に仕つらへた各城樓は孰れも私人の住宅となつて仕舞つた。是ばかりでさへ、早や城は昔の面影を留めぬ荒れ果てたものになつて居たものを、其の後幾百年、城の石垣石室は次第に叩き毀されて、手頭の小石は村人の勝手に持ち出す所となり、一時はさながら村の石切場同様の姿になつて、荒れた城は更に見る影もなく、一層荒れさびれたものになつたのである。今日では成るべく舊態を保存する積で、嚴重な監理人を置いて見張つては居るが、元より落莫たる古城の廢墟、レンスター伯爵が榮華の夢の跡として、儘にぼつくと訪ひ来る客のあるに過ぎない。

古城の敗墟

停車場からパーミンガムへ出る街道の左側に、小さな入口が有る。此處で六片の入塙料

を拂つて、一步其の中に踏み入れれば、レストアイ卿の建てた城門警固の衛士が詰所とて、四階造りの古い建物が直目につく。

メーの花石楠木の花の咲き亂れた間を通つて中に進めば、左の方はレストアイ卿の厩舎の中に置いて、ラン塔、ライター塔などいふ城の外廓、正面にはスコットのの中に屢出て來るモルチマー塔に通ずる細徑が有つて、其の右が昔の裏門、ブリーニーがエミーを連れ出した所とある。右の方は、終の生垣美しく結廻はされた一面の芝生で、其の芝生が爪先上りになつて、やゝ小高くなつた岡の上に、其處に、遙に、壁は破れ柱は折れ屋蓋残りなく消えて、唯斷礎の累々たるを存せるケニルウヲイスの本城が現れる。

青芝の處々に、幾百の羊が、世の治亂興亡を知らずげに戯れて居る。黄色な花の咲いた丈の低いゴースが、彼方此方に地を削つて居る。此處を過ぎて、昔の深の跡といふを左右に眺めながら先に進めば、前に廣庭、右にノルマンの固めと唱ふる櫓、左の方にはヘンリー八世が宮居の跡、其の奥少し引き入りたる所にレストアイ伯の殿居の跡がある。此の廣庭こそ、

温良にして篤學な失戀の騎士トレスリアンが、照渡る月をたよりに、レストアイと闘つた所、彼の殿居こそ、伯が何とかいふ惡典樂を謀つて、ひそ／＼とエミー毒害の事を議した所、思ひ出すと、若いエリザベスの花やかな御装、ライター、ラレーが生際美しい賢い顔、よぼ／＼爺のレーナムが勿體ぶつた容態など、あり／＼と目に映る。思ふにエミーがトレスリアンの室を脱出した後、庭の洞窟に隠れて、女王に窮状を訴へたのも、或は此の邊でなかつたらうか。

更に進むと、右の方に大きな料理場の跡がある。じめ／＼と濕つばい空氣が面を撲つて、蟋蟀の様な蟲が佗／＼と壁に取りついたりたまたま身動もせぬ。昔は三千の貴賓に侑めつべき珍羞佳肴の用意に、雪白の前掛甲斐々々しく、幾百の厨夫が右往左往に入亂れた所でもあつたらうか、今は僅に庭の跡に薄黒く煙の色らしいのを留めたばかり。料理場から廣庭を隔て、向側には、半ば毀れたホワイトホールに列んで、其の昔の便殿がある。衣冠束帯の人影は長へに失せて、鳥がうら哀しげに啼いて居る。廣庭の正面には、礎の破片、柱の崩れ

古城の敗墟  
たのが一面に轉つて、雑草の蓬々と茂つた、宏大な敷地がある。是が即ち其の頃の大宴會場の跡だといふ。今残つたのは見上ぐる許りの壁が奥の方に僅に立つたきり。侯伯貴紳の列を正して、エリザベスの饗宴に陪した記念は唯是許りである。斯る所には似つかはしい鳥



公爵ニスーラウルクニケ

が、此處にも頻りに飛び廻る。此の右の横から廊下を傳つて、地下室に下れば、之が其の頃の獄舎。二尺に餘る厚壁に尺四方にも足らぬ小窓が一つあるだけで、濕氣を帯びた空氣が微臭い風を送つて來

る。餘り心持の宜さうな所でもないやうななど、デビヌ老人が舌打をしながら言つた。之から再び上に出て、宴會場の横手から僅に残つた城樓の屋根の上に攀登れば、今迄の陰氣な敗屋とは打つて代つて、忽ち脚下に展開し來る萬頃の蒼野、——うね〜と曲つた細流が幾線白う其の間に染出されて、遙の森にほう〜と郭公の聲が聞える。此の見渡す限りの原が春水濺々たる湖水で有つて、彼方此方に見える小高い森が、其の頃の島であつたかと思ふと面白い。僕は老人とぐつたりと腰を草の上に下して、良久考へた。何を考へたか、止度もなく様々の考へが出る。萬感胸に何とかが言つて、難しい「撥まる」といふ字を書くのは、斯いふ時かと思つた。僕は此處で唯一人一時許りも考へ込んで見たいと思つたが、老人が又しても三時の汽車を言ひ出すので、名残惜くも初めて座を立つた。

レミントンに歸つて、暇乞をこ〜三時十五分に立つた。倫敦に着いたのは五時半で、宿に歸れば早や六時だ。何はさておき、不在中同宿の客に別に變りもなかつたかと思つて積

古城の敗墟

りで、女中のベチーに「ノー、チエンヂ？」と尋ねると「九一六だ」といふ。さあ分らぬ。全體夫は何の事と問ひ返せば、女中はすまして、今度は「九志六片あります」と答へた。僕は思はず其の顔を見上げて吹き出した。ベチーはチエンヂを釣銭と間違へて、出したに預けて置いた、切抜通信社の勘定を、突然に言ひ出したのである。

### 續レムの里

#### 一、未見の知己

次のレミントンには、同じ年の六月十五日を以て、ケンブリッジの側なるハンチンドンから出かけた。

是より前、ハンチンドンの人、瀬山某君とは、同じく僕が「メール」の記事を見て、突然書を書せて、僕に來遊を促して來た。文辭懇切、實情言外に溢れてゐる。其の最初に寄越した五月二十日附の書面に曰く、

僕もと武士の家に生る。今はバーナード夫人が家に仕へて、此の地に在ること三十年に及べり。君若し僕が地位の低きを意に介せず、僕が招請を容れて此の地に來り玉ふが如きことあらば、僕は君の爲に此の舊都の各所の君に與あるべしと思はるるものを示し參らせ得んことを、無上の光榮となすべし。倫敦キングスクロース停車場を八時四十五分に發し玉はゞ、十時六分當地に着すべく、午後は六時五十三分又は九時十七分發にて歸らるることを得ん。一夜を此處に明し玉はんこと亦可なり。日は何日にても君の好む所に任す。君若し此の光榮を僕に與へんす思ひ玉はゞ、願はくは二三日前に知らせ玉へ、敬具。

英文だから名は確と讀み分けられぬが、儘に姓の瀬山なることだけは知れた。其の名の未見の知己

未見の知已

二百四

毒であることは後に至つて聞いたのである。初は、日本人なら英文で書かなくても宜さうなものとも思つたが、其の書面の書き方が如何にも懇切なのに動かされて、僕は兎に角五月二十五日にお尋ね申さうとの返事を出しておいた。所で越えて二日、二度目の書面が着いた。

君が返書を得て、感謝言ふ所を知らず。唯君が選ばれたる日の折悪しく日曜日なるは、僕の甚遺憾とする所なり。日曜日には、何れの所も閉鎖せられ、前に言へる所の八時四十五分發の列車も亦なし。僕も初より之を語らざりしは、何等の愚なりこそ。願はくは、日曜日ならぬ日を選び玉へ。然し玉はど、僕は停車場迄君を出迎へ参らすべし、云々。

とある。

實はレミントンから倫敦に歸つて後、如何にもして今一度出かけて、再びケニルウヲースを訪ひ、又ナイチンゲールの聲も聞き、次手にオックスフオードへも寄つて見たいと考

へてゐたので、寧ろその事其の次手にハンチンドンへも寄つて見やうと心を定めた。乃ち先づ北の方ハンチンドンを訪ひ、西してレミントンに入り、更に南の方倫敦に歸るの途、半日をオックスフオードに送らうと、大體計畫を立て、愈六月十五日に出かける旨を瀬山君に報じた。六月十三日、三たび瀬山君の手紙が着いた。

尊翰披見、君が十五日に来るべき由の報に接し、僕の欣喜限なし。僕は必ずハンチンドン停車場に出迎ふべし。バーナード夫人も亦君と會せんことを樂とし、其の子息を合せて、君と午餐の卓を共にせんことを望めり。僕は此の日の好天気ならんことを望む。云々

二、クロムウエルの生地

ハンチンドン

六月十五日早朝僕は倫敦の宿を出て、キングスクロース停車場から、八時四十五分發の

クロムウエルの生地

二百五

急行で、ハンチンドンに向つた。ハンチンドンは倫敦を北に距ること約六十哩、オリバー、クロムウエルが生れた所である。十時六分此處に着いて、瀬山君に會つて見ると、君は英國に留まること既に三十餘年、英吉利の婦人と結婚して英吉利に歸化し、其の間殆ど全く日本人と語るの機なくして、何時しか盡く、日本語を忘れて仕舞つてゐるといふ始末。此の事は既に「大英遊記」の中に委しく書いてある。

停車場で瀬山君に會つて、其の足で直ぐ見物に出かけた。降りみ降らずみ氣の知れぬ英吉利の雨は、又もやしとくくと落ちて來る。

カウンチー病院に入つた。院長といふは年配の婦人で、之が懇に二人を案内して、院内残る所なく見せて呉れた。此の病院は今から六十年程前に建てたもので、其の維持費は主として有志者の義捐に仰いで居る。夫れ一人の患は萬人の患、村に病人の無くなるのは即ち村民一同の利益であるといふ所から、成るべく村民の入院を手輕にして、入院料とて一週僅に十八志を徴するに過ぎず、大抵の場合は施療を事として居るといふ。日本で

斯ういふ病院といふと、必ず埃だらけの汚ない建物の中に、食ひ詰めた藪醫者が二三人、せうことなしにごろついて居る位のものだが、此處のは流石に行届いたものだ。手術室、診察室、看護婦室、醫員室、病室等を順々に見て廻ると、何處やらの模範何々といふ物の模範らしからぬに比べて、模範ならぬ此處の設備の方が遙に模範らしい。閑靜で、清潔で、其の上に何處も彼處もくわらりとして明るい。廊下に一點の塵もなければ、階子段に草履の音高くはたくと走せ行く無遠慮な者もない。凡て病院の様子は看護婦の一言一行に知れるものだが、此處の看護婦の言語動作の静淑にして丁寧なことといつたら、逆も、聞さへあれば詰所に額を鳩めて、焼手をかちりながら、醫員や附添人の棚卸を事として居る者と比較にはならぬ。あはれ、東京を六十哩隔てた某々の小村に、こんな病院の出来るのは何百年後のことだらうかと思ふと、心細くなつた。

院内を見廻つて後、醫員の二婦人が案内で裏庭に出ると、花には事缺かぬ英吉利の庭とて、一面さまざまの花の色ざり、目の覺める心地がする。其の片側に木造の小屋が一つあ

つて、三面は板を覆ひ、一面は開け放しで僅に帳幕を垂れて居る。回復期の肺病患者を  
 収めて、戸外の空気療法を施す所ださうな。瀬山君と共につか／＼其の側に寄れば、中に  
 花の様な少女が二人坐つて居て、僕等を見ると均しく立ち上つて會釋した。瀬山君は持合  
 せた薔葉書を二人に與へる。僕はやるものがないので、例の肺病全快談を一席辯じて、  
 さも物識顔に横隔膜呼吸のことから、戸外療法のことなど、デピス老人式の氣焔を大分揚  
 げたが、側に居た醫員は、斯んなことが患者に取つて非常な慰安になるのですと、大に喜  
 んで呉れた。此の小屋には底に小さな車輪を四つ附けて、日向の方へ何方へも廻せる様に  
 してある。寒中でも、戸は閉めず火は用ひず、夫で居て寒くも何ともないと、病人の娘は  
 笑つた。

此處を出て、ウキドバ馬車製造工場といふを見に行く。瀬山君此の地に住すること二十  
 年、交友上下に通く、何處に行くとして識らざるはない。輕車肥馬の客も帽を脱し、短襦袢衣  
 の徒も亦手を舉げて行過る。此處の工場なども、木工、鍛工皆喜び迎へて、愛想よく案内

して呉れた。馬車に使ふ板は切出した材木を何年とか水に漬けて、幾月とか雨に曝らした  
 上で鋸ののださか、長々とシーズニングの講釋をするもあれば、馬車が次第に廢れて、近頃  
 は自動車の製造の方が多くなつたので、勝手が違つて困ると翻すものもある。丁度此處に當  
 地の領主サントウキツチ伯の注文した自動車が、荒方出来かけて居るのを見て、其の自動装  
 置が最新の何とか式だとか何だとか、僕には丸で分らぬ器械の説明をする人も出て來た。

親切といふは退屈なものだなと思つて、此處を出た。雨がまだ降つて居る。  
 頓て常春藤の隙間もなく絡みついた古いお寺に着いた。之はクロムウエルの初めて洗禮  
 を受けた所とかで、其の中に、彼れが誕生の書入をした記録がちらんと遺つて居る。古色  
 蒼然たる此の閑寂な堂の中は、閑として人の氣色全く絶えて、僅にステインド、グラスを  
 透して、五月雨の空の朧げな光が鬱陶しくさし込む許り。何とやら人をして襟を正さしむ  
 るものがある。故跡を尋ねるのは、酒を飲むやうなもので、雨の降る日に限る。

今度はクロムウエルが、初めて教育を受けたといふ、クロムウエル小學校に出かけた。其

クロムウエルの生地  
二百十  
の常用ひた教室は、今も尙其の當時の儘に保存して、承塵の上には、彼の状のある大きな顔の肖像が懸つてある。此處で受けた教育が基となつて、彼れが悲憤の餘り、遂にチャールズ第一世を斬つて、英國の王政を顛覆するに至つたかと思ふと、此の小さな教室のベンチにも、卓子にも、自由を重んずる英吉利人の思想が彫り附けられてあるやうな氣がする。

此處の校長は面白い若い人で、能く談す。談偶地理學教授の事に及ぶと、校長は地理の教授に山や川の名を無暗に詰め込むのは、徒に生徒の頭を疲らすに止まる。一國の依つて以て立つ所以が、政治關係であるか、商工業であるか、交通運輸の點であるかを教へて、斯いふ性質の國には何いふ山、彼いふ成立の國には何いふ港があるといふ風に、國の發達に伴ふ自然の順序を、教授の上にも追つて行けば、乾燥な地名の暗記よりは面白くもなるし、覚え易くもなる。と語り出した。而して其の揚句に世界各國の政治經濟に説き及んで、日本の財政が何うの斯うのと滔々と辯じ出す。財政に迂濶な僕は一方ならず面喰

つたが、之と同時に校外一步の世事を丸で心得ぬ、迂濶千萬な何處やらの小學先生に比べて、流石にクロムウエルの出た土地の先生だけあつて、自から選を異にした所があると感心もした。

辭して出やうとする所に、木工教室といふ新築があつた。之は生徒の望みにまかせて、簡単な大工の仕事を教へる所だといふ。僕は此處でスペインサーだか誰だかど、この人間にも行き渡つて一番大切なとは、子を育てる一事であるが、不幸にして、何處の學校にも育児に關する課目を置いたのがない。と言つたことを思ひ出した。大工の仕事なども矢張り夫れた。天性手先の器

クロムウエルの生地



町のンドンチンハ



クロムウエルの生垣  
二百十二  
用な者ならばこそあれ、左あらぬ限りの者は、一寸した柵を釣るにも、小さな鼠の穴一つ塞ぐにも、一々大工を呼んで来る。之を學校で習はせて置くといふのは、成程宜い思付であると思つた。

バーナード夫人の宅に二〇へ着くと、夫人の姉さんや妹が、僕を珍客だとして下へも置かぬ。此處で此の三人の婦人と卓を共にして、午餐の御馳走になつた。夫人の宅はクロムウエルの家の跡に建てたのだといふが、クロムウエルの遺物は何一つなくて、日本好きな故バーナード氏の蒐めた日本の品々が、客室から廊下から段階子の邊に、所狭き迄に陳べてある。中に大形の闘球盤が一枚ある。之も日本のかと思ひたら、夫人は笑つて、夫はシューベットと言つて、佛蘭西から来たものだと言つた。闘球盤を日本の發明とのみ心得て居た僕は、此に初めて、之を佛蘭西から出たものと思つたのである。

雨が霽れたので、食後は瀬山君と其の娘と三人連で、警察の獄舎を見に行つた。之は警察署の裏にあつて、輕罪犯の者を禁錮しておく所だ。薄暗い石壁の兩側に檻房があつて、

一人宛入れてある。案内の巡查が、此れは何犯、彼は何罪と一々説明して行くと、中なる囚人は苦い顔をして目禮する。にたりと笑つて、「今日は」と聲を掛けたのも有つた。泥坊から「今日は」は聊か驚く。巡查は格別叱りもしないで、丸で友達同志の様な調子で談して居る。英語に敬語が少いから、さう聞えるのかも知れぬ。

此處からサンドウキツチ卿の居城ヒンチンブルーク(二)を見て、歸途に此の村の麥酒醸造場に入つた。麥芽の製造から麥酒の瓶詰の所迄巡覽したが、日本に麥酒のあることをさへ知らぬ瀬山君は、頻に「大きなものですか」と感心を促しに来る。が併し、此の小さな工場を見て、僕は初めて日本にも大きなものがあるを誇り得ることとなつた。病院を見ても、警察を見ても、學校を見ても、馬車屋を見ても、貴族の邸を見ても、唯もう遠く日本の及ばぬ所とのみ見て来たが、麥酒の醸造場だけは、慥に日本にもつと立派なのが幾らもある。——之を平たく言ひ直すと、衛生司法教育交通は皆負けるが、酒なら来いといふことになる。

三、雨の田舎道

雨が漸く霽れる。一先バーナード夫人の宅へ歸ると、丁度お茶の時刻になつた。雨あがりの庭の若葉を眺めながら、香氣のいゝ錫蘭茶を啜りながら、老夫人や其の姉妹を相手に、やゝ暫し様々の物語をしたが、今朝既にレミントンの方へ電報を打つて置いたことでもあり、天氣が何う又變るか分らぬので、今晚は泊つて行けといふ夫人の勧めを強て斷つて、瀬山君と一所に停車場に駆けつけた。

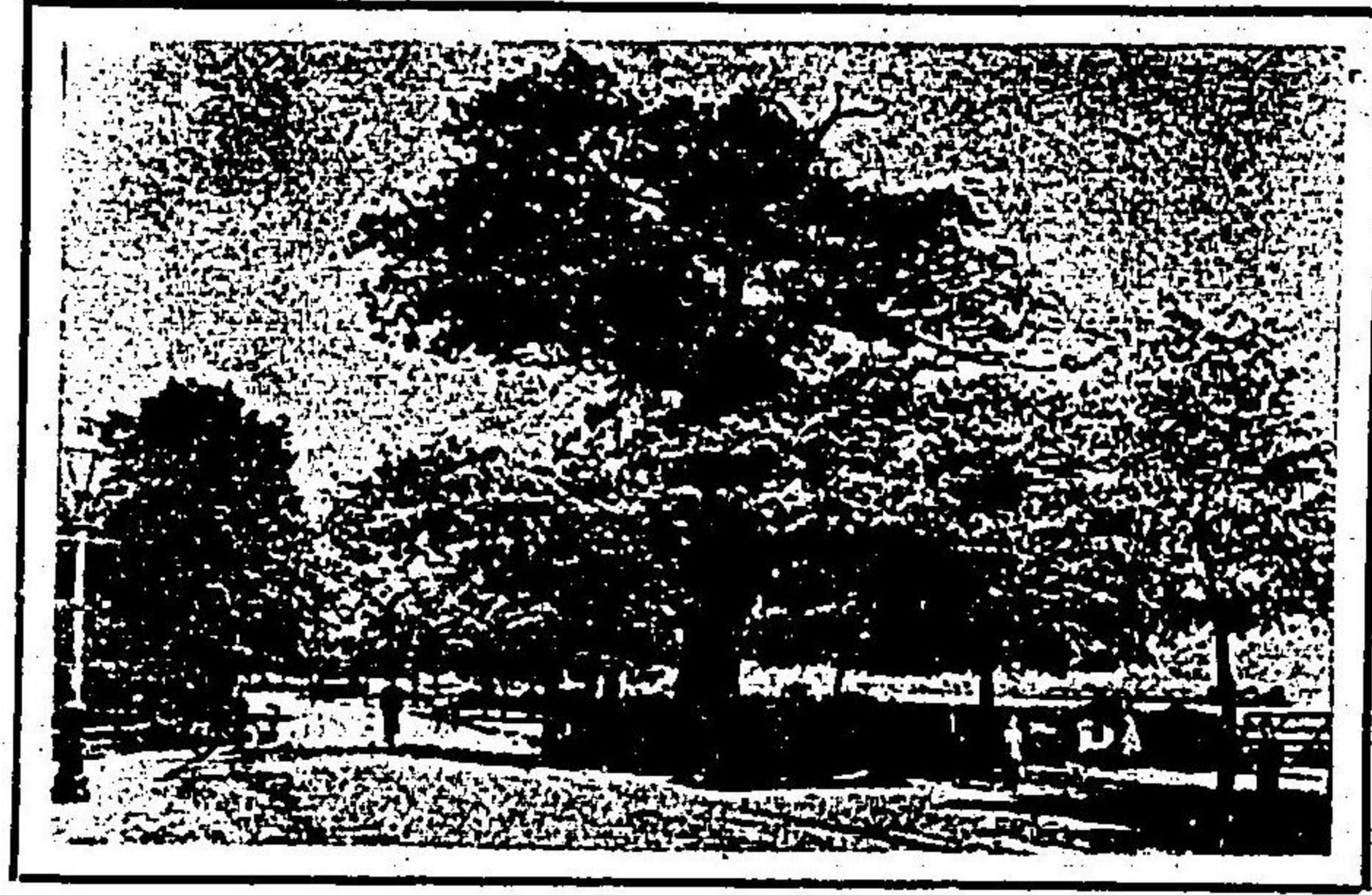
五時二十一分にハンチンドンを立つた。見送りに來た瀬山君のモーニングコートが何時迄もブラットフォームに見える。夫が軌道の曲り角で消え失せたのを見届けて、初めて座に着くと、八人詰の狭い車室に、お客は三十恰好の書生風の人と僕と唯二人。勝手の知れぬ土地に、然も之からレミントン迄行くに、二度も三度も乗替へなければならぬといふので、此の未如何に成り行くことやらと、非常に心細くなる。一體レミントンは、ハンチンドンから

正西少し南に寄つた所に在るのだが、汽車は先づ北の方のケタリングへ行く、夫から更に一層西北に上つてレストアーへ出て、今度はレストアーから南の方ラグビーに戻り、夫れから更に南に後戻りをするのである。丸で矢を十分に矯めて置いて、一度に切つて放つやうな仕組だ。一つ乗替損ねたら、何んな處へ迷つて行くか知れたものぢやない。——雨が又ぼつくとやつて來た。

見る限りの青野原に、時々小さな蕪葺が二つ三つ見える。物淋しい英吉利の田舎道を、此の短區間列車はのそりと歩を運んで、停車場毎に休んで行く。乗替驛が何番目の停車場だか皆目分らぬので、停車する毎に氣が氣でない。夫れに當地の停車場では、驛名を飛んでもない所へ書いておくので、一々頭を窓から突出して驛夫に聞かなければならぬ。其奴が運よく言葉の分り易い男だといふが、妙な田舎訛りでやられると、二度も三度も聞き直さぬと分らぬ。實に油斷も際もあつたものでない。隣の男が大きな欠伸をして、「のろ臭い！」と舌打と共に獨言を言つたのを機會に、ケタリングはまだかと聞けば、之から三ツ目

とやら教へて呉れた。  
 一つ二つ三つ、果してケタリングへ着いた。車を飛び出したのは宜かつたが、何處で乗り替へるか分らぬ。驛夫に聞くと、噂々説明して呉れた揚句、僕が一向合點せぬらしいのを見て取つて、自身で列車迄案内して呉れた。今度の列車には娘が二人に五十位の男が一人で、大分賑かた。其處へ裾から背中へかけて頭迄飛沫を上げた男が飛込んで来た。一同之に眼を注いで、孰も其の泥は何したのだと、心安げに尋ねると、男は、いや斯な汚い風で誠に済みませんが、實は馬を何やらしてと、其の泥まみれになつた由來を得意氣に話して居る。此の男車の中では四方へ氣兼ねて小さくなつて居た上、次の驛では、丁寧に一同に挨拶した上で車を出た。  
 レスターに着くと、當にした時間にラグビー經由の汽車は今日出ないといふ。是れ大變也。僕は大きごついた。停車場の中を駆け廻つて、彼地で聞き此地で尋ねて、漸くナニトントンを経てレミントンへ出る列車のあるのを見つけて、初めて胸を撫で下したのである。

ラグビー經由とは違つて、此奴はレスターから西南に下つて、一旦は肝腎のレミントンより西に在るナニトントンに出で、此處で乗り替へて、更にコベントリーを通つて東南に逆戻りをするので、丁度稲妻なりに、へこへこ折れた様な廻り道だ。併し先づ乗つてさへ居れば、何時か先方へ着くことにはなつた。幸ひ乗合は田舎の人の心安さに、何時しか親しく様々のことを話し交す中となつて、十時過無事レミントンに着いた時は、土地不案内で困るだらうとて、態々デビス老人の宅迄送つてくれる人さへ出来た。  
 デビス老人は、僕をラグビーへ迎へに出たとして不在だ。老夫人はいそぐと僕を迎へて、何うせ歸りは遅くなるから、夫れに構はず寝て呉れといふので、夫人が急料理のトーストをお茶で流し込んで、其の儘例の二階の臥床に入つた。隣の居酒屋ではまだ騒いでゐる。やれ／＼眠たい。



心中の蘭英

村の日曜日

ふらりと老人と一所に外へ出る。さしも賑かな  
 ビクトリア通も、今日は戸々、盡く戸を鎖して、人  
 影さては、唯教會に通ふ善男善女が彼地此地聖書  
 片手に往き交ふの姿、後生氣のなさうな若い男  
 女が遠乗にでも出掛けるか、自轉車を列ねて走り  
 行くばかり。並木の美しいアベニューを通り過ぎ  
 て、彼れ此れ一哩、レミントンの町々が殆ど盡きか  
 けた所迄出た。此の邊は兩側に低い牛垣を廻ら  
 して、垣の中は家も何もない例の英吉利流の、牧  
 場だか草原がたゞ廣々と打續く。此處に年古りた  
 樅の大木の、參天の枝を廣げたのが道の中央に立  
 つて居て、周圍には玉垣を結つてある。此の樅の

二百十九

村の日曜日

四、村の日曜日

二百十八

翌六月十六日の朝は、昨日の疲れに寝過して、九時頃食堂へ下りると、老人夫婦は新聞  
 を見ながら、僕を待つて居た。「昨日ラグビー經由と言ふ電報であつたが、時間表を見ると、  
 そんな汽車は見當らぬ。若し間違つては大變と思つて、早速出かけたが、幾何待つても來  
 ない。停車場でもやんと二人分の晚餐を用意させて、三回列車を待つたが、三度とも影が見  
 えぬので、到頭十二時過に悄然と引上げて來た。所で歸つて見ると、先刻來てもう寝て居る  
 といふので、大に安心しました」と、老人は相變らずお世辭が宜い。老人を夜深迄待せて、  
 自分だけ寢たのは罪なやうな氣もする。  
 珍らしく空がからりと霽れて、裏のポプラの樹に夏の初の日影長閑にさして居る。今  
 日は日曜日とて、近い邊の教會では、絶間もなく鐘が鳴る。「坊主が儲け居る哩」と、老人が  
 うつかり口を滑らして、又お婆さんに此られた。

村の日曜日

二百二十

樹を、此の邊では「英蘭の中心」と唱へて居る。何から割出したものか、此處が英蘭の中心といふことに成つて居ると、老人が笑つた。此の樹の側に造りつけた共同椅子へ腰を下して、老人は盛に日本と加奈陀の聯合工業發展策を論ずる。金は自分が出すから僕に一つやれといふ。僕は生を一普の筆に託して江湖に放浪する者で、逆もそんな小面倒なことをやる者でないと言ふと、「夫では君の子供が學校へ行く様になつたら、英國へ寄越し玉へ。私が教育してやる。」といふ。加奈陀開發策が妙な所へぐれて、檉の木の下で談判は僕の子供に及んだ。夫にしても、七十近い老人が僕の子供を教育して、夫から何かやり出さうとは、氣の長いにも驚くが、元氣の宜いものにも驚く。

家に歸れば、親類の子だといふ五歳になる可愛らしい男の兒が遊びに来て居る。水兵服を着て居るが、女の様な顔で、前髪はちりちりと縮らせて、小さな櫛をさしてゐる。リダーで讀んだカールといふは、唯「縮れ毛」を許り解して居たが、斯な念の入つたことをするものかとは、此の時初めて知つた。人見知りをしてない、人なつこい、歐羅巴の子供の

ことゝて、突然僕の膝の上に飛び上つて、おめす慮せず、いろ／＼のことを廻らぬ舌で語り出す。君は何歳といへば五歳、名はと問へばにいと笑つて、重々しい口調で「ヤング、ソルジャー！」

午餐は一所にと、此の少兵士は言ふ。子供は下でケート(召使ひの名)と一所にお喫りど、老夫人が言ふ。柔順に下に行つて仕舞つた。晝飯の後、少し部屋で休んで居ると、又やつて来て、お客が来たから出て来い云ふ。客室に行つて見ると、タイラー君、パリス君、パリス君の妻君などいふ若いお客が尋ねて来て居る。之に一々紹介せられて、談が段々賑やかになつた。お茶の時刻になつて、一同して裏の芝生でローン、ボールをやる。眼の近い老人は妙な所へ見當をつけるので、少兵士がきやきやと騒ぐ。

晚餐は主客合せて六人。日曜日だから何もないがどの斷りで、ロースト、ラムの大きな肉を真中にして初めた。食後は老夫人がピアノを弾く、老人が歌ふ、パリス君の細君が細い聲で歌ふ。今度は細君が弾くから、僕に「君が代」を歌へといふ。僕だつて「君が代」

村の日曜日

二百二十一

位は歌へる。ピアノの側に立つて、分りもせぬ譜を片手に持つて、眞面目にやつて仕舞ふと、皆々お葬式の歌みたいだといふ。勿體ないことを言ふものでない。

其の内お客は少兵士を先頭にして、追々歸つて仕舞ふ。間もなく舊識の技師ジョーンズ君から使が来て、チャンドラー君も来て居るから、玉突に來いと言つて來た。玉を突いて、ボーカーをやつて、夫からウキスキーを酌む約束なのである。

巴里、倫敦で日曜日ほど詰らぬものはないと思つた僕も、成程斯な具合に暮して見ると面白と思つた。

五、分れの接吻

今日はコモントリーのラヂウヲース自動車製造會社(三三)の案内で、自動車の遠乗をする約束になつてゐる。九時五分に汽車が出るので、夫迄に一寸髭を剃つて來るこゝで、老人は朝飯が済むなり出かけたさき、頓と歸つて來ない。時は段々迫る、老人は一向見えす、

僕も、老夫人も、女中のケートも、氣を揉んで頻に評定をするが埒が明かぬ。急發車時間十五分程前になつた。僕は堪り兼ねて、斬髪屋は何處だぞ聞くこゝ、つい小半丁の南だといふので、早速出かけて見る。何處の村にも能くある間口一間半許りの小さな店で、外面に例の飴棒の看板が出てゐる。戸を開けると、早くも正面の鏡に映つた僕姿を見て、老人が聲を上げた。「お待ち申して相すまぬが今直濟むといふ。見れば此の家の主人らしいのと下剃だが、今しも二人のお客の髭を剃つて居る所で、外に今一人腰を掛けて馬方の様な鬚だらけな顔をした男が待つて居る。主人も下剃も三人の客も頻に何か話し合つて居る所、とんと日本の小田原邊の髪結床と言つた様な體だ。組合員の智識を増進し品行を方正ならしめんが爲に「美髮會」を組織し、月刊雑誌「美髮」を發行すといふ底のえらいものでは無論ない。愚按するに、老人は此處で例の加奈陀開發策か何かをやり出して、四人を相手に一席辯じたに相違ない。屹度夫れで遅くなつたのだ。

「タイム？」老人は耳の邊に石鹼の泡の残つた顔を振り向けていふ。「タイム！」僕は戸

口を入らうか、何うしやうかと、中腰になつて答へた。もう十分しかない。下刺は今しも濟んだ一人の男の頭を両手で洗ひながら、凝と僕の顔を見て居る。入るなら入る、出るなら出る、中腰で居て呉れては寒い風が入つて困るといふやうな顔だ。僕は満更夫を知らぬでもないが、入れば遅くなる、出て居ては寒い、此を以ての故に即ち中腰であるといふやうな顔をする。

其の中老人は顔も洗はずに出て来た。外は風が寒い。老人は剃立の頬を擦りながら、はう／＼言つて居る。老人は背が高いので歩が早い。驅出すやうに急いで、頓て宅の前迄戻ると、細君が氣になつたものと見えて、戸口に待つて居た。老人は一寸と言つて飛込むから、何か忘れ物でもしたかなと思つて見て居ると、いやらしい哉、此の老夫婦は戸口で僕に尻を向けたまゝ、抱つき合つて、ちゆう／＼と接吻をするのだ。ベッ！ベッ！汚ならしい。接吻が一ゲーム終つてから、流石の老人もちと氣がさしたか、僕の方を向いて、「アン、イングリシユ、カスタム。カーント、ヘルプ」(習慣だから仕方がない)と笑つた。沙翁の

オセロの中に、オセロが其の女房のデスメナを殺さうとする最後の幕の中に、斯ういふことがある。オセロが劔を抜いて女の寢て居る傍へ行つたは宜いが、接吻しては顔を眺め、又しては又眺め、今一度／＼とやつてゐる中に、到頭女が眼を覺して仕舞ふ。僕は此處を讀む毎に、其のでれ／＼と思ひ切りの悪い處が齒痒くて堪らぬ。所で夫が今汽車の間に合ふか合はぬか寸刻を争ふ時になつて、悠々として之だ。之で汽車に後れたら何すると、僕は恨めしくなつた。

時を利すこと僅に三分ばかり。後れては大變と、二人で停車場迄駆け出した。老人が南阿弗利加仕込の驅足恐ろしく疾い。停車場の坂道を喘ぎ／＼走り上つて、漸とプラットフォームに入ると、時計は今しも九時七分、正に二分後れた。『シー？』(ほら)僕は忌々しさに呟いた。所が僕の言葉の終らぬ中に、汽車ががら／＼と着いた。汽車が幸ひと二分ほど遅れたのである。老人は満面に笑を湛へて、両手をばつと開きながら、鸚鵡返しに『シー！(それ)』

分れの接吻

之からコベントリーに着いて、會社の迎の自動車で工場に行き、更にパーミンガムに廻り、コベントリーに歸り、而して又もやケニルウラスの敗墟に出掛けたことは、「大英遊記」の方に在る。此處で自動車は返して、今日こそはとばかり、僕は此の敗墟に緩くりと心ゆく迄に萬感を胸に「撰らせた。」兎角してレミントンに歸つたは、夕の六時少し過ぎ。老人も今日は大分疲れたらしい。

### 六、公園の音楽會

今晚ジエフソン公園に音楽會がある。老人を誘つて見たら、少し込み入つた書き物があつて行けぬといふので、態々僕をチャンドラー君の宅へ送り届けて、チャ君を誘つて呉れた。分れる時戸口の鍵を僕に渡して、いくら遅く歸つても構はぬが、廊下の瓦斯は細くしておくと、老人だけに、中々細かい注意をして行つた。

チャ君の細君も一所に行くことになつた。近所にレー嬢とて獨暮しの金持の婦人が居る。

之を誘ひ合せると、丁度家の前の大きな縦の樹の下で、芝生に長椅子を横へて、小説とか詩集だかを讀んで居た。年の頃は四十四五でもあらうか。獨暮しの金持で、大きな地所に、花園やら温室やらを仕つらへて、花いちり小説いちりなどは如何にも暢氣らしい。獨身の女の多い英吉利のことで、誰も怪しむ者はないが、日本なら儘に問題になる所だ。レー嬢が差支へあつて行けぬといふので、僕等は其の庭をぐるぐると廻つた後、公園へ出た。

公園では一片づゝの入場料を取る。まだ暮れ切らぬ夏の夕の涼しさに、ぞろぞろと大勢の男女が聞きに入る。音楽堂は日比谷のと違つて、四角な一方口の舞臺風に出来て、聴衆の席は前に向いた所に限つて居る。此處には樽を結つて、其の中の椅子一脚二片か其處等で貸すことになつて居るが、僕等の行つた時は、もう之が一杯に詰つて、殆ど空席がない。餘儀なく僕等は樽の外の人込の中に立つて聞いて居た。此の邊からテニス、コートの方へかけて、村の若い男女が幾組幾組十組手を組み合つて歩いて居るが、田舎だけにピカデリー邊で見るやうな魔性の奴の、べとくと塗りこくつたのが見えぬので、何だか見心地が宜



い。メーの樹の立ち列んだ邊をふらり〜とやつて行く影が、次第に夕闇に消えて、男の  
 麥稈の帽子と女の白い衣物だけが、ほの白く見える。片方では又埒の外だけに氣が置けぬ  
 と覺えて、たわいもないことを言つては笑ひ興する男女が、彼地にも此地にもある。一寸  
 ゴールドスマットの「寒村行」の初めの方の句が思出されるやうな光景——と氣取つ  
 て言へば、先言へる所である。

樂堂の上には電燈眩ゆく輝いて、立ち代り入れ代り、歌ふもあれば踊るもある。此等は  
 多く旅稼の藝人であるが、之を村で雇入れて、村人の慰みに演奏させるのだと、チャ君が  
 いふ。日比谷の演奏は結構に相違ないが、此處のは美しい女も出れば、道化た男も出る、可  
 笑しい身振もあれば、花やかな合唱もあつて、變化があるだけに面白くもあり、愛嬌を命  
 とする商賈人だけに、聞いて居て肩が凝らぬ。音楽會といつても、聲樂が主で、夫れに耳  
 と共に目をも悦ばせる仕組になつて居るので、一寸寄席じみた所がある。耳に簀の入るや  
 うな恐しい高いソプラノの獨唱があるかと思へば、能くあれで聲がかすれぬと思ふやうな

ベースの男が足拍子面白く歌ふ。一寸日本では聞けぬ所だ。殊に僕の好きなのは、其の道  
 で何とか名があるだらうが、節の變化の極めて速い、急調の陽氣な流行歌の合唱で、僕は  
 日本にも斯んなのがあれば宜いと、いつも思ふのである。日本でこんな種類を云へば、先  
 づ「がんにん坊主」とか何とかいふ奴位のものだが、幾ら自然主義の世の中でも、彼奴を  
 高座で合唱する勇氣のある奴は恐らくあるまい。斯ういふ元氣な節を聴きつけて居るから、  
 僕に「君が代」を歌はせて、お葬式の歌みたいだなと言ふのである、日本に居てこそ、耳  
 馴れて夫程にないが、如何にも之に比べると、伊太利や佛蘭西の國歌は陽氣で面白いに遠  
 ひない。

演奏果て後、チャ君と二人で近所のホテルで玉をついた。此處の玉臺にはポケットに  
 入つた玉が、其の底から出て、種々のやうな所を傳つて、くる〜と突手の側迄轉がつて来る  
 仕組になつて居る。文明といふは無性なものだと思つた。玉をついて居る中、ホテルの主人  
 が出て来て、一所にバーでウキスキーの杯を擧げる。又しても日英同盟の祝杯である。

オックスフォード  
二百三十  
兎角して老人の宅に歸つたのは、十二時近く。成程瓦斯は細くしてあつた。

五、オックスフワード

其の翌十六日の朝デビス夫人夫婦に暇を告げて、レミントンを出た僕は、倫敦への歸り途オックスフワードで一先づ汽車を下りた。前日「時事」の小山君の紹介で頼んでおいた永井柳太郎君は、案内の爲とて、態々停車場迄出て呉れて居る。初対面ではあるが、其處は日本人と日本人、車の窓とブラットフォームから互に顔を見合せて、やつと言つたら、もう十年の知己同様、其の儘打連れ立つて、オックスフワード大學の見物に出かけた。僕は此處を世界に名だる教育の淵源と見て尋ねたのではない。宗教改革のささくさ跡を引ふる爲に來たのでもない。さりさて又内亂當時英國政治の中心としてやかまこかつた、歴史を調べるといふ譯では尙更ない。僕が一個の私事に及んで甚だ相すまぬが、僕は今から十餘年前、不圖した事から運よく或筋の獎學資金を受けて、此處のマンチェスター、コレ

ヂへ留學する筈であつたのを、不圖した所から止められて、來損つたことがある。其の以來、此の地は何とやらなつかしい一種の故郷の様な氣がする。誰にもあることだらうが、自分が少くも三四年は來り住すべかりし筈の所へ、偶然來て見て、若し彼の時來て居たらは彼もあり斯うも有つたらうと考へるのは、頗る異様の感があるものだ。僕は此の異様の感がして見たさにやつて來た。所が、其のマンチェスター、コレヂへは、永井といふ早稻田大學の卒業生が、僕と同じ筋の獎學資金で來て居る。

一寸断つておくが、オックスフワード大學と言つたさて、日本の帝國大學の様に組織的分科で出來た學校があるのではない。獨立した十九のコレヂがあつて、之を統一する一種の行政機關があるだけのもので、言はず此のコレヂの全體を總稱して大學とは言ふのである。尤も大學とは「組合」の義と、字引を引けば書いてある。但此の組合は頗るやかましい組合で、或點迄は當地方に於ける警察權を持つても居れば、議會へも二人の議員を選出し得ることになつて居る。

オックスフォード

二百三十二

此の十九許りのコレヂには、夫々教授もあり、學生もあり、校舎もあり、財産もある。十九各が勝手に經營して居るので、學校に依つて夫々特色がある。或者は其の歴史を誇る、或者は其の建築を誇る、其の備附の圖書の優れたものあれば、其の庭園池沼の秀でたものもある。甲には金がある、乙には人材が多い、一方でギャラリーを誇るものあれば、片方では其のチャペルを以て名を高うしてゐる。僕等はクライスト、チョーチ、コレヂから順々に名ある學校や教會を見て廻つた。何處を歩いて見ても、英吉利でヘンリー八世の跡といへば、大抵碌なことはないに定つてゐるが、此のオックスフォードだけには、王に取つてやゝ有利な傳説が少しある。兎角して僕等はチームスの上流で、此の邊ではチームと唱ふるアインス河の畔へ出た。青葉若葉の間からマグダレン、コレヂの高塔が空高く聳えて、如何にも氣が暢々する。マグダレンは、建築も立派だが、其の北には、小川に沿うて鬱葱たる森の下道うね／＼と曲つた有名な「鹿の園」がある。此の森はアチソンなんどの名ある文豪が、日夕逍遙して想を練つた所だといふ。

オックスフォード

二百三十三

市街を出ると、オックスフォード、バヂヤント（有名な假裝行列）の近づいた折とて、鮮麗な色の衣をつけた男女に展行き會ふ。馬鹿なことをすると、永井君が笑ふ。黒いガウンを着て、四角な帽子を被つた、大學の學生や卒業生が到る處に見える。赤裏の黒地の衣はエム、エー。白革の裏がビー、エーと、永井君は一々説明して呉れる。兎も角も時分だからといふので、マンチエスター、コレヂは後にして、僕等は兎ある料理屋に入った。

食事中話が大學生の惡戯に及んだ。是は僕も豫て聞き及んで居る。新入生の目を縛つて置いて、濡手拭で叩いて、首を斬る真似をした所が、生憎と神經作用で其の男が死んで仕舞つたので、大騒動が持上つたとの話もある。學生が何かのお祭騒ぎに景氣を附ける爲とて、ボンフワヤを焚く時などは、市中にある店の看板でも表札でも、手當り次第に持つて行つて焼いて仕舞ふとの話もある。尤も後には几帳面に其の代金を辨償するさうだが、兎に角西洋の人は日本人よりも、悪く巫山戯るのが好きらしい。

オックスフワード  
 『悪戯も無邪氣な奴は我慢もなるが、此處等のは意地の悪い悪戯をして困る』と永井君は語り出した。其の話によると、何でも永井君の初めて寄宿舎へ入った晩などは、先づ人の寝静まる頃を見計つて、廊下をがた／＼と踏み鳴して歩く。高聲に何やら歌ひ出す。何が可笑しくてか、一同が／＼と笑ふ。眠られるものでも何でもない。而して翌朝食事に出ると、前晩騒いだ奴等が白々しく、昨夜は能く寝られましたかなと尋ねるのださうだ。其位は先づ悪戯の手はごきで、夫から追々にやり募ると、電燈を消して、人の部屋を暗がりにする。廊下で人の悪口を讀み込んだ歌を高く歌ふ。用もないに部屋の戸を叩く。不在の間に人の寝道具を引擡つて行く。毎日毎晩手をかへ品をかへて、何か知ら人の厭がるやうなことをしないことはない。所で、之が永い間の習慣だとかで、悪戯をされた者はされ損になつて、誰も野暮らしく舎監に訴へて出もせねば、訴へた所で、舎監も如何ともすることは出来ぬ。

『中にも僕の小癪に觸つたのは、食事の最中に全校の學生が、と言つても、此處には十

五六人じかないが)寄つて集つて、日本に日が照るかとか、雨が縦に降るかとか、尋ねるので。而して僕の答への模様によつて、様々の日本の悪口を叩いて、一同して大笑ひをする。何千里と隔つた外國へ来て、見ず知らずの他人の中で、斯んな目に遭ふのは何う考へ直しても、心持の宜いものでない。僕も腹立紛れに、日本にはそんな馬鹿なことを尋ねる奴は一人も居らぬと、遣り返してやつたことがある。』と永井君は言ふ。

斯んな調子で、今迄日本人は大概中途で下宿して仕舞つたさうな。永井君は何でも一つ踏み止まつて見やうと思つたが、何しろ武骨な人である上に、右の様な無愛想をやるので、段々互に不快の感を増す許り、頓と親しくならない。所が或る冬の夜、仕事を終つて丁度部屋に寝て居ると、變にぶちや／＼と水音が窓の方に聞える。能く見ると、三階のタンクから此の部屋へ水を投げる奴があつて、床の上はもう水だらけになつて居る。永井君も此の時こそは腹に据る兼ねた。早速起き上つて、潜と三階に出かけると、果して暗中に二人の男がせつせとバケツで水を汲み出して、窓の方へ投げて居る。己れ畜生何するか見やが

れど、一寸柔道の心得があるのを幸ひ、突然今しも水を片手に持った男の襟頭を掴んで、すでんごとと許り見事に投げ附けた。所が運よく之が暖爐の脇へ倒れて、持つて居た水が火の中へさんぶりかゝつたので、非常な音がして、ばつと灰神樂が上つた。之を見て今一人の男は手巾を振つて、頻に休戦を求める、舎監が物音を聞きつけて飛んで来る、自餘の學生も何事かと思つてやつて来る、忽ち學校中の大騒ぎとなつた。其の時でも舎監は永年の習慣を言ひ立て、動もすれば永井君が人の悪戯を真に受け過ぎたのを責めやうとするので、先生大に怒つて散々小言を食はせた。此の時以來、初めて君に對する悪戯はばつたりと止んで仕舞つたといふ。『今では雙方表面だけ親しくなつてゐるが、腹の中では何と思つて居るか知れたものぢやない』と、永井君は又笑つた。僕が来て居ても、水責位に遭はされたに違ひない。

二人でマンチエスター、コレヂに出かけた。校舎を見て後、寄宿舎の方へ行くと、入口の小庭で、四五人クリケットを行つて居たが、永井君を見て一同會釋した。其の中の赤ちや

### 續々レムの里

#### 一、日曜の汽車

けた上着を着たのを、永井君は指さして、『彼は、僕の投げたのは、』と言ふ。此處を過ぎて、永井君の部屋に入れば、水を掛けられたのは此の窓、暗中の格闘は彼處の三階と、一々説明して呉れた。僕には豫期した「異様の感」も格別起らず、やゝ暫く此で談じた後、又永井君に送られて、公園を廻つて、停車場へ歸つた。

斯くて午後五時四十五分發の急行で、倫敦に歸つたのが、次のレミンTONの終りである。

父が斯なに何の氣もつかず遊び歩いてゐる中に、長女は愈々大學病院で、到底助からぬものと認められて仕舞つた。

今年倫敦に着いてからも、一度行つて舊知の山川に接したかつたが、忙しくて、頼と其

日曜の汽車

二百三十八

の機会がなかつた。所がデビス老人からは電報が来る、手紙が来る。チャンドラー君も、明日一度歸るから一所に行かうといふ。到頭僅に餘した倫敦の二日をレミントンに送ることなつた。五月十日の朝愈々出立といふ時になつて、宿の都合は何とでもつけるから、誰か今三人連れて行かうでないかとチャ君が言ふので、今になつて間にも合ふまいとは思つたが、試みに小西平兵衛、勝田忠一の二君に相談して見る。氣の軽い二人は早速承知して、二十分も経たぬ間に、シユート、ケース片手に二階から下りて来た。總勢四人バヂントン迄駆けつけて、此處から十時三十分發一時二十八分レミントン着の列車に乗込んだ。今日は日曜日とて、平生十數回の直行が出る所を、僅に三度しか出ない。其の上には急行といふのが丸で一つもない。オックスフロード迄はやゝ宜かつたが、夫から先は停車場毎に一杯留つて、左ながら春の日の永の歩みとばかり、のらり／＼とやつて行く。僅百哩餘の道に三時間と八分もかゝるとは、ダム何とかなだ、チャ君は頻に洩々言ふ。僕も其の尾について「ダム日曜日」とか何とか、相槌を打つては置いたが、楮一步を退いて考ふるに、倫

敦からレミントン迄、大西線で行くと百零六哩あつて、丁度新橋から蒲原、奥津の間迄行くのに當る。所で其の蒲原、奥津へ行くに、新橋午前八時發の最大急行が三時間と四十七八分かゝるのである。チャ君が事情を知らねばこそ、相槌も打つたものゝ、實をいへば、「ダム日曜日」も「ダム汽車」も言はれた義理ではない。

### ニ、舊知の山川

愈々三度目のレミントンに着いた。去年二度目に此處へ来た時、之が恐らく當分レミントンの見納めかと思つて居たが、今年今日、又もや此處へ来ることになつた。東京に居てさへ、一昨年春から、上野向島の花を見ない僕が、東京からは遠く、此の湯治場へ、一年の中に二度も来るとは、誠に不思議の御縁といはざるを得ぬ。——いや言はざるを得ぬと迄は力むにも及ばぬが、言つても別に差支はない。

フラットフォームには、デビス老人が例の近眼を慮路つかせて立つて居る。其の側には

舊知の山川

二百三十九

老夫人が自轉車片手に列んで居る。チャンドラーの細君も来て居る。僕等の姿を見るとひこく、飛んで来て、手を握つて、初對面の挨拶やら、再會の喜びやら、中々賑やかだ。チャ君夫婦は、兎に角宅へ来いといふ。デ君夫婦はデ君夫婦で又、兎に角宅へ来いといふ。デビス家とチャンドラー家が、雙方お客を引張り合つて、中々噂が明かない。到頭宿は老人の宅と定めて、一應チャ君の宅へ落ち着くこととなつた。

チャ君と小西勝田と僕とは、先づ馬車に乗つた。倫敦に着いて以來、空はどんよりと曇つて、降つて見つ、霽れて見つ、左ながら狂氣ちみたまーナーの油繪みたいな天氣許り打續いたが、今日は珍らしく明かに晴れ渡つて、一寸秋の初涼風そよよと吹き初めた時のやうな景色、小西平兵衛君頻りに四邊を見廻して「藝術的」だとか何さか感心して居る。

馬車が走る後から、老人が息せき走つて来る。走りながら「いんなことを話しかける。馬車が老人の宅の前迄来た時、又後から走つて来て、此處で僕等三人の荷物を受取つて、初めて分れた。

チャ君の宅へ着いて、三時少し前午餐を饗はれた。食事がすんで庭へ出る。花には早いが、春寒の風を除けた日常のよい芝生へ椅子を列べて、久しぶりの日の光を浴びて居ると、うごくうごくと睡くなる。其のうごくうごくした耳元へ、何處からさなく蜂の羽音が聞えて、如何にも春めかしい。娘のマージョリーが出て来る、長男が出て来る。女中に連れられて小さいのが二人も三人も出て来る。其處へチャ君の店の意匠係をやつてるモービーといふ若い娘が出て来る。チャ君は態とらしく之を兎見角見て、僕に「宜い女ですね」といふ。娘は赤くなつて笑ふ。其處へ又細君の弟といふのが、フロックコートにシルクハット儼しく、堂々と練り込んで来た。如何にも英吉利の田舎の日曜日といふ様になつたので、藝術的だなど、平兵衛さんが頻に喜ぶ。

此の大勢で知合の例の獨身の金持のレ嬢の庭へ出かけた。去年此處へ来た時、日本の莢豌豆の話をしたら、英吉利にそんな物はないから是非少し欲しいといふので、態々日本から之を送り届けたことがある。お嬢さんに格別用はないが、此の僕の送つた莢豆が何な

舊知の山川

二百四十二

つたらうかと思つて、今来て見ると、可愛くも豆はまめに育つて、温室の中で三寸許りに延びて居る。日本では今頃飽く程實が出来て、莢がもう固くなる時分だが、此處では未だ夫迄に中々遠い。レー嬢は大に之を樂みにして、今少しで島に移す筈だといふ。之を大森の宅から送り出した時は、何うなることかと思つて居たが、太平、大西南洋と亞米利加大陸を横ぎつて、無事に此處で青い芽を出した所を見ると、大工任せにしておいた遠い／＼田舎の別荘へ、初めて来て見たやうな心持がする。豌豆御苦勞などは何うだらか。

ジェフソン公園を一回りして、僕等四人はデビス老人の宅へ寄つた。可愛らしい「小兵士」が日曜日だとして来て居る。前髪は縮れ毛に小櫛を挿して、名はと問へば相變らず「ヤング、ソルジャー」、去年見たまゝと些とも變らぬ。藝術的な顔して居るよつてなアと平兵衛さんが喜ぶ。妙な所へ「よつてなア」を使つたものだ。お茶が出る、老人の氣焔が揚る、裏へ出て、芝生でローン、ボールをやる、老人の腰を屈めて投げ出す所は、如何にも鳥羽僧正式で、小兵士がくすくす笑ふのも無理はない。ボールでは、チャ君は器械學者である

だけに一等旨い。

講釋を言ふではないが、腦の作用で人には能く二度同じやうなことを見聞することがある。「如何なる折ぞ、只今人のいふ事も、目に見ゆるものも、我心の中も、斯ることの何時ぞやありしかと覚えて、何時ぞは思ひ出でねども、正しくありし心地のするは、我ばかり斯く思ふにや」と徒然草にある。之は誰にもある。末梢神經から來る感覺が腦の中樞に首尾よく一時に傳はらずして、順々に腦の部分々に傳はる時は、感覺が二つに分れて起るので、何うやら何時かも斯んなことが有つたなど感ずることになるのだと聞いて居る。僕は今此のレミントンに来て、同じ土地に同じ人々と顔を合せて、同じ日曜に同じ様な事をする、何だか感覺だけ繰返して、實際は來て居るのでないやうな氣がして堪らぬ。

三、日曜の午後

今度はデビス老人を誘ひ出して、又もやチャ君の宅へ出かけた。僕等は兩家のお客とい

日曜の午後

二百四十三



日曜の午後

二百四十四

ふので、兩家の間を往つたり來たり許りしてゐる。先づは羅馬へ來た外國の大官が、クキ  
 リナルの伊太利王宮とパチカンの法王宮と、雙方へ氣を兼ねるやうなものか。  
 娘のマーシヨリーがバイオリンを弾く、細君がピアノを弾く、僕等はウキスキを傾け  
 ながら聴いて居る。静な田舎の日曜日とて長閑なものだ。チャ君は娘に調子を合せてやる  
 とて、大なセロを持ち出して、プー／＼と擦合せた揚句、乃公も一つやること、  
 どつかと椅子に腰を掛けて身構へた。冗談だと許り思つて居たら、焉ぞ知らん、中々旨い。  
 今度は細君が大にはづむで、三人の合奏が終ると、自分ピアノを弾きながら、朗々と獨で  
 歌ひ出した。夫がすむと、代り合つて代り榮えもいたしませぬ勝田忠一君が負けぬ氣になつ  
 てピアノを弾き出す。いよ／＼「藝術的」になつて來た。  
 長男が病氣だから見舞つて遣つて呉れといふので、忠さんと平兵衛さんは、チャ君に連  
 れられて二階に上つた。や／＼暫くして、二人とも變な面付をして下りて來た。何したかと  
 聞くと接吻だといふ。接吻が何したと問へば、「したのだ」といふ。さう言つて、益變な顔

日曜の午後

二百四十五

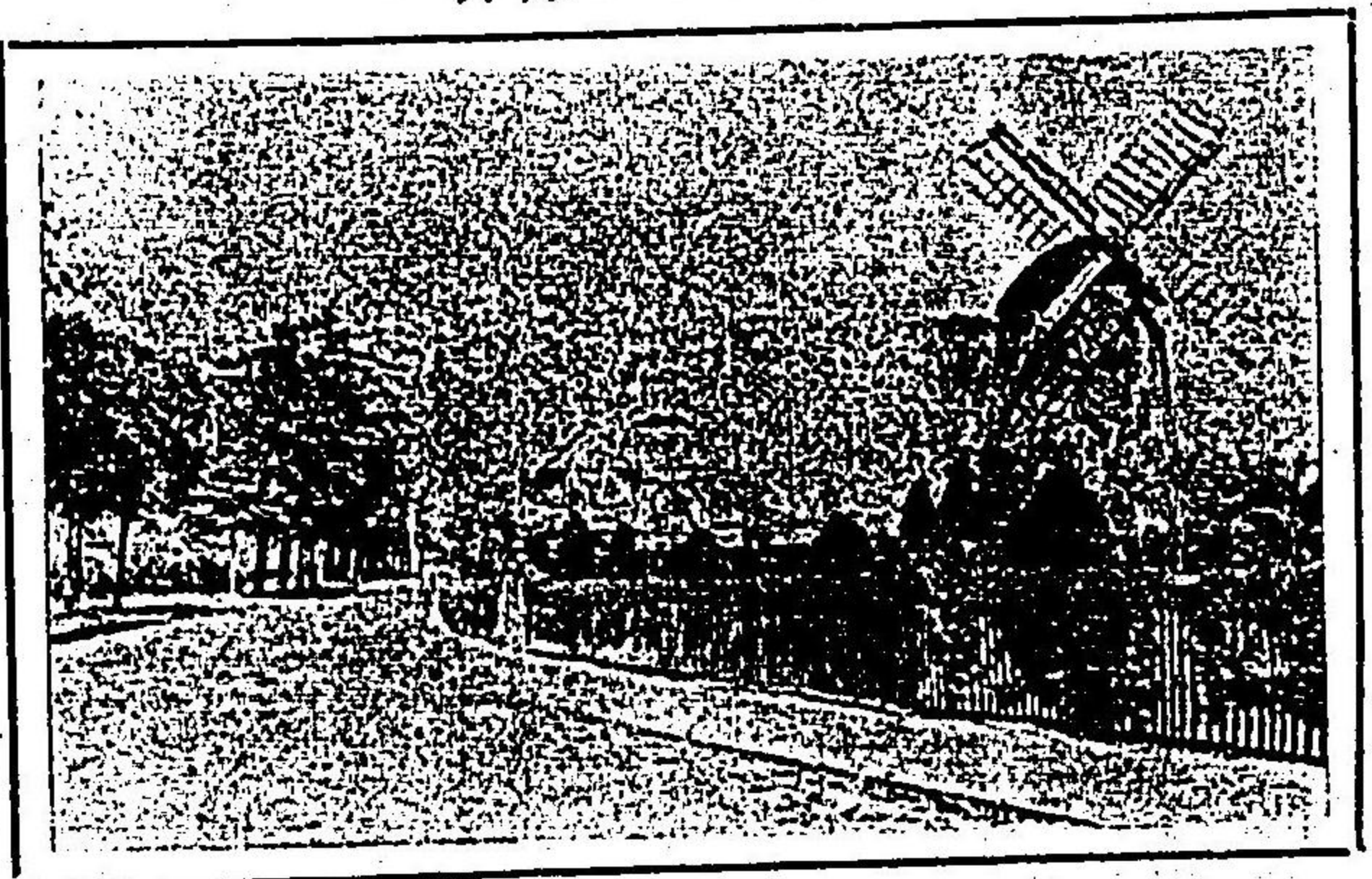
をする。後で聞けば、二階で子供の病氣を見舞つて後、いざ分れるといふ時接吻となつた。チ  
 ヤ君は二人にも行つて呉れといふ。接吻が何ういふ器械的作用で行はれるものであるか  
 を知らぬ二人は、大に狼狽して互に散々譲り合つた上、漸くお茶を濁して來たことだ。  
 一體彼は何うするものかと、さも僕を先輩であるかの如く尋ねる。いや其の接吻なら、僕  
 も失策つたことがある。何でも十四五年前のことだが、或處で或夜骨牌を取つて居ると、  
 其の家の子供が最う寝る時分とて接吻に來た。兩親や兄弟と順々に濟ませて、果は居合は  
 すお客にもとて、僕の處へも廻つて來る。僕は丁度親に當つて、骨牌を配りかけた時であ  
 つたから、無雜作に横をふりむいて、一寸真似だけしたが、子供は忽ち火のついた様に泣き  
 出した。はつと思つたが、もう遅い。實の所、僕は巻煙草を啣へた儘で行つたのだ。實際  
 火がついたのだから、火のついた様に泣き出したのも尤もだと、後では笑つたものゝ其の  
 時は實に思はず真赤になつた。

四、ナイチンゲール

又候チャ君を連れて、デピス老人の宅へ歸つた。此處で一同晚餐をすませて、チャ君は先づ歸る。僕等は月明に乗じて、ナイチンゲールを聴きに出かけた。村を出離れて、夜色沈々たる野道にさしかゝる。大地は流るゝが如き月の光、仰げば星疎なる空の色、目に入るものにては、彼方此方にぼやくと立つた低い森、何處を果ともなく打續く生垣、今は戸を鎖して人聲もせぬ街道筋の居酒屋、音も立てずにぐわらぐわらりと中空に廻る風車、――時々遠乗から歸る自転車の火影が遠くからちらついで来る。之が疾風の如く駆け過ぐる時は、必ず「今晚は」と挨拶して行く。中には、睦まじげに若い男女が車をすれすれに列べて行くのもある。「忙しい戀」だと、老人が佛蘭西語でいふ。老人は佛獨の語なら達者に使ふのである。やゝ小一里も来て、大きな雑木林に着いた。老人が豫て見定めて置いたといふ木柵に探

り寄つて、其の上に腰を掛けた。高い森が兩側に立つて、其の間に廣い街道がある。人通の少い所にて、其の街道が大方草に埋もれて、僅に中央に細い徑を留めた許り、月は丁度此の細徑の上から照して、四邊は左ながら叢のやうに明るい。森として人聲も何も聞えぬ。  
ひゆうウッ！ひゆうウッ！そら啼いた。靜に――と言ひ交はす。天地寂然、聲は夫切り聞えぬ。やゝ暫くして、ひゆうら――！今度こそ夫だ。又利耳を立てる。又止む。僕等は草に覆はれた木柵の邊で、無言で待らに待つこと彼此一時ばかり、こゝろ啼かぬ。夜は深ける、寒くはなる、せうこ

外 郊 ント ン ミレ



村の月曜日 二百四十八  
となしに一同踊を旋して、ぶらり〜とやつてくると、遙に遠い雑木林が月影に茫と立つて、其の一つから頻りにナイチンゲールが囀る。と思ふと、隣の森からも囀り返す。成程鶯の様な節も交るが、鶯よりは遙に長い遙に變化のある節で、之が牙え互る月に囀る所は如何にも面白い。僕は年來の望みを、初めて此處で遂げた。  
チャ君の家へ寄つて見たが、もう眠つたと見えて灯影も見えぬ。月を踏んでぶらりぶらりと歸つたのは丁度十二時過。

五、村の月曜日

ジエフンン公園の池の周圍を一廻りしてリム河に沿うた細徑を、唯一人目的もなく歩いた後、僕はぐつたり樹影の共同椅子に腰を下して見た。遙かにリムの水音が聞える。前には一面の青芝廣く續いて、左の方には物古りた樹立の間に、高く音楽堂がほの見える。メーの花がちら〜と咲いただけで、樹々は若やかな青葉ばかり。鬱金香が何處の垣根に



日曜日の園公のントンミレ

村の月曜日

も美しく列んで咲いてゐる。春めかしい風がそよそよと吹く。

今朝は朝餐がすむと間もなく、老人に連れられて忠さんと平兵衛さんはウフリックへ出かけた。僕一人緩くりと風呂に入つて、倫敦以來書き遣した手紙なんぞ認めた後、兎も角もとチャ君の店の方にいつて見ると、チャ君もウフリックへ追ひ掛けて行つて不在だと、モービー嬢がいふ。昨日なら、一所に行かぬかと誘へば、二つ返事で承知した筈のモ嬢も、今日は黒い品のいゝ仕事服を着て、月曜日顔をして煙脂下つて居る。外面の町々も、昨日と違つて、恐ろしい人通が賑やかな。此處を

出やうとするに、技師のジョーンズ君とばかり行き會ふ。今日は玉突ごころかと言つた様な顔で、近頃は倫敦の某會社に勤めて、一週間の給料四十磅貰つてゐるな事や、何かして日本に職を求めて、遊び、旁行つて見たいと言ふやうな事を、立ちながら談し出す。何處へ行つても、忙しさうな顔ばかり。孰も皆松の内が過ぎて、急にむづかしくなつた小母さんの顔のやうで、うつかかり之を遣羽子にでも誘つて見やうものなら、頭からがみくご叱り飛ばされさうな。斯うも日曜と違ふものかと驚いた。仕方がないから、目的もなしに此の公園へさすらへて来た。

所で、其の公園迄が月曜日を以て、入場料を一片づゝ取つて居る。一片は宜いが、中へ入ると、さしも昨日は老若男女噂々として戯れ遊んだ、池の邊にも、芝生の上にも、ひっそりとして人影一つ見えぬ。唯先月の風で倒れたといふ、大きな楡の樹の下で、土方が大勢で土を運んだり、道を繕つたりして居る。少し其の側に立つて見て居たが、洋服を着た所だけ違ふさうで、見た所格別其の外に日本の土方と違つた所はない。尤も之が日本の土

方なら、むい／＼と陽氣に無駄口を利いたり、小歌の一つも歌ひながら、仕事をすする所だが、此處等の土方はむつつりと孰もむづかしい顔をして、口も碌々利かず、煙草なども滅多に吹かさぬ、何うしても月曜日式に出来てる。僕は何だか斯う茫然と人の汗水垂らして働くのを見て居るのは、相済まぬ様な氣がして、此處を出た。

共同椅子に腰を下して、四方を眺めやる内に、何時じか／＼と睡つた。湯さめの寒さに驚いて眼を覺すと、正に正午を過ぎて居る。時分はよじと、再びチャ君の店へ行けば、モ嬢が飛んで出て、今しもリゼント、ホテルから電話がかゝつて、皆がウラリツクから歸つて待つて居るから、直ぐ来い、このことであつた、と報せて呉れた。

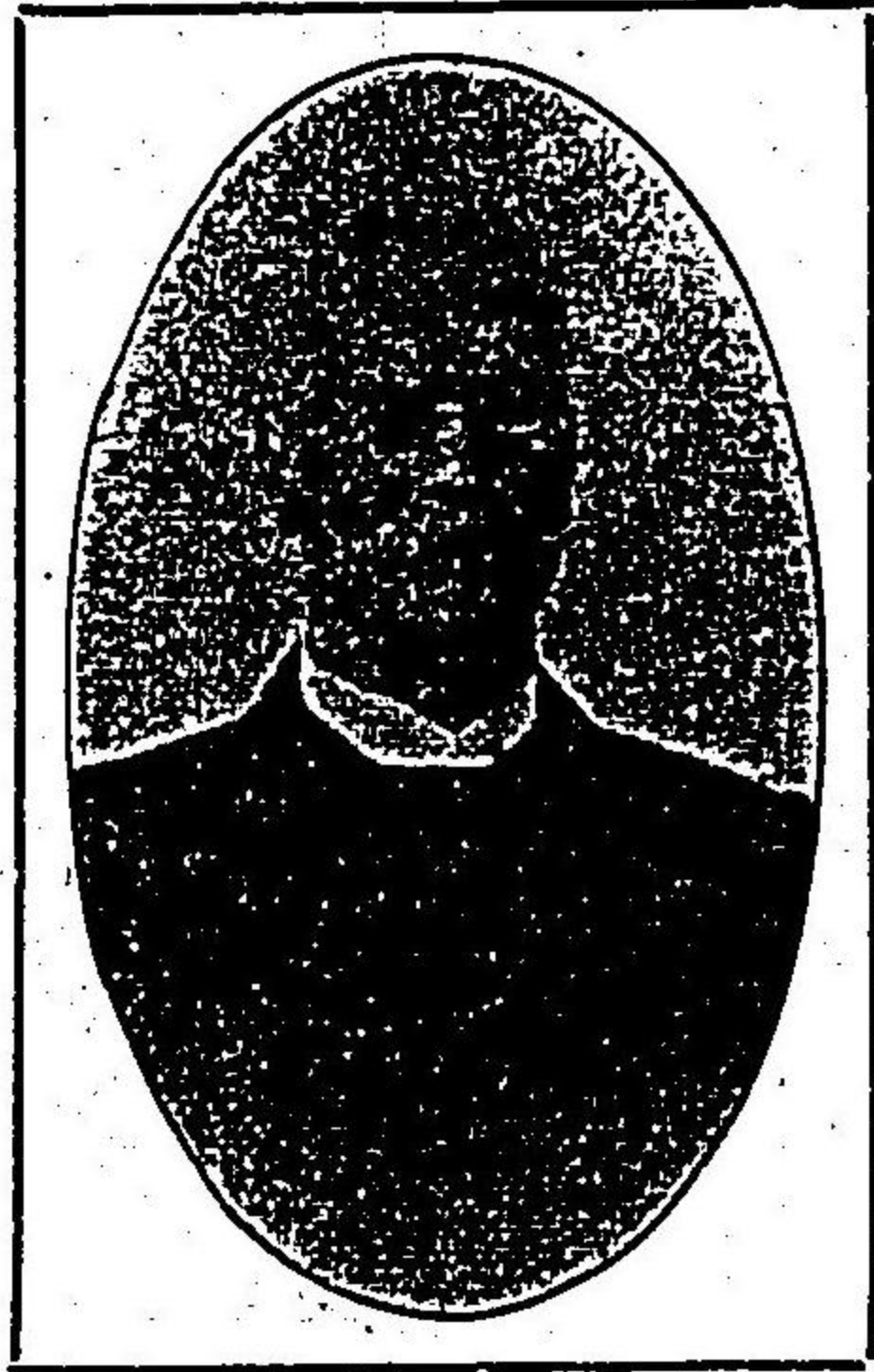
ホテルで食事をした後、暇を一同に告げて、四時三十分の汽車で倫敦に向つた。チャ君も一所に行くこととなり、ジョーンズ君も停車場で落ち合つて、一所になる。チャ君の細君とデビス老人が送つて来る。斯くして僕等は賑々しくレミントンを立てた。分れ際に老人は、従兄の歸つた模様で、自分は支那へ行くかも知れぬから、其の節は四十年ぶりの日

附記  
二百五十二  
本に寄つてお目にかゝらうといふ。老人の従兄といふは、前の清國總稅務司ロバート、ハートである。

六、附記

相分れて後も、筆まめなデビス老人は、殆ど月に三四度宛必ず手紙を呉れる。其の中老人何處で聞き出したものか、日本に宮森麻太郎氏著の英文福澤先生傳といふのがあるさうだから、一部送つて呉れと言つて来た。早速買求めて送つてやつたが、之に對し、十月十八日附で寄越した懇切な禮狀の中に、斯ういふことが書いてある。  
自分は千八百六十二年に横濱に着いて、此處で商業を始めたが、儘か其の翌々年のことだつたと思ふ、或日自分の店へ出入の支那人のコムブラドルが来て、或る日本のサムライが英語研究の爲私の家に置いて貰ひたいと言つてるとの話を話した。逢つて見ると、福澤諭吉と言つて立派な人だ。私は一も二もなく早速同居を承知して、何も召

使の様な賤しい仕事は一切するに及ばぬといふ約束をしたが、先生はいつも自分の食事中自分の椅子の後に立つてゐて用をささぐ、又晝間は店の仕事もやつて呉れた。時々聖書と字引を手にして、私に不審を尋ねて来たことを覚えてゐる。



人 老 / ス ビ デ

翌年私は先生と連れて上海に出かけた。其の歸途彼阿會社の汽船ゲンヂス號(船長バーナード氏)に乗つたが、其の船内で、先生は、甲板の上に置いた手巾を、後に外り反つて、口に啣へて拾ひ上げる藝を演じて、船客一同を驚かせたことがある。先生には、肉體的にも精神的にも、何一つ行つて行き遂げられぬものがなかつたらしい。其の後先生渡英の際は、之を倫敦にゐる私の姉に紹介したが、姉は左ながら王侯の如く先生を遇したといふ。王侯としても決して恥しくない人である。

附記

附記

自分が英國に歸つて後、或年東京に虎列拉が大流行と聞いたので、早速時の英國公使エ  
ルチスト、サトウ氏を通じて、或る特效薬を先生に送り届けたが、之につき先生から懇  
篤な傳言があつて、感謝の標に、自ら其の名を署した寫眞を私に送つて呉れた。此



生先澤福の前年十四

の寫眞は今に私が珍藏してゐる。云々  
實にも、世間は廣いやうで狭い。此の書面  
中にある船長バーナードといふ人こそ、即  
ち潮山翁君の連れられて行つた故バーナ  
ード氏なのである。其の又福澤先生を王侯の  
如く遇じたといふ老人の姉様なるものは、

今尙倫敦に健在してゐる。

マージョリー嬢とモービー嬢からは始終給端書を呉れる。モービー嬢は英佛聯合博覽會の  
境内から端書を寄越して、此の壯大なる博覽會を僕に見せられぬのは残念だと言つて來た。

チャンドラーの細君からは、其の後突然黒棒の状袋に黒棒の書簡箋を封じて、長男の病  
死を報じて來た。長男といふは、例の接吻騒ぎのあつた當人で、彼の時の病氣が段々重く  
なつて、遂に果敢なくなつたのだといふ。  
さうかと思ふと、さしもの大病で、一時は到底助からぬと迄診定された僕の長女の麗子  
は、其のうち何時の間にやら段々快くなつて、今年八歳の脱臼さかり、毎日元氣よく遊ん  
でゐる。

旅順も愈々落ちたさうぢやな。之はお前限りのとちやがの、旅順の  
落ちる、落ちぬは、畢竟早くから勝安房と明治政府との協議で極つ  
ておるのだや。それをお前、今になつて天昭院の後家などが焼餅  
を焼いたからつて、そりやアいけな。——七花八裂

附記

# 巴里半面

## 一、巴里の電報難

巴里に着いた翌々日、僕は唯一人ホテルに引籠つて、懸命に通信を書いてゐると、給仕がやつて来て、昨夜の電報は何うしても新聞電報で受け附けて呉れぬが、仕方がないから、普通電報で出さうか、夫とも寧ろ見合せやうか、と言つて来た。何故かと聞けば、此の小さい奴迄が、人並らしく目を丸うして、両手をぱんぱんと擴げて、肩をぐつと突き上げながら、「シエノス、セ、バー！」

僕は日本を出る時、遞信省と交渉して、世界の要地から自由に料金後納の新聞電報を打てることに、手筈を整へておいた。新聞電報といへば、新聞に載せる電報のことで、料金が普通料金の三分の一位しか要らぬ。料金後納といふは、料金を受取人の方で支拂ふので、差出人は開せす焉と済して居られるのである。倫敦などでは、ホテルから電話で電信局に

尋ね合せると、僕の名は早くも先方に通じて居て、料金後納にも新聞電報にも、何等の故障はなかつた。巴里も其の傳で行くことゝばかり心得て、昨夜長文の電報を本社へ打つて置いたが、今朝になつて俄に斯なことを言つて来る。誠にはや巴里の至りである、——と言つても分るまい、斯な無茶苦茶を言つて。人を煙に捲くことが、世界一周會の閑人の間に恐ろしい流行つたものだ。實に一周會極まること

トールマルの怪物像  
(大英遊記誌)



巴里の電報

いふ愈以て分らぬ。  
 要領を得さうにも思はれなかつたが、兎に角僕は馬車を郵便局に飛ばせた。セイヌ河を渡つて、議會の横を彼方此方に曲つて、其の所謂郵便局なるものに着いたが、がらんとした大きな建物で、門を入れば、直ぐ草も木もない廣庭がある。何處を何う入つて、何處で案内を求めるものか、丸で分らぬ。此の廣庭の中を、くるりと建物について廻つたが、窓も戸も固く鎖で切つて、人の氣色もしない。せうことなしに、又門の所へ立ち歸つて、門衛所らしい所を覗き込むと、赤ら面の親父と婆さんと午食の最中だ。鞠射如として進み入つて、電信局は何處だといへば、此處だといふ。今度は蹴踏如として、外國電信課はと聞くと、奥の方から三階の何處やらだと教へて呉れる。昔は唾を吐き髪を握つて飛んで出たといふに、時なる哉、今は麵麩を頬ばりながら、奥の方で返事した儘出て來ぬ。靴へられた通り三階に上つて、敷物も何もない廊下の板の間を、彼方此方からくくと靴の音高く歩いて見たが、靴の戸も鎖つたきりで、此處にも人影は全く見えぬ。遙か遠方に

巴里の電報

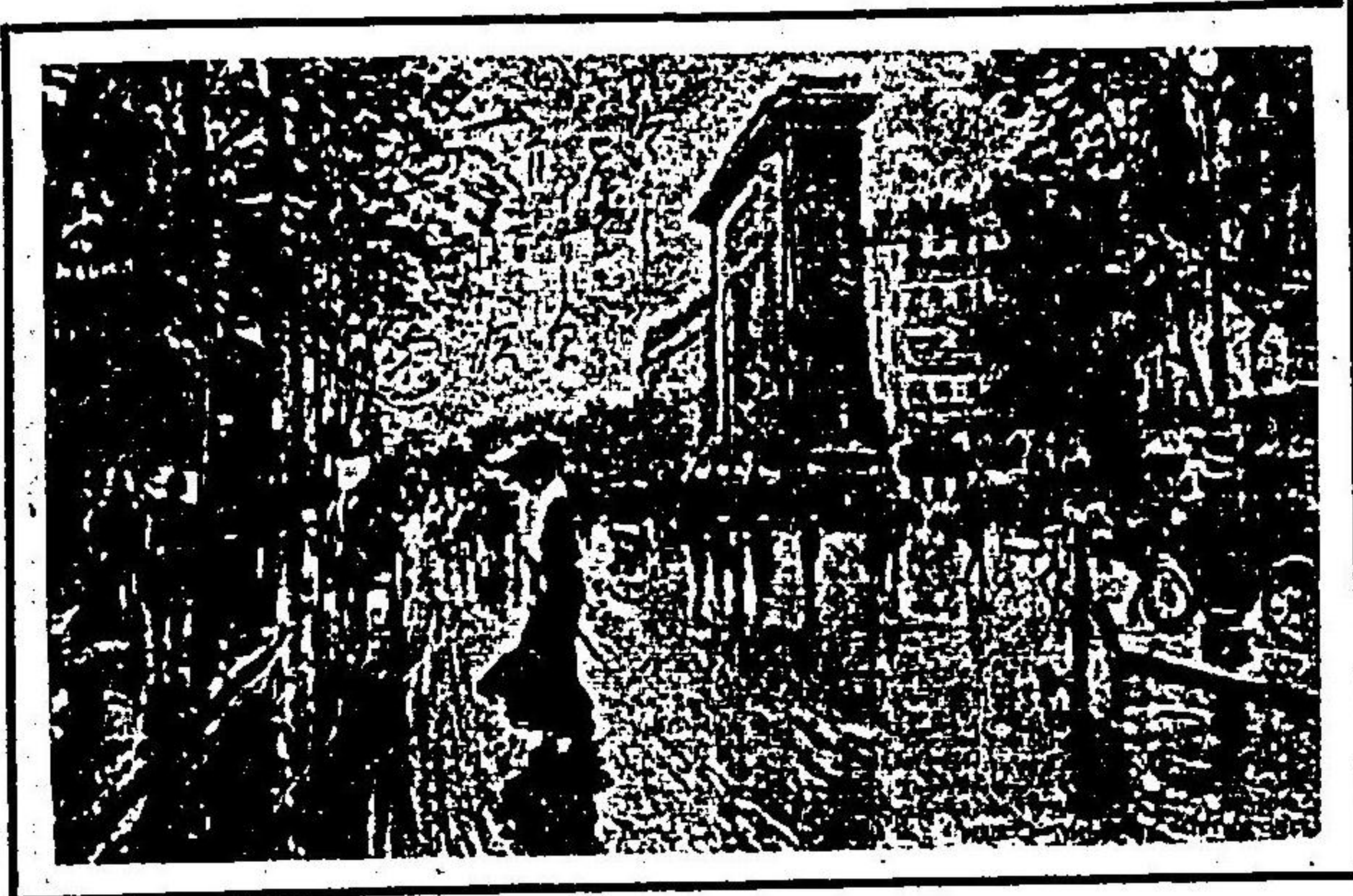
小使らしい男が出て行くのを、急ぎ足で追ひかけて尋ねれば、何やら色々説明して呉れるが、不幸にして、僕の佛蘭西語は巴里の真中で通話不良とある。其の男はやがて銀側の大形な時計を出して、十二時と二時の所を指さしながら、「デヂニューネ」と來た。成程皆午餐に出て行つた後と言ふことだなど悟つて、悄然と僕は此處を出た。誠に「デヂニューネ」の至りである。  
 一旦ホテルに歸つて、二時過又出かけた、今度は門衛の男頗る愛想が宜い。此處に限らず、一體西洋の人は初めて逢ふと無愛想だが、二度目からがらりと違ふ。今度は階子を何上つて何曲ると、丁寧に教へて呉れた。行つて見ると、成程今度は人が居る。背の低い小さい男が出て來たので、之に電報のことを話して、新聞電報許可證を請求すると、僕のむづかしい佛蘭西語も何やら斯やら用に立つた見えて、此の男は僕が大使館から貰つておいた證明書を兎見かう見て、夫れでは少し待つて呉れといふ。此の男が内へ引込むと、小使は僕を其の控所に案内して呉れた。日本なら溢茶の一杯も出す所を、此處は薄汚い卓



不思議の會合  
 二百六十  
 子に椅子が二三脚あるきり、殺風景極まる所だ。小使がお世事の積で、何やら頻に話しかける。唇を無性に尖らせて、一言目には「トレービアン」と、レーをやたらに長く引つ張る。斯くて彼此三四十分も待つたと思ふ頃、初めて前の男が出て来て、青い紙の切符を下渡された。之を添へて電報を出せば、何時でも新聞電報を受附けるといふ。僕は有難く頂戴して、厚く禮を述べて、其の足で直ぐ電信局へ飛び出した。新聞電報は之で漸く出来たが、料金後納の方は到頭出来損ねて仕舞つた。之を稱して、料金違ひとは何だらうか(五月十四日)

### 二、不思議の會合

町の名も家の名も知らぬが、何でも巴里の或る賑やかな廣い街道を一寸曲つた、角から二三軒目の料理屋へ、僕は今晩「タイムス」の巴里通信員オーニール君に案内せられてやつて来た。奥まつた卓子に、お客が三人僕等の來るのを待つて居る。頗る變な家だ。



雨の中巴里

不思議の會合

家も變だが、集つた人々も随分變な取合せである。僕はオ君の左に座を占めて、オ君から一同に紹介せられる。僕の左に主人席を占めたのが、ドクトル、ウラーラーとて、三五六の鼻の高い恰似さうな人だ。其の左の方、丁度僕の正面には、佛國工務省附法律顧問法學博士アリス、ジュニール、ヅ、ラ、ルエル夫人、美人ではあるが、でくくと太つて、目方の二十四五貫もあらうといふ大きな婦人である。其の左にはオーニール君と列んで、リオンの大學教授アレー博士がゐる。博士は筋肉の移植に依つて容貌の美を作る、一種の美顔術の發明家として有名な人ださうな。年の頃五十許り、

不思議の會合

二百六十二

八字髭をびんと捻り上げて、下顎の端に鎮守の杜と言つたやうな髭を生じて居る。物を言ふ毎に、此の髭を口義道に右の手にねぢ上げる癖がある。ドクトルは英吉利の人、ルエル夫人はブルゲリアの出身、ブレイ博士は生粹の佛蘭西人で、オートニール君は愛蘭の出、之に僕を加へて、此の小さな卓子に、都合五箇國の民の集つた譯になる。博士の外は皆自由に英語を話すが、會談は佛蘭西語を使つて、オ君とドクトルとが一々僕に英譯して聞かせ

て呉れる。葡萄酒の杯が盛に舉がる。ドクトルは熱心な菜食論者で、肉類としては唯の一片も食はぬ。唯先刻から巴里一流のオムレツと麵麩を召し上るだけだ。オートニール君も條件附の菜食論者とかで、晝飯の外は一切肉食しないといふ。二人は生理學やら倫理學やらを引合にして、頻に菜食の利を説き出した。僕は日本にも動物愛護會や、菜食黨や、二食黨や、徒步主義者などのあることを話した。ドクトルは日本の動物愛護會員が平氣で肉食すること、を聞いて、之を攻撃する。其の代り日本の菜食論者は決して卵子類を食はぬと、僕が辯護す

る。中々賑やかになつて來た。

次なる問題に移らうとオ君がいふ。今度はブレイ博士が滔々辯じ出した。何でも此の連中は時々斯んな所へ集まつて、食事をしながら様々の問題を討議して樂しむものに見える。成る程斯う職業の異つた者が、男女共に腹藏なく所見を語り交すといふは、面白いことに相違ない。ブレイ博士の演説がすむと、ルエル夫人が真向から突つ掛つた。今度はドクトルが夫人に突つ掛つた。何でも餘程の大問題らしいが、哀しい哉僕に分り兼ねる。オ君に聞けば、實に面白い問題だといふ。今度はオ君が尊々として説き出した。何でもルエル夫人と同説らしい。説き終つた時、僕が一體何の問題ですと聞けば、オ君はすまじな顔で、餘程面白い問題だといふ。到頭四人で大混戦の討論を始めた。今度は僕の問はぬ前から、オ君は僕に耳打して、非常に面白い問題だといふ。先刻から「實に」が「餘程」になり、今度は到頭「非常」になつて來た。

最後に此の問題に對する僕の意見を聞かうと言ふことになつて、オ君から問題の性質を

不思議の會合

二百六十三

説明して呉れた。何でもブレー博士が男女の生理的相違から説き起して、男は數婦を有する自然の機能を有するが、女は一夫を守らなければならぬといふことを説き出したので、ルエル夫人が之に故障を唱へ出したのだといふことである。僕は之を聞いて流石に巴里だと思つた。他の國なら、斯んな際どい問題が女の前で話せるものではない。

僕の之に對する意見は簡單である。生理とか何とか小面倒な自然の結構は知らぬが、今日人間が社會を作つて、其處に自然の人間を自然の儘で棄て置かぬを本分とするおせつかいな道徳といふものが出来て以上、僕は斷じて博士の議論に同意出来ぬとやつて除けた。笑顔の宜い博士は呵々と笑ひながら、そんなら次手に尋ねるが、日本で處女と處女でない者と何方が結婚し易いかといふ。オ君は僕が此の質問の意味を解せぬらしいのを見て取つて、再婚は格別だが初婚の時相手が處女であらうがなからうが、格別願着しないかと、聞き直した。斯んなことを尋ねる所が流石に巴里だ。僕は、世界中何處に、結婚前に男を拵へた女が處女よりも珍重せられる國があるかと、問ひ返した。ルエル夫人は、是れ大に我が意

を得たりとばかり、手を拍つて喜ぶ。オ君は之で一段落と、又もや次の問題に移らうといふ。今度は夫人が辯じ出した。オ君は僕に退屈だらうからとて、新聞の綴込を取寄せて呉れた。僕には新聞をめてがつて置いて、四人は尙盛に議論をつづけて居る。不可思議千萬人達である。

食事は疾にすんで仕舞つて、卓子の上には葡萄酒の盃だけ残つて居る。夜は次第にふけるが、議論は何時果つべしとも見えぬ。(五月十四日)

三、モンマルトル

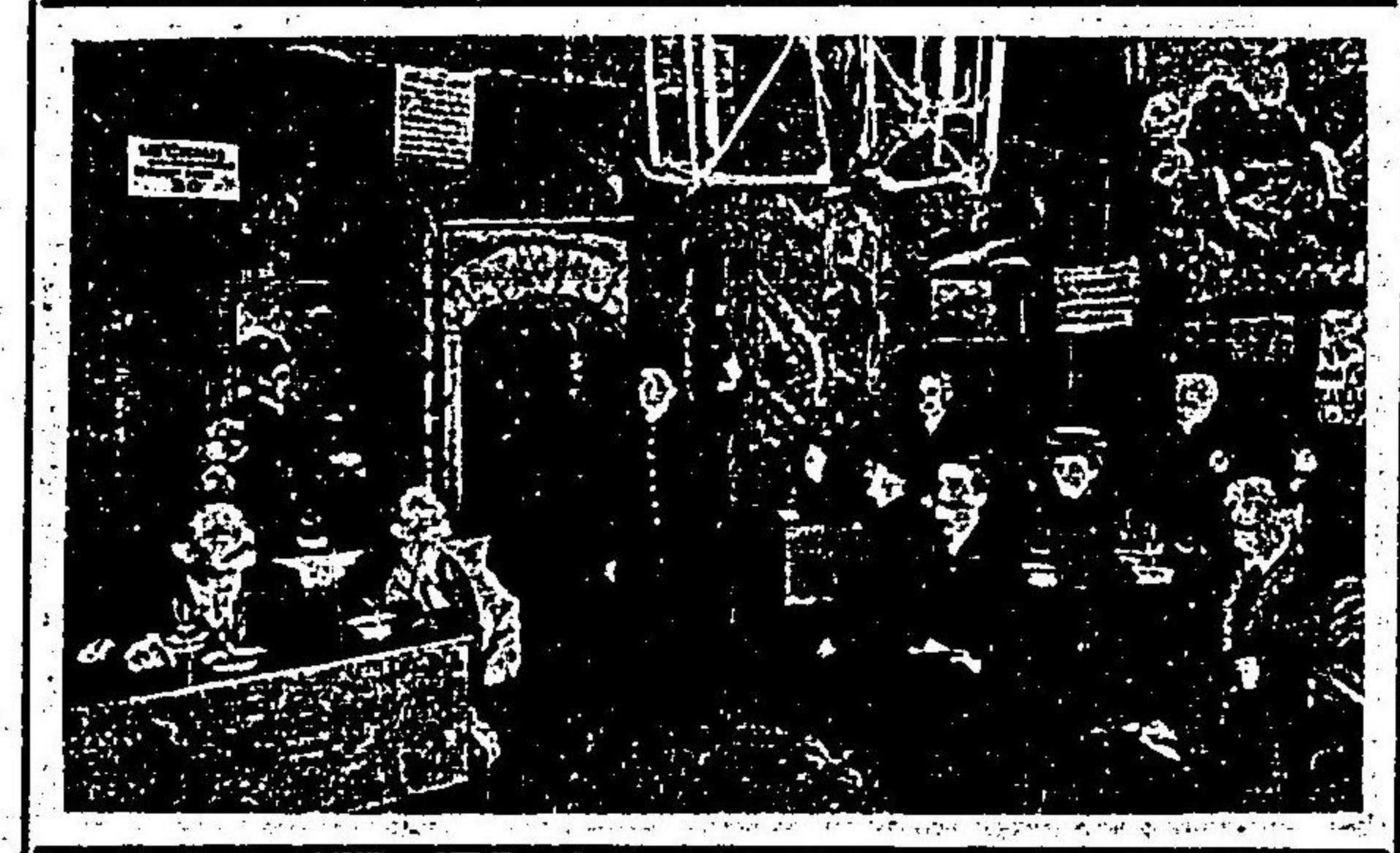
オーニール君に連れられて、何處を目的とも知らず、馬車の行くに任せて、巴里の夜の大路小路を乗り廻る。電燈の光ばつと明るくなつて、霓裳羽衣の輩の右往左往に入り亂るゝ大通を行くと見る間に、忽ち馬車は長驅して薄暗い細い小道にさし掛る。時はもう十二時半過、巴里は之からだど、オ君が囁く。

忽ち花やかな音楽の音が何處ともなく聞えて、人通りの賑やかな廣い街角に出た。此處だ、と、オ君が先づ馬車を出た。僕も引續いて出た。見ると、片側には幾十輛の馬車がずらりと客待ち顔に列を正して立ってゐる。四方の家々は孰も電燈の光眩く照して、盛装した男女が出つ入りつ、如何にも事ありげな。華奢風流の巴里の夜の様は此處で窺ひ知ることが出来る、オ君がいふ。

音に聞えた巴里のモンマルトルとは此處である。美しさを言へば比較にもならぬが、形から言へば、一寸淺草の奥山といったやうな所で、見世物もあれば、お茶屋もある、如何がはしい女が頻に其の邊を徘徊することはいふ迄もない。眼の縁を鼠色に染めて、こつてりと白粉を塗つて、市區改正委員が頭を惱ましさうな大廂の帽子を阿彌陀に被つて、而してしやなら〜と長い裾を曳摺つて行く所は、成程見たゞけなら美しくいふものだ。オ君の案内で、先づカバン、ツ、ネアンに入つた「死人亭」「亡者軒」でも言はうか、入ると「入らつしやい」の代りに、法衣を着けた店の者一同が氣のめいるやうなお葬式の

歌を唱つて、先づお掛けなさいといふ。中はお寺の様に出来た薄暗い部屋で、卓子の代りに棺桶を列べて、其の上に細い蠟燭を立てゝある。四方の壁には、轢死、戦死、溺死など人の死ぬ所ばかり描いた畫をかけて、天井から下つた洋燈吊は骸骨を組み合わせたものだ。片隅に棺桶一つ立てゝ、何か貼紙があるから、何かと差覗けば「貧家」と書いてある。其處に例の法衣を着けた給仕が大臑骨を一本持つて出て、お客に向つて「やい、愈くたばりに來やがつたな、何な毒を飲ませてやらうかい」と聞く。聞かれたお客は、麥酒とか葡萄酒とか注文するが、誰も汚ないごて飲まぬ。其の中電燈の色

カバ、レ、ブ、ネ、ア



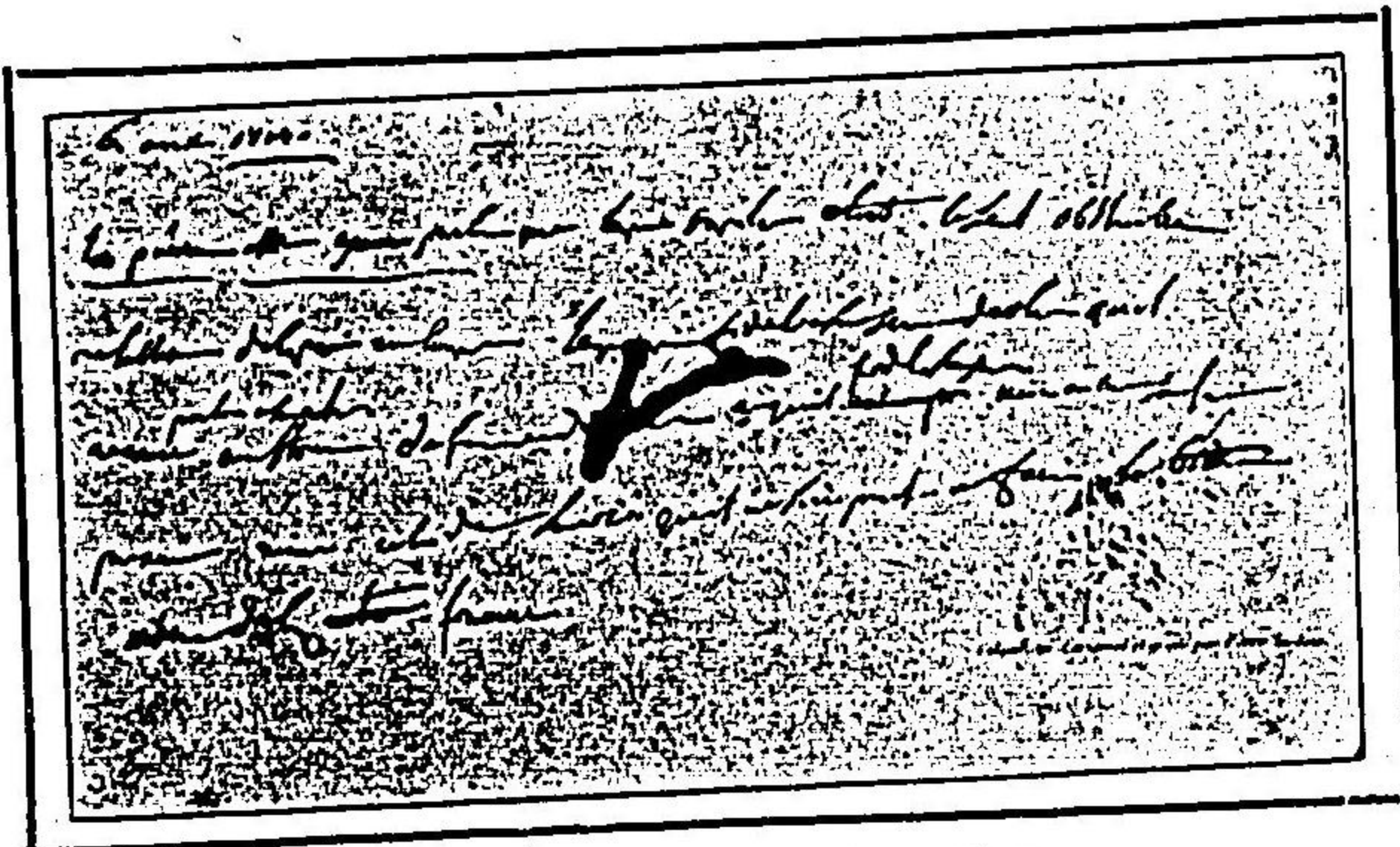
が颯と變つて、居合す一同の顔が死人の色になる、壁にかけた畫の人間が皆散骨になる、其の外さまぐの薄氣味の悪い藝を見せるのである。

此處を出てから、彼方此方と、興行物やら飲食店やらを十軒許りも見て歩いた。半裸體の女が踊る見世物がある。男女入れ交つて踊り狂ふ舞踏室がある、「地獄」がある、「極楽」がある、無暗に寄添つて来る女がある、奇怪千萬な玩具を竊に賣りに来る男がある。幕を張つて其の中で頻に鈴をがら／＼鳴らすのを、何ぞと見に入れば、若い女が二人、乳の上の小鈴を數多緊びつけて、無暗に乳を動かしながら踊るのだ。オ君は其の一人の乳を赫と掴んで、眞面目な顔で「矢張り乳だな」と言つて居る。張子細工でも思つたものらしい。又馬車自動車の所狭き迄に詰めかけた家があつた。男女の出入頗る繁きを、試みに何事ぞと見に入れば、花の香人の鼻を撲つて、中はぎ／＼と客に溢れた卓子が列んでゐる。給仕が洋杖の尖端にシルクハットを載せて、忙しげに奔走してゐる。成程雜沓の中では、シルクハットを斯うするものかなと思つた。

今の今迄菜食論や一夫一婦論で散々議論して居たかと思ふ間に、又斯な陽氣な所へやつて来た。此の陽氣なさんざめいた中へ來ても、オニール君は眞面目くさつた條件附菜食論者といふやうな顔をして、冗談一つ言はぬ。世界一の奢侈で聞えた巴里の中には、世界一の勤儉な民が住して居ると同じく、さしもの、バルザックが其の輕佻浮華を罵つた巴里の眞中にも、今晚會つた様な眞面目な學者が居る。此の酔ひ醜れたモンマルトルの人通を、謹直にして荷も口を利かぬオ君と連れ立つて歩くのは、左ながら雲の上を歩きながら、五濁の下界を見下してゐるやうな氣がする。眼の縁を鼠色に染めた女が何ちやい。(五月十四日)

四、巴里の大下水

臭い、臭い、はなはだ臭い。臭おそなと京都の片山茂三郎君(二)がいふ。臭くすなと、東京の中村平三郎君(三)がいふ。ふとい臭氣ですなと北海道の米谷秀司君(三)がいふ。なん



ボナレノ位置の粉書

巴里の下水

二百七十

「ごまの臭いやないかいな」と、大阪の梅原龜七君が言ふ。如何にも臭い。

僕等は七八人連で、今しも巴里の地の下を潜つて居る。市役所の技師に案内せられて、ルーブルの側から、セイヌ河の岸に下りて、此處から此の下水の中へ入つて来たのである。巴里の下水といへば、巴里二百七十萬の人民が日々夜々に垂れ去り垂れ来る所の糞尿、其の他の汚物を集めて、一舉に之を海中に洗ひ下すので、之が巴里全市の地底を蜘蛛手に貫いて、總延長八百九十哩とある。中にも大下水となる、高さ十六尺、幅は十八尺から二十尺もあつて、名は下水道だが、見た所は立派な隧道に小川が流れてゐるに異ならぬ。巴

里の家々から家々に仕つらへた鐵管を傳つて流れ出た汚物が、一先づ小水道に落ち合ひ、夫れから追々に大水道に集まつて、到頭海中へ出るといふ仕組なので、其の間に幾箇所か沈澱池があつて、固體の汚物は途中で追々に沈んで行くことになつてゐる。だから愈々海へ出るといふ所迄行けば、水は殆ど清み切つて、臭氣も何も丸でないといふ。

如何にも、海へ出る頃はさうかも知れぬが、僕等の立つて居る所は、まだ巴里の中心とて、中々臭い。水も淺草紙の様な、す黒い色をして、上には紙片やら何やら様々の物が浮いてゐる。尤も水は少しも流まず、滔々と勢激しく流れて行くので、聞いたゞけでは小氣味のよい音がする。何でも此の邊の深さは凡そ二丈もあるといふから、一たび其の中へ落込んだが最期、此の急流に此の深さ、先づ助かりやうがない、と技師が語つた。之を聞いて、片山君が念佛を唱へたといふ説と、唱へなかつたといふ説と、兩説ある。

下水の天井には、隙間もなく鐵管やら鉛管やら銅線が引張つてある。此の中には電燈、電話、電信の諸線はいふに及ばず、瓦斯管もあれば、地下鐵道用の電線もある。中にも飛ばけて

巴里の下水

二百七十一

太やかな鐵管の我は顔にのさばり返つたのは、上水道とこのことだ。一口に下水道と言つても、此の下水道を利用して、上水道も電線も何もかも引かれてゐるのである。例の濁流滔々たる下水道の兩側には、人道と言つた様な小道が附いてゐる。少し奥へ進むと、此の中央の下水が埋設下水のやうに成つて、其の上に軌道を敷いて土工用の電車が運轉される。僕等は此の土工車に乗つて、更に奥に進んだ。巴里の下水道を聞けば、「ミゼラブル」のジャンバルジャンが半死半生のマリユスを引擔いで逃出した所を思ひ出して、何だか地獄の底へでも入る様に思つて居たが、此の邊の大水道になると、廣々とした隧道の中に、光は外方からもさせば、中なる電燈からも来る。大津の疏水の隧道などよりは遙に陽氣だ。殊に此の大下水には遊覽用の端艇を幾つとなく浮べて、見物人を載せて中を漕ぎ廻ることの出来る仕組になつてゐる。もう念佛ごころでない。歸らうとする時、兎もある沈澱池の上に、蟹が八本の足を擴げた様な二尺許りの器械が吊るされてゐる。技師が其處に居合せた人夫に指圖すると、之がするく下つて、水の中

に潜つて仕舞つた。間もなく上つて來たのを見れば、今迄擴げて居た足が緊と喰ひ合つて、其の中に様々の物をつかんで居る。何な物が流れて來るかも知れぬので、處々此の機械で水の底を探すのださうな。時々飛んでもない金目の物を拾ひ上げることがありますと、技師は笑つた。

見物終つて下水を出れば、俄にぼや／＼と曇るを覺えて、快いセイヌ河邊の空氣がすうと胸に入る。何時の間に降り出したか、雨が盛に降つてゐる。(五月十五日)

### 五、凱旋門の上

大使館の午餐會から歸り途、僕と大夢和尚とは、ぶらりとエトワールへ出た。

「奮發して一つ上つて見やうでないか」と、凱旋門を見上げながら、さも口惜じさうに和尚が言ふ。和尚が便々たる巨腹を抱へて、二十何貫の胴體を、力學の原則か何かに依つて、百六十尺に餘る凱旋門の頂上迄運び上げるといふは、成程奮發である。同時に又奇觀で

凱旋門の上

もある。僕は一も二もなく承知した。  
 先づ細い暗い螺旋状の梯子から昇り初める。二百七十何段あるとやらいふので、中々長い。電燈は點いて居るが、光が都合よく行き渡り兼ねて、道の曲り具合では明るくもなり暗くもなる。其の丁度暗くなつた頃に、上から下りて来る連中とぶつかることがある。若い娘などが陽気にげらげらと笑ひながら下りて来る。ちう／＼と不思議さうに人の顔を見詰めたが過ぎて仕舞ふ。斯ういふ薄暗い所で、突然顔色の違つた者と出逢ふのは、餘り心もちの宜いものでないらしい、と思ふと、餘り心もちの宜いものでない。  
 漸う上り着くと、上には立派な廣場があつて、繪葉書も賣れば、眼鏡も賣す。眺望を言へば、逆もエッフェル塔には及ばぬが、夫れでもエッフェル塔から見える位の巴里の名所は、トロカデロの樂堂、サンバリの金色塔、エリゼ宮、ルーブル宮、ノートルダム寺院など大抵此處からも見える。殊にエッフェル塔からは見えぬエッフェル塔が、此處からはセイヌ河を隔てて巍然として目の前に立つて見える。此の塔を見ると、如何にも

凱旋門の上

世間が歐羅巴臭くなつて来る。僕が初めて此の塔を見たのは、薄霧のかゝつた或る春の朝であつたが、今迄盡許り見て居たことゝて、何だか畫の様な氣がして、彼れでも觸ればつかまるものかと思つた。今見ても矢張さうだ。  
 併しながら、凱旋門の眺望は恐らくこんな遠い所に求めるには及ばぬ。試みに眼をすぐ我が脚の下に向けると、此の凱旋門を中心にして八方に開けた十二條の大路が、坦として髮の如く連なつた様、先づ何處に行つたかで見られた景色でない。シャンゼリゼは、コンコルドの邊まで、茶々たる緑樹の間に馬車自動車ごと押詰まつて、大地が見えぬ位。之と凱旋門を隔てて向合つたグラランド、アルメの通は、長くも續いたりな、其の末は雲に入るかと許り。其の隣のブロンヌ公園通は、丁度今頃が公園に出歩く時刻とて、右側だけは隙間もなく幾百幾十の自動車行列び馳せて、正面目近に見ゆるブロンヌの森に急ぎ行く。此の隣がユーゴ通り、其の又隣がクレネル通り、夫れから何、次は何と、家並町並井然とて一絲亂れぬ十二條の大通が、左ながら車の輻の様、此の凱旋門から走り出た所は、



ラビノ氏を憶ふ  
流石に何しても天下の巴里だ。

紐育が泣いても、倫敦がわめいても、此の街衢の美に至つては、逆も此の巴里の足許にも寄り附けぬ。倫敦を我が物顔に振舞つた僕と、紐育を自分の家のやうに心得た大夢とは、此の凱旋門の上で、初めて互に我を折つて、此處に長へに仲なはりの握手をしたのである。

(五月十七日)

### 六、ラビノ氏を憶ふ

去年の春、露都で元「タイムス」の通信員であつたマッケナ君に會つた時、マ君からラビノ氏の話を大分聞いた。ラ氏は有名なブローキッツ以來の巴里通信員と稱せらるゝ人で、歐洲の政治外交の事情に精通し、獨り「タイムス」社が社中一位の通信員として珍重する所なるのみならず、又歐洲の政治社會、外交社會にも、隠然無官の外交家として重きをなして居る。歐洲で巴里の「タイムス」特派員を知らざるはなく、巴里でラビノの名を知らざる

はないこのことであつた。

露都から倫敦に向ふ途中、僕は此の老通信員に敬意を拂はんが爲に、一寸巴里の「タイムス」社へ寄つて見た。所が不幸にして丁度其の時は不在中で會へなかつたが、其の代り助手のオーニール君が會つて呉れて、オ君からも亦ラ氏の話を大分聞いた。倫敦に着いて後受取つたオ君の書面に依ると、ラ君が歸つて僕の來たのを聞いて、非常に残念がつかたといふことであつたが、豫てブローキッツの自傳や何かで、巴里の通信員の何たるかを聊か解して居た僕は、何で忙劇なる歐洲の政界に虚日なく奔走する此の老政客が、田舎の一新聞記者に會へなかつたからとて、さうく残念がることがあるものかと思つて、オ君が折角の書面を、唯一通りのお世辭のみ聞き流して仕舞つた。

今年世界一周の途中、巴里で又「タイムス」社を尋ねて見た。差當り先づオーニール君は居らぬかと聞いて見たら、「オ君はまだ來ぬが、私がお目に懸りませう」と言つて、心もち腰の曲つた柔和な老人が、つかくと僕の名刺を持つて出て來た。まさかとは思つたが、念の

ラビノ氏を憶ふ

二百七十七

爲に、卿がラビノ君ですかと聞くと、「如何にも其の通りです。去年は折角尋ねて呉れたが、生憎不在で大變残念でした。」とちやんと去年の事を覚えて居た。オ君の傳言もお世辭ではなかつたらしい。

僕はブローキッツに會つたことがないが、其の書いた物で想ひやると、何だか眼光炬の如く、口元の引緊つた、滅多に莞爾ともせぬ、生馬の目を抜くやうな、而して新聞の爲にさへなる事なら、私の情誼を破し、區々の小節を棄て、顧みぬ、霸氣満々たる人であつた様な氣がする。ラビノも亦必ず斯な人だらうと思つて居たが、さて會ふと之は又虫も殺さぬやうな顔をした人だ。一寸八字髭を生じた、色の青白い、背の高い、瘡形の、優しい、穩かな人で、ゆるり／＼と静に口を利く。之が一管の筆に依つて、歐洲の風雲を捲き返し來る底の、我同業の老将とは何しても受取れぬ。

話頭は先づ世界一周會の事や、「朝日」で「タイムズ」との關係から始まつて、頭本君は何うして居るか、徳富君は達者で居るかなとの問題に廻つて、夫から端なく日米戦争の事に及

んだ。丁度此の頃は、巴里で日米戦争説が最も盛な時で、兩國今にも干戈を交へんとして居るものゝ如く報じた新聞もあつて、ホブソン大尉の排日本論などは、争つて巴里の新聞紙に轉載されたものだ。日米戦争説は、日本に居ると丸で聞かず、米國でも思つた様にやがましからず、却て此處巴里に來つて、其の仰々しく囁し立てられるのを聞くのは不思議な位である。是れ或は、獨逸が暗に手を廻して、搔廻さうとして居る爲でないかと、いふ人さへある。

僕は先づ、日米戦争説の、此の邊にこそ盛なれ、日本では全く暖にも出す者がないこと、日本の新聞紙中一として兩國相戦ふべしなど論じた者のないは勿論、斯の如き繊細な問題には、タッチするをさへ憚つて居る位であることを述べて、更にホブソンの議論に就いては、華盛頓で國務次官から聞いた話を口移しに傳へた。ホ大尉の排日本論が新聞紙に出るご、間もなく眞向から之を攻撃して、殆ど息の根を止めた大議論が出た。筆者は十七年間日本の仙臺に居て、専ら傳道に従事したデフレラスト博士だ。博士は其の該博なる日本に

ラビノ氏を憶ふ  
 關する知識を利用して、右を突き左を撃ち、手強いと見た所は疊みかけて切りさいなみ、ホブソンをして、殆ど全く完膚なからしむるに至つた。人を攻撃した文も數次見たが、之は痛快にやつてやり捲くつたのは見たことがない。之で大尉と博士との喧嘩は丸で角力にならぬことが分つて、日本鼠負の者は孰れも皆すうと胸のすく心地がした、と國務次官のウキルスン君がさも愉快さうに語つた。

ラビノ氏は、僕が下手な英語の長談義を辛抱よくうん／＼と聞いて居たが、僕が話し終ると、息を吐いて、「私も夫を聞いて大に安心した。日米兩國が戦争したとて、兩國共に何の得る所もない。唯之に依つて漁夫の利を占むるのは獨逸許りだ。獨逸が今日の孤立の地位をより返さうと焦心して居るのは、自分柄とはいひながら、餘所目にも氣の毒な位で、所謂虎視眈々として乗すべき機會の至るを待つて居る。國民には國家の利害の爲に戦争を辭せぬといふ覺悟が必要であると同時に、愈々戦争を開くに至る迄には、交戦國以外に、何様な敵や味方があるかも知れぬことを、勘定の中に入れて貰はなくては困る。さう、例のゆるり

ゆるりとした調子で、諄々として話しかけた。其の中オーニール君が入つて來たので、此の日は之で分れた。

忘れもせぬが、其の翌日即ち五月の十四日の夕方、僕はオーニール君との約束に依つて、再びシヨーセ、ダンタンの「タイムス」社にオ君を尋ねたら、ラビノ老人又もやつ／＼と出て來て、オーニールは未だ來ぬが、一寸君に紹介したい人があるから、此方へ來て呉れといふ。命に隨つて其の事務室へ尾いて行くと、其の紹介したいといふのは、倫敦「タイムス」社の前の持主で、今の取締役の一人たるウラルター君であつた。ウ君とは去年以來かけ違つて、今迄會へなかつたのである。斯くて此處で三人卓を圍んで、オ君の來る迄四方八方の話をしたのが、僕のラビノ氏を見た最後で、今更思へば、其の時から何やら言葉に力がないと思つたが、今や長へに逝いて歸らぬ旅路に就いたこの路透電報に接した。數ふれば、まだ其の時から三月も經つて居らぬ。

ゼノアの町々

# 伊國鴻爪

## △ゼノア

### 一、ゼノアの町々

たしかデッケンスの何かの中に、斯んなことがあつたと記してゐる。「細い小路を幾曲りか曲つた奥の奥に、忘れられたやうな家がある。恐らく此の家が若い時分朋輩と隠ん坊をして、餘り旨く奥の方へ隠れ終せたので、到頭誰にも見附けられずに、其の儘今日迄奥へ葬られて仕舞つたのだらうと、思はれるやうな家だ。」とある。取つて以てゼノアを叙するに足る。ゼノアの町は殆ど皆夫れである。

窓の小さな三階四階の家が兩側に立ち列んで、不器用に瓦落多石を敷きつめた一間半許りの道が、其の間に通つてゐる。之が大通である。此の大通が勝手次第に曲りくねつて、丸で行く先が知れぬ。突當りの積で行つて見ると、一寸家の軒を潜れば又直ぐ道が開ける。

成程、窮すれば通すとは之だなど可笑しくなる。今度はまだく先方へ進まれるものと思つて、すたこらやつて行くと、道は忽ちがつかりと落ち込んで崖になる。もう行けぬ。地團太踏んでも行けぬ。崖の下の家が、孰も皆「甘酒進上」顔をしてゐる。

何處迄が大道で、何處迄が人の家だか、夫さへ時としては分り兼ねる。屋根があるから家かと思へば、家は家だが、之はアルカードで其の中を人が往來同様に、勝手にアルカードである。電車が家の中へ走り込むので不思議に思つて聞けば、家と見たのは、矢張り曲

ゼノアの町々

カテラチオオ城址



ゼノアの町々  
二百八十四

り角であつたり何かする。昨夜此處へ着くと、直同勢四五人で町を歩きに出かけた。踏み迷つては大變と、おづ／＼物で、敷石のある大道ばかり選つて行つたが、其の中うかごして小さな坂一つ下へ下りると、町が急に狭くなつて、兩側に立ちはだかつた男女が、口々に何やらからかひ出して、丸で家の中だか、公けの道だか、分らぬ所へ出て仕舞つた。後で人に聞いたら、其様な所へ行くとおやないと言つて、ふと笑つた。行くものぢやないと言つたつて、態々行つた譯ぢやない。自からなる足のすさみだ。仕方があるものかい。道の曲折だけならまだしもだが、之に、到る處急勾配の高低だから堪まらぬ。桑港の様は、一寸さうは參らぬ。一たび此のうね／＼の坂道に建てた家の間へでも踏み込んだら、何としても方角のつけやうがない。何でも十六世紀の中頃に、ガラアツマ、アレシといふ急勾配に家を建てることの上手な建築家が居つて、夫から此の一種特別な家の建方が初まつたといふ。便利不便利は姑く措いて、唯見た所だけをいふと、如何にも風流な所がある。

巧に急坂を利用して、威風堂々たる幾百武の階段を、家の真中央に仕つらへた今の市役所の建築は、言ふにも及ばず、其の他の賤しい町家でも、坂に寄つて斜に建て渡して、高い所から薔薇の色香めでたきを垂れさせた所などは、如何にも書割じみて嬉しい。

クック社のマンテリ君に誘はれて、二三人でカステラクチオに登つて見た。先づホテルの側にある洞穴の様な停留場から電車に乗ると、此の電車は長い峻しい隧道を潜つて、サンニコロといふに着く。此處で乗り替へると、今度の車は急勾配を走り上ることゝて、車の底を勾配通りに造り做して、横さまに設けた幾條の客席が、丸で階子段の様になつてゐる。だから如何な峻坂にさしかゝつても、乗客はちやんと水平に坐つて居られる。如何にもゼノア式だ。斯くて凡そ一千尺も上り詰めると、此處にカステラクチオの城址があつて、脚下に有名なカンボサントの墓場が見え、ゼノアの町々が一瞬の中に鍾まると。

此處で、マンテリが茶を啜りながら、頻に伊太利の土木工學の發達を自慢し初めた。伊太利の建築といへば、珍らしくもない話だが、僕はゼノアの道路家屋鐵道に一種の趣あ

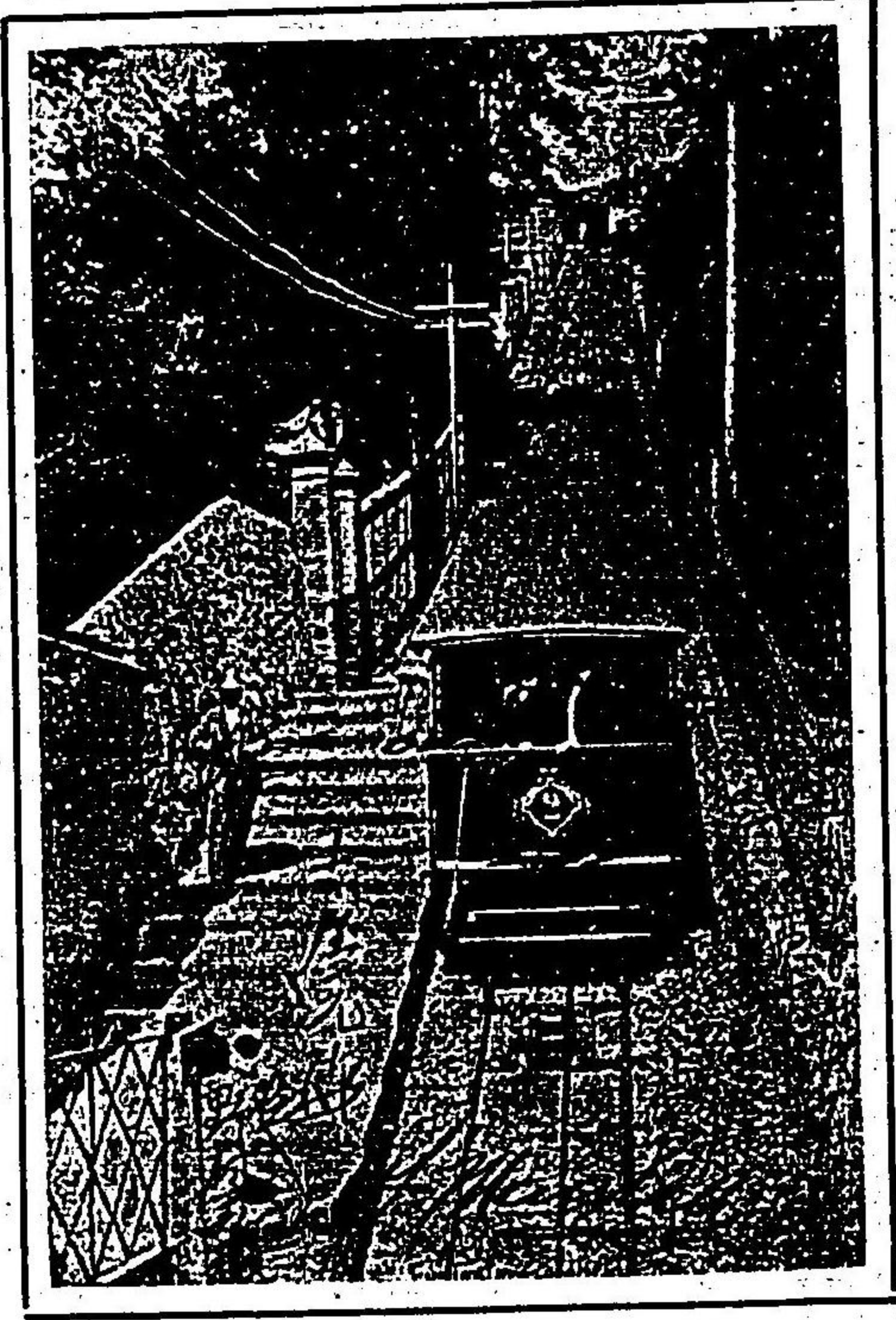
ゼノアの町々  
二百八十五

フリーメーソン  
ることを認めざるを得ない。(五月十九日)

### ニ、フリーメーソン

ゼノアのホテルに着いた其の夜、我等一同晩餐の卓子に向ふと、長い大卓子の一方の端に坐つたクック社のマンテリが、忽ち妙な手つきをして、片方の端に坐つた同じクック社のメレンダ(註)に相圖を初めた。メレンダも亦之に應じて、妙な手つきをして居る。僕はメレンダと隣同士、一體夫は何だと聞くと、フリーメーソンといふ、成程其のフリーメーソンなら、僕も少し話したいことがある。

フリーメーソンといふは一大秘密結社である。社員は殆ど全世界到處に行き渡つて居る。幾名かの會員が集つた所には、必ずロッヂと唱ふる一種の會館がある。此の結社の目的は、人類博愛の大義に基いて同胞共濟の實を擧ぐるといふに在るので、共濟組合と譯せられることがある。今でも日吉町の國民新聞の隣に看板の掛つてゐる「共存同衆」なる



(註) 阿比留の鋼索橋

ものは、或は此の種のロッヂを學ぶ積で出来たものではなからうかと、僕は豫てより疑つて居る。

此の結社には不思議な儀式がある。入社も進級も、一々此の不思議な儀式に従ふ。進級とは社員に様々な階級があつて、何でもエンタード、アップレンチス(見習)といふが最下級で、夫からマスター

1 (棟梁)、グランド、マスター(大棟梁)など、次第に上に進むのを言ふのである。社

フリーメーソン

員と社員との間には、一種特別の隠語があり、信號があつて、社員の階級の進むに従つて、之が次第に複雑になつて来る。だから顔は初めて見合せた許りでも、社員同志ならば一見して夫と分る。一寸合圖をすれば、自分より階段の高低か低いかは直ぐ知れる。此が分れば、もう雙方は水魚の中、心おきなく腹の底を測つて、相談もすれば手傳ひ合ひもする。此處が共済組合の共済組合たる所以である。

例へば、買物は成るべく組合員の店でする、用事は大抵組合員の仲間を辨するやうにする。組合員中に不幸があるとき、皆行いて助ける。組合員の商賣か思はしくないとき、皆寄つて掛つて之を引立てる。斯な風に組合員互に相助け相庇ふ所から、此の秘密結社は暗々の間に恐ろしい勢力を振つて居る。組合員の中で、一敗地に塗れて復起つべからざる程に零落する者は滅多にないと同時に、一たび組合員の信用を失つたとなるとき、何んな會社でも銀行でも立ちこころに潰れるといふ位である。

其の起原をいへば、ソロモンの宮居を建てた時に始まるといひ、ペタルの塔の時に起る

フリーメーソン

ともいふ。甚だしきはノアの箱船以來の組織だといふもあるが、皆嘘の皮だ。何でも中世紀の頃、英吉利で教會寺院の建築に、無關係な大工や石屋を無暗に普請場へ入れてはならぬといふので、互に符牒や信號を使ひ交したのが、此の結社の組織上の初まりらしい。現にメーソンは「石工」の義で、階級の名の「見習」とか「棟梁」とかいふも、盡く石工の間の言葉である。今の英吉利のフリーメーソンは、千七百十七年に其の頃あつた四箇のロッヂを一にして、大ロッヂとした時から初まるので、其の以來ロッヂの設立は勅許を受くることになり、時の皇帝皇太子が符つて大マスターの位に即かるゝ位になつた。随つてメーソン自身の珍重せらるゝことも亦昔の比でない。尤も英吉利では此の通りだが、法律上秘密結社の禁止せられてゐる日本では、中々やかましい。横濱にあるロッヂの取締が問題になつたこともあるし、林前駐英大使が何とかマスターに薦められて歸つた時も、何だ角だ問題になつたことがある。

今度の旅行には、不思議に此のフリーメーソンと一所になつた。太平洋の船の上でマキ

フリーメーソン  
二百九十  
ロツプといふ英吉利人が、頻りに運動會の世話を焼くに、お世辭も何もいはず、きびくど  
仕事を運んで、如何にも小氣味が宜い。大夢和尚が見て、フリーメーソンの奴は皆善い奴  
許りだと僕に教へて呉れた。英吉利でウキンブル宮の前の午餐會の時「メール」社のコリ  
ー君が何か合圖をするに、クック社のアンドルースが之に答へた。夫と察してコ君に聞け  
ば、果して二人ともフリーメーソンであつた。此の席には外に二三人もあつたらしい。レ  
ミントンのチャンドラー君も亦此の一人で、僕が半年も倫敦に居るなら、是非僕を社員に  
推薦したいかとのことであつた。而して今又マンテリとメンダとが之だ。  
食事がすむ。伊太利の葡萄酒をしたゝかに參つたメレンダは、メーソンの隠語も宜しく  
と許り、昨日習つた日本の端歌を伊太利式の卷舌で讀み上げる、「アーブラケノナイミィダ  
レガミ」。一同は哄と笑つた。(五月十九日)

△ 羅 馬

三、該撒城址の小酌

羅馬の町々が次第に夕暗の裏に消えて、彼方の丘の上、此方の森の蔭には、ぼつ／＼と  
灯の影が加はる。巨人の立ちはだかつたやうなは、暗にもしるきコロシム。火事場の跡  
とも紛ふ廣場は、バラチンの丘。眼下には谷のやうに落ち込んだマキシマス帝とやらんの  
競馬場の跡がある。僕等は今之を見下しながら、カステロ、デイ、チエザリの上で、徐に  
酒を酌んで居る。嗚呼西羅馬倒れてより、此に一千四百年、さしも一世の豪華を極めた羅馬  
も、今は僅に敗垣断礎の上に昔の偉を留めて、ありし世の金殿の歌吹は長へに絶えた。  
恚うして見下した所は、何處もなく陰氣な亡國の様に、物のあはれが知れる。  
大使館の宴會が果てて後、僕と大夢和尚とは、代理大使の龜山書記官に誘はれて、夕  
風涼しい羅馬の町を、ぶら／＼と此處へ來た。カステロ、デイ、チエザリとは「シーザ

該撒城址の小酌



該城址の小附  
が城」の義で、此處に其の昔ジュリアス、シーザーの居城があつたのだといふ。後にタイバ  
ーの流を負うたアベンチナ  
スの丘の端まで、如何にも  
形勝の地である。夫れが今  
料理屋となつて、細い石室  
の様な段階子を上げれば、一  
寸物見櫓と言つた様な所  
に、野天の食堂が出来てゐ  
る。名は忘れたが、何でも  
羅馬では誰彼なしに必ず飲  
むといふ白葡萄酒の様な酒  
を、龜山君が注文する。手のついた片口の様な陶器の壺に入れて、上に何かの樹の葉を載

羅馬第二帝祖ガウス・スタス



せて、持つてくる。所が所だけに、頗る其の姿に趣がある。飲んで見ると味も亦旨い。  
和尚は件の壺を兎見かう見して居たが、急に欲しくなつたものと見えて、龜山君を勞して、  
給仕に談判した結果、到頭十リラで買取ることになつた。人の好みといふは妙なものだ。  
僕にはこの曲みくねつた尿瓶の様な壺を、十リラで買つて、山海萬里はるく日本迄持つ  
て歸らうといふ、大夢の氣が知れぬ。  
且酌み且語る。話頭が自から眼の前に見ゆる羅馬の市から初まつて、プチカン宮のこと  
に及んで来る。プチカンの法王宮とクキリナルの伊國王廷とは、兎もすれば、互に衝突  
する。法王の方では、千八百七十一年の法律で治外法權の特權を與へられたプチカン宮ラ  
テラノ宮及びカステル、ゴンドルフの別墅を、其の儘に有する領土と死守して、今も尚  
王の王たる法教上の元首といふ顔をしたがる。一方伊太利の宮廷では、昔は知らず、今は  
羅馬府門に堂大の土地を擁する舊形式の殘骸、格別恐い物でも何でもないど、法王宮を見  
くびつて居る。夫や此やで、外國から來た羅馬駐劄の外交官は、時々板挟みの姿になつ

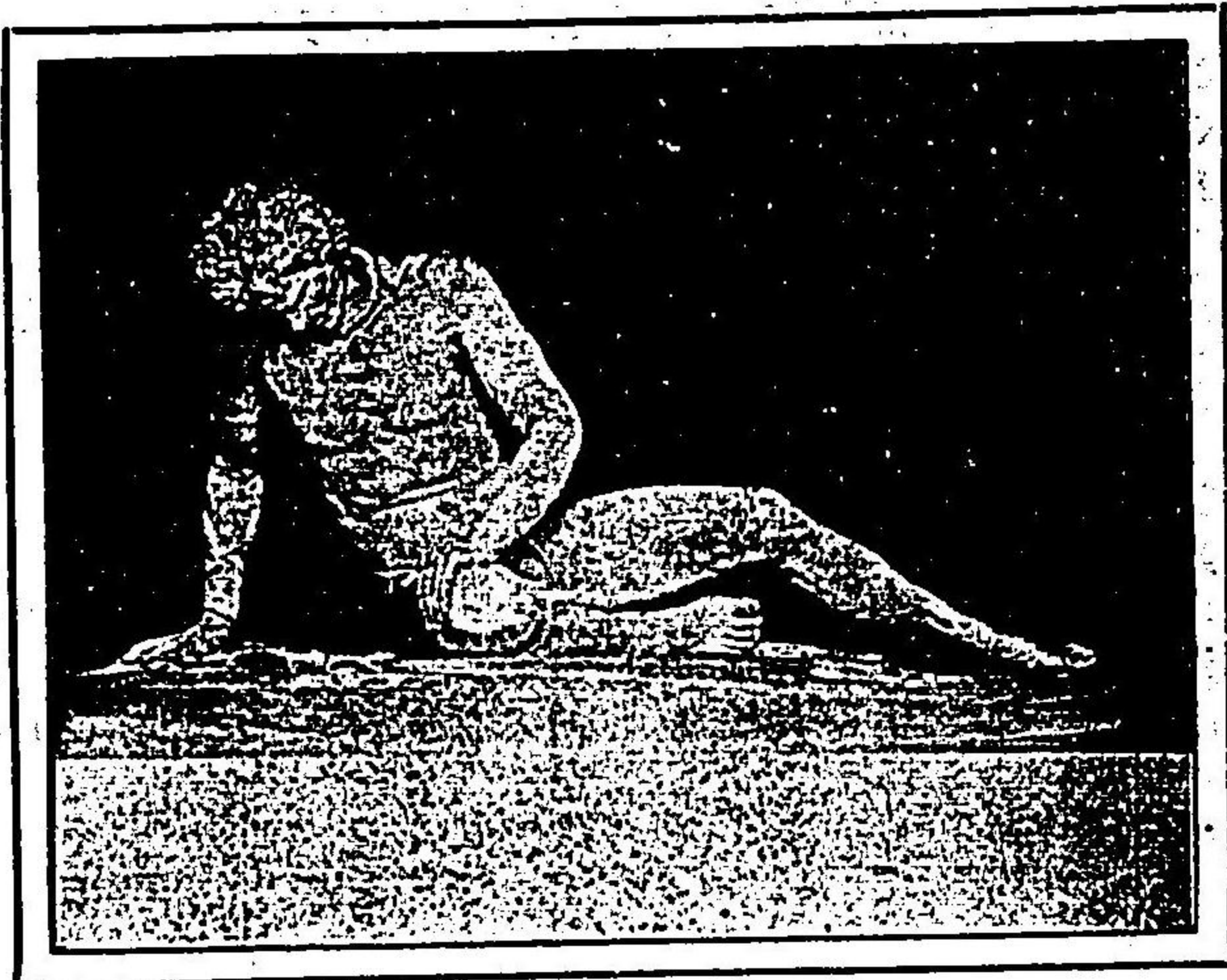
て困ることがある。といふやうな話が、夫から夫へと出る。現に前年日本へ法王の使者として、米國のオーコノル僧正の來朝したことがあつたが、今度其の答禮使を日本から出すことになつても、手近い伊太利の大使館からは行かずに、態々埃太利駐劄の内田大使が行かるゝことになつて居ると、龜山書記官が言ふ。

兎角の話の中に夜も深ける、酒も廻つた。今夜人の寢静まるを待つて、或所を乗り廻さうといふ野心のあつた僕は、急に和尙を促して此處を出た。和尙は後生大事と例の酒壺を小脇に抱へてゐる。龜山君は星光爛たる空を見上げて、是なら天氣は大丈夫、其の頃には月も出やうといふ。只ある道の邊の森の下蔭に、若い女が三四人、調子の暢々とした伊太利の歌を歌つて居たが、僕等の出て來るのを見て、はたと歌は止めて、急に一同で哄と笑つた。能くある奴だが、碌でもないことを歌つて居たに相違ない。(五月二十二日)

四、月のコロシヤム

時は丁度午前二時半、月が今しがた出た所である。起しに來て呉れた猪飼史郎君と共に、更に勝田忠一君を起しに行つて、手早く身仕度を整へて、三人ぶらりとホテルの玄関に出た。不思議さうな顔をして、僕等の下りて來る姿を見て居た夜番の男に、急ぎ表戸を明けさせて外へ出ると、隣近の星の光は淡く空に輝いて、月は出てゐるさうなが、四邊の大きな家に隠れて見えぬ。兎も角もどて、とある汁待馬車に御者の睡りこけたのを揺り起して、飛び乗れば、御者は命せられたまゝに、コロシヤムに向つて、一目散に馬を奔らす。一目散はよいが、此の男時々鞭を手にした儘で居睡つて、あはや御者臺から轉げ落ちやうとしたことが幾度あるか知れぬ。——羅馬の家々は、今尙深い夢の裡に在る。

間もなくコロシヤムの前に着いた。僅に去にし昔の骸をどめたといふだけの、荒果てた大廈が、暗の中にぬうと立つて居る。月は今しも雲に隠れて、處々に心細げな薄暗い



奴 劍 の 死 湖

二百九十六

街燈が、辛く道を照すばかり。此處で馬車を下りて、がらんとした大隧道の様な入口から、其の演武場の中央へ入つて見た。四顧寂然、藥臭い草の香が鼻を撲つて、千鳥の聲の低いやうな鳥がひひひと何處かで啼いてゐる。見上ぐれば、我等を取圍んで、四方は觀衆六萬を容れたといふ四層樓の觀覽席。四層樓とはいふものゝ、四層今に全きは殆ど稀で、多くは二階三階の外壁を存したゞけ。其の壁一重を穿つて、圓窓角窓から、雲さまざまの形が見える。月がばつと横雲を断れて出る。如何にも詩的だす

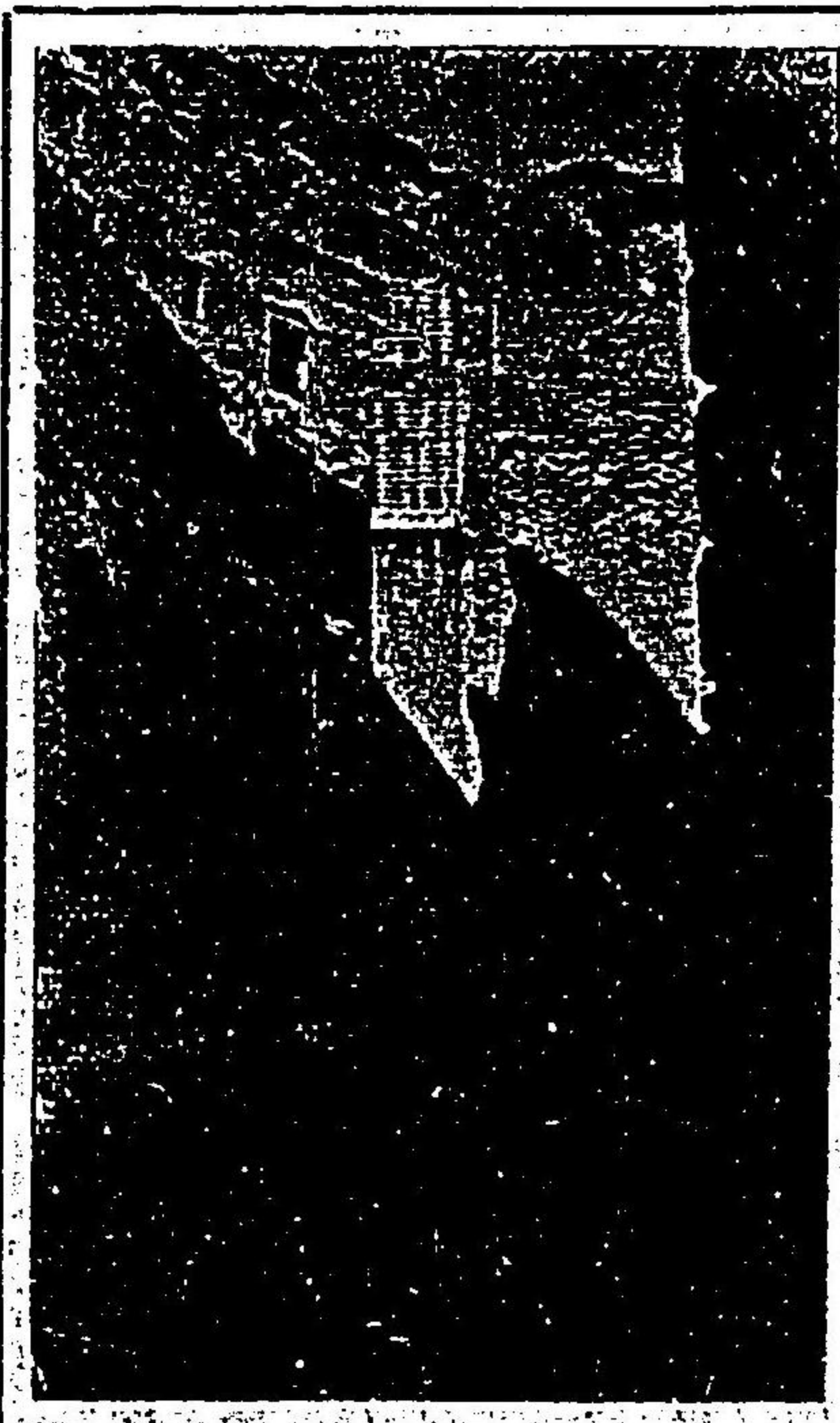
な、と、史郎君は初めて口を開いた。

思ふに、羅馬の強大を語るごと、コロシアムより詳かなるはなく、羅馬の衰滅を語るごと、亦コロシアムより精じきはない。コロシアムは羅馬の豪華を示すと同時に、羅馬の醜惡を説いてゐる。羅馬の美此に在り、羅馬の愚亦此に在る。今斯く中夜人定まつて後に、此の廣場の中に立つて、過來し古を顧みると、其處等の觀覽席には、暴君ネロか、クロヂアスガを中に圍んで、美人雲の如く居流れ、だらしないトীগを肩に纏つた羅馬の紳が、だらしない横坐りに坐つた様が、ありくと見える。さう思ふと、丁度我等の立つた所には、悄然として今日を限りの命と立出でた基督教徒なんどが、あはや一口を待ち構へた虎豹の毒牙にかゝらんとしてゐる、其の同じ昔のまゝの様が胸に浮ぶ。雲の如かりし美人も、だらしのなかりし紳も、今や長へに逝いて、此の藥臭い草の香のする無人の敗墟に、唯月ばかりは昔のまゝに照つてゐる。如何にも詩的である。

チトス帝が初めて此のコロシアムの工を竣へた時は、開場の式として、百日間引續いて、

劍客の大演武を行つたさうだが、其の間に屠り殺した猛獣の数は約五千頭とある。恩も怨みもない劍奴を眞劍勝負で立ち會はせるさへ、今聞けば悚然として膚に粟の生ずる位であるに、夫れが劍奴と猛獣との闘を聞けば、聞くだけで目をつぶりたくなる。所で劍奴ならば、職業柄として致し方もあるまいが、罪も咎もない基督教徒などが、唯殘酷を喜ぶ羅馬市民の眼を娯ませるばかりの爲に、此の演武場の中へ投げ込まれて、餓虎の餌食となつたことのあるに至つては、慘も亦極まる。五六年前の巴里のサロンに、畫家ジエロームの出した有名な畫がある。景色は丁度コロシアムの演武終つて、幾十の奴隸共が虎、獅子の類を穴の中へ追ひ込まうとする所である。背景には、コロシアムの觀覽席が見えて、見物人は殆ど残り少に散じ去つたところ、中には、あだめいた女が頭をさし延へて、下なる奴隸とからかひ合つてるものもある。下なる演武場では、振り上げる鞭の音に、おとなしく穴へ歸り行く野獸もあれば、勢ひ鋭く飛び掛らうとするものもある。場の周圍には、磔刑にして、炬火を代へられた人間が、彼方此方にまだ燻つてゐる。大地には流血淋漓、殺された

コ ロ シ ャ ム 内 部



血みどりの死骸もあれば、首や手足だけちぎられて飛んだものもある。其の凄愴の状、連も一目とは見られた者でない。其の二目とは見られぬものを、羅馬人は角力か芝居でも見る氣で、喜んで見に出かけたのである。夫れを又喜ばせて一日でも永く市民の歡心を繋がんが爲、羅馬の暴君虐主は、屢此の慘を敢てしたのである。

歩を移して、演武場の廣庭から、觀覽席の下の方を見て廻ると、其の荒敗の様坐ろに哀を催さしめる。壯麗天下に比ぶものもなかつた此の大建築も、度々の地震に遭ふ、屢タイパーを溢るゝ洪水の中に浸かる、其の中北から攻め

入つた蠻族の手に歸して、城砦の代りに使はれる。中世になつては、ゲルフだ、ギベリンだ、様々の朋黨軋轢の渦中に投ずる。ギボンの書いた所に據ると、其の頃市民の中には、勝手に此の中の石を持ち出して、石灰を焼く者が出る、石と石を縫ひ合せて鐵釘銅板の類を盗み取つて行く者が出た。之が爲めに、石は次第に毀たれ、壁には到る處釘の穴が明いたとある。如何にも正面から此處の壁を見渡せば、穴が蜂の巣のやうに明いてゐる。金具を盗み取つた跡の穴を、更に切り擴げて、此の下に店を出した商人の天幕の支柱を繋ぐ穴にしたのだと、ギボンは言つてゐる。

斯くは荒れ果てゐるが、觀覽席の下の階子段や、通路や、出入口は、流石に雨露に曝露されぬ丈あつてが、依然として舊態を存して居る。フキリツブ帝が建國一千年祝典を擧げた時などは、恐らく此の邊に窺つたる美人や、端麗なる貴公子や、月桂冠の儼しいのや、甲冑の装ひ甲斐々々しいのが充満して、開場運じと待ち構へたであらう。頗て、僕等は猛獸を収めておいたといふ檻の跡へ出た。次で死骸を投り込む爲に掘つたといふ穴の所へ出

た。劔奴の試合に負けて殺された者や、罪囚の虎、獅子に噛み殺された者は、無慘にも釘に引懸けて、此の穴迄大地の上を引摺つて來たのである。引摺られた跡に血の流れたのは、豫てふり撒いてある鋸屑に染ませて之を掃き取り、更に新しい鋸屑をまいたとある。

僕は此處迄來て、不圖彼得堡のアレキサンドル美術館で見た、コロシアムの畫を憶ひ出した。舞臺は丁度此の觀覽席の下なる獄舎から、基督教徒らしい夫婦の者が理不盡にも演武場の中へ引き出されやうとしてゐる處で、遠見には僅に開いた獄舎の戸口から、對側の觀覽席がぼんやりと見えて、演武場には獅子が口を開いて待つてゐる。男は流石に臆びれた様もないが、女は乳呑兒を抱へて、泣顔をしながら、一生懸命に行かじと争ふ。其の女の少し前に、可愛らしい五つ六つの男の兒が、眞裸體で立つて、何氣もなく、つかつかと演武場へ出やうとしてゐる。筆者は誰であつたか今忘れたが、僕は此のくりくると太つた幼兒が、束の間の命とも知らず、無邪氣に飛び出やうとした様を見て、思はず泣いた。同時に此の頃の羅馬の虐主の爲した所に、憤慨を禁め得なかつたのである。所で今自身此

處に來て、現に其の畫の通りの獄舎やら、演武場やらが、見る影もなく頽敗したのを見る  
と、何だか暴戻に打勝つた正義の化身が、勝誇つた力足を踏み締めて、「ごうだ恐れ入つた  
か」と言つてゐるやうな氣がする。

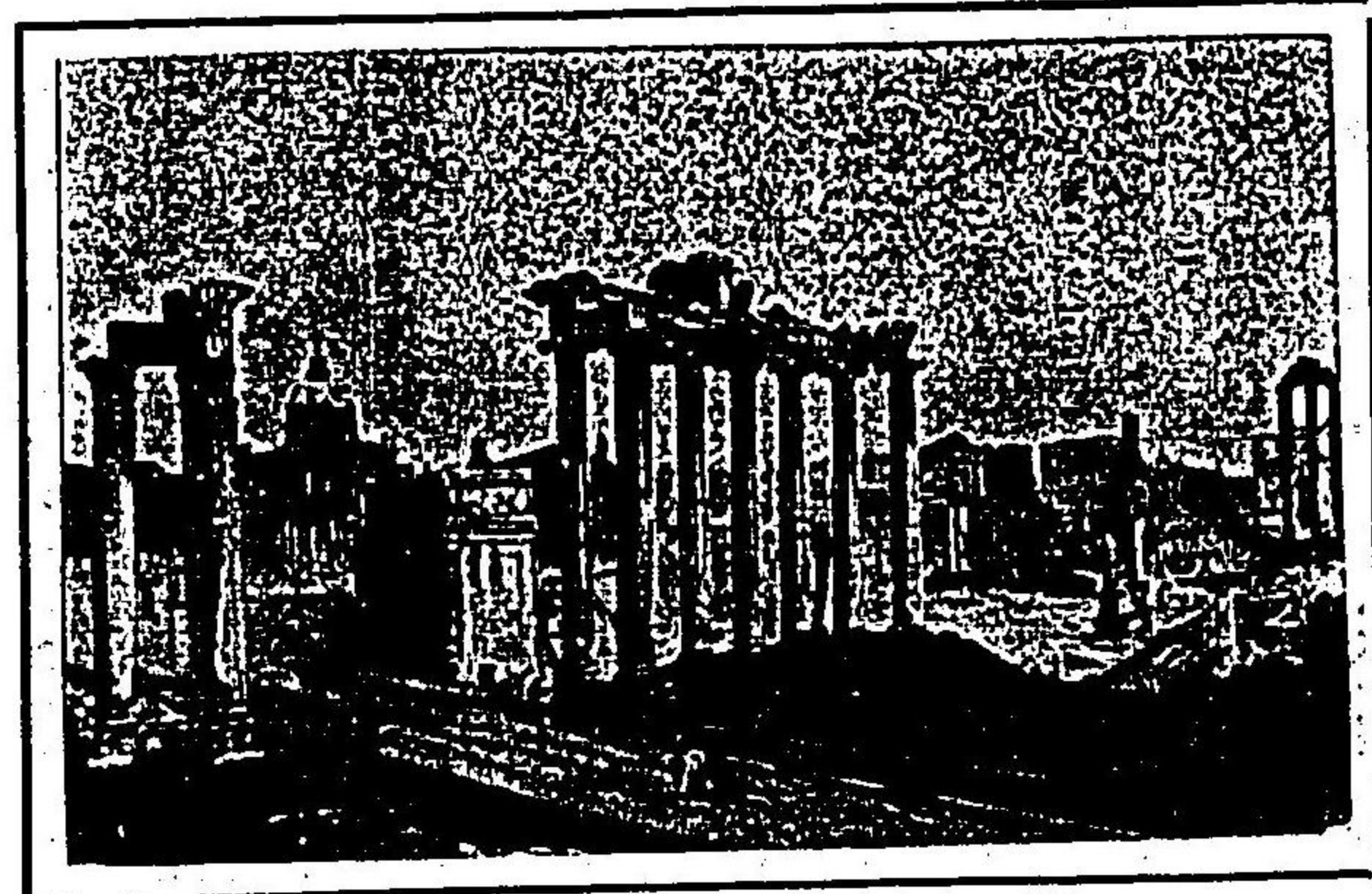
月は疾くに隠れて、明けなんとする空に星の影次第に疎らになつて來た。脚廻低徊幾度  
かふり返り、此處を出る。正面例のうすら淋しい街燈の影には、高さ二間許りの丸い石  
造の塔が見えて、之が昔劍客の試合に疲れた者の、來つて水を呑んだ處だといふ。左の方  
には、居然たるコンスタンチン大帝の凱旋門、――夜はほのくど明ける。

我等の姿を見るときごく、今度は睡りもやらで待つて居たと見えて、馬車が勢よく  
驅けて來た。乗り移るとごくごく、さも心得顔に「コラルメ、デ、カラカラ」と呼ばれば、  
馬車はつと、凱旋門の下を滑つて、蕪直に駆け出す、グレゴリオの大通。兩側には、石  
塀高く築かれて、立ち列んだ樹が、枝もたわよに垂れてゐる。羅馬には珍らしからぬ砂埃  
を立て、荷車を牽き行く人の影が、そろそろ見える。御者が鞭を上げて何やら言ふ方

を見れば、彼は當面に登ゆる高い、羅馬當年の上水道の毀れた跡を指してゐる。嗚呼、  
此の水道こそ、浴みを好んだ羅馬の市民に朝な夕な水を運んで、粉黛凝脂を洗はせた所で  
あつたが、氣が利かぬ漁陽の鼙鼓一たび地を動かして來つてより、何時とはなく此のさびれた  
様になつて仕舞つたのである。(五月二十三日)

### 五、古羅馬の曉

鼻の隆い猪飼君と、眼玉の大きな勝田君とは、如何にも睡さうな顔をしてゐる。やがて  
馬車は朝風涼しき町々を過ぎて、カラカラ帝が共同浴場の前へ出た。門はまだ鎖されてゐる  
が、低い塀の上から覗けば、青い芝生を前にして、少し小高くなつた所に、其の昔の  
共同浴場の建物が、荒敗した儘に残つてゐる。半ば毀れた頑丈な壁が突立つた様、昔は  
左こそと思はれる、羅馬の盛時には、此の中に蒸氣浴、冷水浴、温湯浴などの設備があつ  
て、浴場といふものゝ、運動場、談話室、圖書室、庭園はいふに及ばず、競馬場の設け



羅馬のフラーヌの跡

古羅馬の境

三百四

さへあつたといふ。其の總面積約三萬餘坪、浴室の數ばかりでも千六百あつたといふから、其の以上幾人の浴客が一時に入ることが出来たか知れぬ。カラカラといへば、ネロ、ドミシヤンの徒に勝ることも劣ることなき悪虐無道の君であつた。自ら手を下しこそせぬ、彼は其の弟を殺し、其の母を傷け、氣に入らぬとて、不世出の名士パピニアンをさへ屠り、まだ其の上に幾千無辜の良民を、理由もなく滅多切に斬つて、以て自ら快とした位の奴で、其の末遂に臣下の某なる者に暗殺せられて死んだは、寧ろ其の死の宜しきを得たるものと認められてゐる。

之が建てた共同浴場といへば、何れ彼が私の快樂を貪らんが爲さばかり見えるだらうが、其處が何處迄も民主思想に富んだ羅馬のこととて、其の實即位の後一二年の外は丸で羅馬に居たことのないカラカラが、此の種の建築に取りかゝつたは、畢竟豪奢を喜ぶ市民の歡心を得んとした爲に外ならぬ。帝政とは言ひながら、羅馬の帝政は寧ろ一種の帝王公選制度であつて、殊にカラカラの頃は、親衛隊の軍人と元老院の議員とが、其の好惡愛憎に依つて勝手に之を廢立したのである。カラカラは幸ひ父なるセベラスから位を繼いだのだが、夫でも位地の安固を計る爲には、極力市民の歡心を得るに勉むることが最も大切であつた。さしも暴戾無愆のネロ帝でさへ、其の民衆の人氣を取らんとあせつた様は、彼が舉動に屢見えた。カラカラも亦夫れた。

此に於て、ネロが之を演武場の慘劇に求めたやうに、カラカラは之を共同浴場に求めた。羅馬人は無比の風呂好きで、羅馬の征服を受けた都市には、何の處にも華麗なる浴場の設けなきはない。英吉利にさへ、プリストルには、今尙羅馬時代の浴場とて、途方もない大

古羅馬の境

三百五

古羅馬の曉  
な風呂場が残つてゐる位。カラカラは其處を思つて、此處に、



城敗の丘ンチラバ

三百六

名は浴場だが、其の實料理屋だか、遊園地だか、俱樂部だか、待合だか、譯の分らぬ羅馬一流の風呂場を設けたのである。さう思つて見ると、此の大袈裟な共同浴場は、詰り幾萬細民の膏血を絞つて、少數の權勢ある者に阿つた跡たるに過ぎぬ。敗れたのは寧ろ幸ひである。

ギア、アピア通から古羅馬の城門に出た。儼然たる城壁は流石に今も變らぬ。此處へ附近

の村々から、何かは知らず、荷車に積んで持つて来る百姓がある。城門警護の税關吏が一々之を取調べてゐる。酒精の類を隠しては居らぬかとも見るものか、細身の鎗のやうなものを、一々荷の中に入れて見ると、如何にも番所めいで、古羅馬の趣がある。此處から立ち歸つて、フォーラムに出た。馬車から下りて、三人は表の柵に凭れたまゝ中を眺めると、累々たる斷礎、突兀たる柱列、流石に曉方の物淋しい天地には似つかはしくて、ブルタス、シセロなどの眼前に髣髴し來るを覺える。一昨日も此處へ來ては見たが、何分てか、と照る炎天の下に、五十餘人打連立つて、わちやくと話しながらの故跡見物とあつては、一向懐舊の念も何も起つたものでない。今幸ひにして、此の寂寥たる曉天のフォーラムに接して、僕は初めて古羅馬懐古の渴を醫し得た。と思つて、尙も見て居ると、バラチン丘の邊に、頻りに啖々と鳥が囀り交す。レミントンで聞き覺えた勝田忠一君、忽ち利耳を立て、ナイチンゲールが啼きよる、ナイチンゲールが啼きよる。』

(五月二十三日)

古羅馬の曉

三百七



六、米國大使の傳言

日本に居る頃は、外國公使中の最年少者として知られてゐた、グリスカム君が、今伊太利駐劄の米國大使として、羅馬に來て居る、と言ふことを、昨夜初めて聞いたので、今朝は朝食がすむと、其のまゝ馬車を飛ばせた。

ガリバルヂの軍が、初めて九月二十日に此處に兵を進めたといふに因んで、今九月二十日街と唱ふる、長い一通の中程にある、大使館を音づれる。如何にも、クサントス、フアピアス、ブゾリアス、コルチリアスといふやうな、仰山な名前の奴が出て來さうな家だ。石壁の床、大理石の壁、高さ三丈に餘る天井、廣さ六間許りの廊下、仰々しいなんと言ふ許りでない。斯うなつて來ると、如何にも「ミストル、スギムラ」の名刺では、幅がさかぬ。「グレゴリオ、ジャボニカス」之にスギムラを逆さにしてアルミガス何とかが加へて、一つ雷の落ちたやうな音の名前を名乗つて見たくなる。

やゝ暫く此の廊下にて待つてゐると、頗て昇降機で三階だか四階だかへ案内せられた。ばたりと止まつて、昇降機の戸が獨り手に明くと、赤裏金釦の制服を着た背の高い男が、ちやんと「氣を付け」の姿勢で立つて待つてゐる。僕はグレゴリオ、ジャボニカス、アルミガスといふ勿體ぶつた顔をして、傲然として、之を先に立てて行くこと、いや廣いの何の段ぢやない。下手なホテルの食堂ほごある部屋を、三つも四つも通り貫けて、廊下だか、客室だか分らぬやうな所を、幾度か曲つて、初めてグ君の事務室に着いた。聞けば、此の大伽藍は某太公の宮殿で、羅馬でも名代のたゞ廣いものだ

米國大使の傳言

(第三二〇三號) 羅馬郊外の上水道跡



といふ。流石に僕も度臆を抜かれて、之からはクレコロオ、シャホニカス、アルミカスといふ顔になる。

出て来た主人のグリスカム君を見ると、日本に居た時と一向變らぬ。僕の顔を見て、珍らしがること一方ならず、何で今少し前に報せて来なかつたかなと、手を握りながら、さもなくかしげに言つてくれる。僕は世界一周會の計畫から、米國で受けた歓迎、殊に國務次官ウキルスン君が家の茶話會のことなど、順々に話し出すと、グ君は「一體君が氣が利かぬ。せめて一月前に知れたら、當地でも茶話會位は開けたらうに。」と頻に愚痴をこぼす。

グ君が東京で公使を勤めた時、ウキルスン君は其の下の一等書記官であつて、僕は更に其の下の下の某官を勤めてゐたのである。一周會の先達も此處へ來ると、甚だ頭が上らぬ。誰は無事だらうか、彼は何してゐるか、一別以來の物語、いろいろあつて後、折角だから家を見て呉れとのこと、自身先に立つて、自分の書齋から、寢室食堂など一々案内して呉れた。其處此處の棚や暖爐の上には、日本の磁器や、銀具や、象牙細工がさまざま列んで

ある。此は何某侯爵から貰つたの、彼は何處やらの伯爵夫人の贈ものごと、由來が一つも明せられる。其の中に、品物は忘れたが、執行弘道君から貰つたのだといふのがあつた。之を僕に見せた後、何か歸つたら執行君に宜しく言つてくれ、とのことであつた。

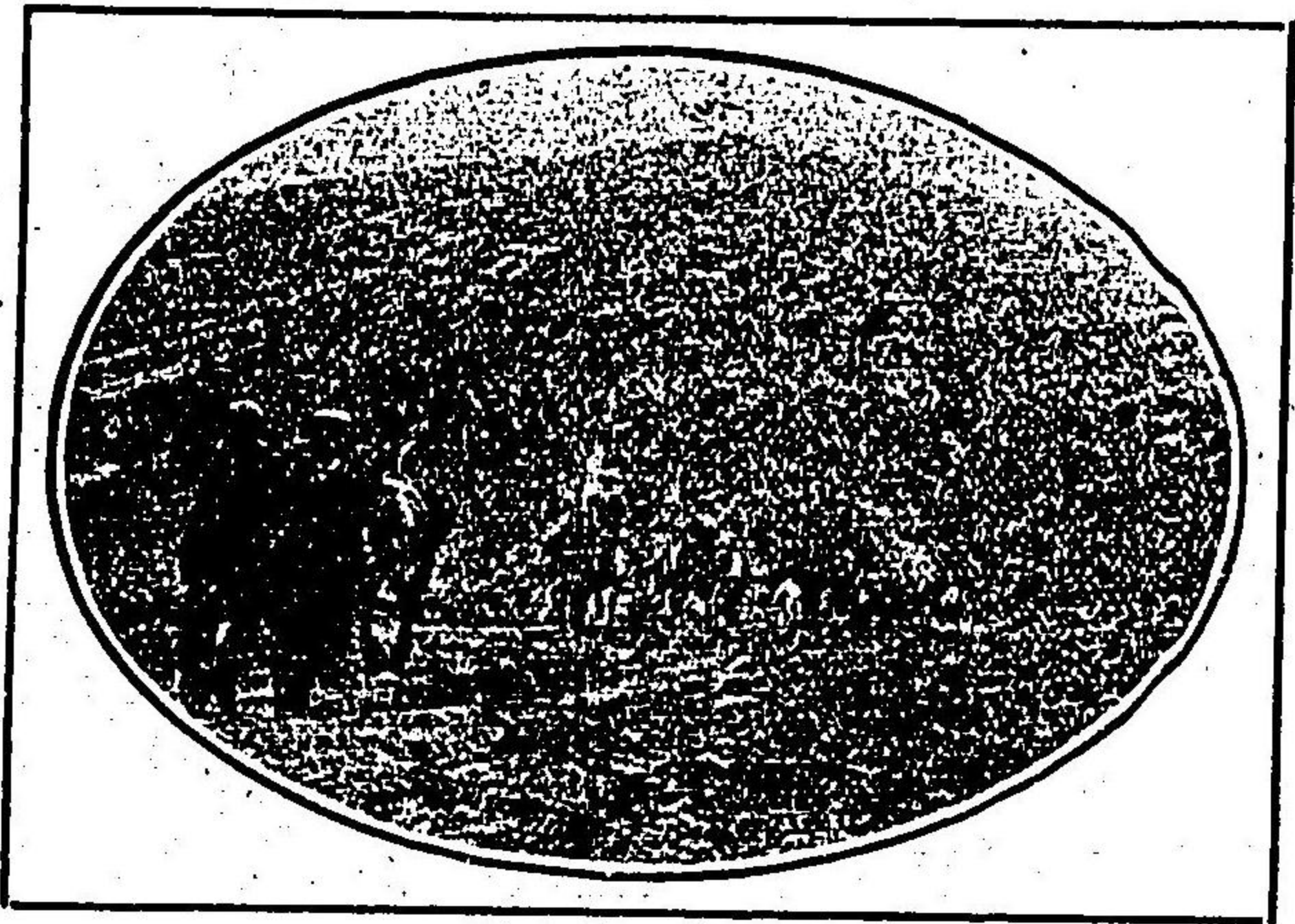
執行君への傳言は僕儘に之を命の通り傳へたが、其の外今に傳へず居るのが、大分ある。徳富蘇峰君へといふのも其の一だが、外に伊藤公爵と東郷大將とに宜しくといふものもあつた。其の外にまだ、何爵やら、何大臣やら、大分クシタス、フッピナス、ブリアス、コルネリアス式のものがある。我等草莽の布衣、滅多にそんな雲上人に出會ふことはないといへば、そんなら之も次手の時で宜いがその前置で、岩崎久彌男爵への傳言を頼まれた。而して此の傳言には苦説がある。久彌男は大學の同窓でもあり、日本でも親しく往來した中だが、分れて後は、夫人と夫人との間は別として、丸で手紙を呉れたことがないといふのである。一體此處に限らず、日本人は會つて親しくしておきながら、分れると、決して書面を寄越さぬものだとその苦情は、到る處で聞いた。僕は此に、略

三百十二  
ポムペイの埋没  
儀ながら、紙上を以て遍く外人を友達にした日本人に注意を加へる。夫と同時に、羅馬で頼まれた 그리스カム君の傳言も、亦略儀ながら此の紙上ですませることにする。  
大分長く談じ込んで、此處を下りた。廊下の受附が門口迄尾いて来て、聲高に僕の馬車を呼んで呉れる。とてもものことに「シニオル、グレゴリオ、ジャボニカス、アルミガスの御馬車」と呼んでほしかつた。(五月二十三日)

ポムペイ

七、ポムペイの埋没

ベスピアス火山の東南麓、サルノの河岸に沿つて、カムパニアの都ポムペイといふのがあつた。紀元前五百年代に出来たといふ、ドリアン式の古建築が今尙敗墟の中に残つてゐる所から推すと何でも今から二千四五百年前には、既に可なり町の建つてゐたものらしい。初はオスカン族の經營する所にかゝり、中頃にしてサムニツト族の手に歸し、其の後羅馬



ベスピアス登山

ポムペイの埋没

と劍戟の間に相見ゆること幾百年、遂に紀元前八九十年の頃に至つて、初めて全然羅馬の領土となつたとある。地山を負ひ、海に臨み、日麗かに風清き所として、早くから縉紳の別墅を列ねること今の大磯鎌倉に異ならず。夫が羅馬の世になつては、いや榮えに榮えて正しく一世の風流華奢を此に極めた。花に戯れては春の日の永きを短しと嘲ち、月に浮かれては秋の夜の長きを明け易しと怨み、上下を擧げて皆蕩々乎として醉生夢死、左ながら此の世をわが世とばかり遊戯三昧に日を送つたポムペイの町に、さても恐ろしや、紀元六十二年二月五日の大地震、家



ボムヘイの埋没  
 三百十六  
 の罪もなさうに見えた山が、一朝爆然として破裂した。何時かは隙を規つて噴き出さうと構へてゐた全山の火気が、忽ち土を破り石を飛ばして、猛然として立ち騰つた。立ち騰つた熱灰焦土は颯と八方に落ちて、瞬く間に四邊の山や川や村や里を埋めて仕舞つたのである。噴火は八月二十四日の早朝に初まり、降り頻る大雨に交つて、炎を返る泥の流は、西の方へルキユリアム市を埋め、雲の如く空高く揺曳した灰煙は、折しも噴き出した西北の風に連れられて、ボムヘイ市の上に着ちた。ボムヘイには初め胡桃ばかりの焼石ごろ／＼と降つて地上八九尺を埋め、次には雨と共に落ちて來た火山灰が其の上七八尺を埋めたのである。其の間に大地は絶間もなく震れる、火焰がばつぱと揚る、石が飛ぶ、灰が盛に降る、雲が低く飛ぶ、天地は黒白を辨せぬ眞の闇、閃たる電光が海にも陸にも閃き渡り、轟々轟々轟と凄じい物音が到る處に聞えて、之に交つて逃げ惑ふ男女の阿鼻叫喚の聲慘憺たるものであつた、と實地を目撃した羅馬の史家少ブリニーは書いてゐる。  
 三日目になつて初めて鎮つた。鎮つた後カンパニアの野は如何にと見てあれば、ボムヘイ

三三

スタピエの兩市は唯僅に屋の棟を灰の中から見せたばかり。ヘルキユリアム市に至つては、影も留めず永へに地の底深く消え失せて仕舞つたのである。爾來鬼哭啾々一千八百歳。一千八百歳以前のまゝのボムヘイ市は、又もや世に出て今しも我等の眼の前に在る。僕等は停車場前に設けた改札口を通つてスタピエ通の門に入つた。ボムヘイ全市が今は一種の博物館のやうになつて、ニリラの入場料を徴して、朝の七時から夕の五六時迄、一般の縦覧を許すこととなつてゐる。(五月二十五日)

八、ボムヘイの令昔  
 昔の町並み

停車場前のスタピエ門から、一行五十餘人ぞろ／＼と入る。ボムヘイは海に向いた方を除いて、三方嚴重な城壁で取り圍まれ、處々に城門がしつらへてゐる。ボムヘイ發掘中、兎ある城門の傍で、噴火の當時、雨霞と降る石礫熱灰を物ともせず、甲冑に全身を固めて、轟然と立つた儘、其の職に殉じた、倔強な古羅馬の一兵士の死骸を發見したといふ話があ

ボムベイ今昔  
 る。スタビア門に入らうとする所は、今尙盛に發掘中で、市内から門外へ續いた敷石道が大分掘り出されて、道の中央に、一丈ほどの石柱が一本にゆつと出てゐる。案内の者の話では、道路が斯う市外まで續いてゐることが知れたので、之から更に此の方面を發掘することになり、遠からず門前のホテルや停車場を叩き毀して、ざんく外へ掘り續けて行くのださうだ。  
 足一たびスタビア門の中に入れば、眼前忽ち現る、ストラダ、スタビアナの大通り。兩側には、屋根のないボムベイの家々が、昔のまゝに見渡す限り立ち列つてゐる。道は狭けれど、一段高く

ボムベイのスタビア通



なつた人道の設もあり、中なる車道には、隙間もあらせず、石を疊んだ敷石道があつて、其の敷石の中に、車の轍の削り削した跡が歴々ど残つてゐる。——思は、我れ知らず、一千八百年前の昔に立ち戻つて、市區般賑、車馬絡繹たりし時の様が目に見渡す。其の頃のボムベイといふは、周圍二哩、人口一二萬の小ぢんまりとした、住心地の宜い都であつた。氣候はよじ、景色はよじ、山はベスピアスの山、今こそ荒れ果て、麓の外は丸で一草一木の影も見せぬが、其の頃には、頂近く迄緑濃き橄欖の樹が枝葉を交へ、珠玉を貫いた葡萄の實が累累として生り下つてゐた。海はナボリの灣、今こそ町を離ること一哩の上にも及ぶが、昔はひた／＼と碧を湛へた水が町の足を洗つた。カムバニアの野は見渡す限り萬葉の緑陰、サルノの流は長へに春水濼々として、町の中央を貫き流れる。形勝の地としては、幾百年羅馬に拮抗して降らず、海港としては、東貨西貨船と共に此處に集散し、遊樂の場としては、ナボリ、羅馬の近きはいふも更なり、遠くは埃及、希臘、英吉利の遙けきより、此處に來り住する者其の數を知らなかつた。リットンの「ボム

ボムベイ今昔

ボムベイ今昔

三百二十

「ペイの末日」を見ると、猶太人の様なデオメツドも居れば、亞米利加の新婦人の様な其の娘のジュリアも居る、優しいグラウカス、美しいイオネは希臘の落人、人相の悪いアルバチエスは埃及からの渡り者。如何さま様々の國の人が居たらしい。

先づ氣候はと聞けば、冬は短くて、寒さ烈しからず、春と秋とは長うして、夏はさ迄に熱くない。——其の夏の一日の様を、ボムベイ道のマウは斯う書いてゐる。「朝早き間は、流石に熱さの凄き兼ねる折もある。丸でそのよこの風もない。眸を放つて、海原遙に眺めれば、カブリの方よりさざ波の一筋黒う浮んだのが見えて来る。夫が次第々々に近くなる。十時頃には、ぶちや〜と岸邊に打つける。やがて木の葉がそよぎ出す。涼しい、強い、快い、海の風が吹いて来て、日の暮れる迄吹き續ける。日の暮れなんとする頃、はたと靜まる。其の頃には、晝間の熱を含んだ町の敷石道や壁から、火氣がむうと出て来るが、大抵九時頃になれば、再び樹梢に風の音づれ初めて、山々から吹き下す爽涼なそよ風が、一夜園の邊、家々の間を吹き抜ける」とある。

ボムベイの今昔

三百二十一

景色はといへば、色合の調和美しい海と山と野とを背景にして、自然と人工の美を集めた此の町の趣に、外では見られぬ面白味がある。南の方、見る目遙にサルノ河岸の低地、年古りた大木に立圍まれた百姓家が、彼方に軒を現し、此方に棟を出してゐる。其の彼方には、處々緑樹蒼鬱たるサンタンジェロの山、山は谷と窪み、峰と峙ち、其の間にグラニヤノ、レッツレの兩村を包んで、其のまゝソレント半島の方になだれて行く。之より西へかけては、山隈俄に開けて、一面鏡に似たる海が見える。山容幻怪樹影逆しまに影を水に蘸すと見る此方には、山骨露はに宙宇に聳えて、照りつくる日に血紅色の土の色、——山影朦朧として朧げに消え失せんとする所に、ソレント夢の如く、カブリの島影、吹かば將に消えんとするものがある。更に北の方はと見れば、ベスピアスの峰兀として雲に聳え、灰色の嶺夕日を受けて金色に光る時、麓を周る葡萄畑は次第に夕開の裡に消えて行く。其の後にはナボリの灣の北に連なる遠山の影が見える。

フ、コ、ラ  
平野の山

斯う容姿を作つて書き出すと、讀む者もつらからうが、書く者も肩が張る、兎も角も、

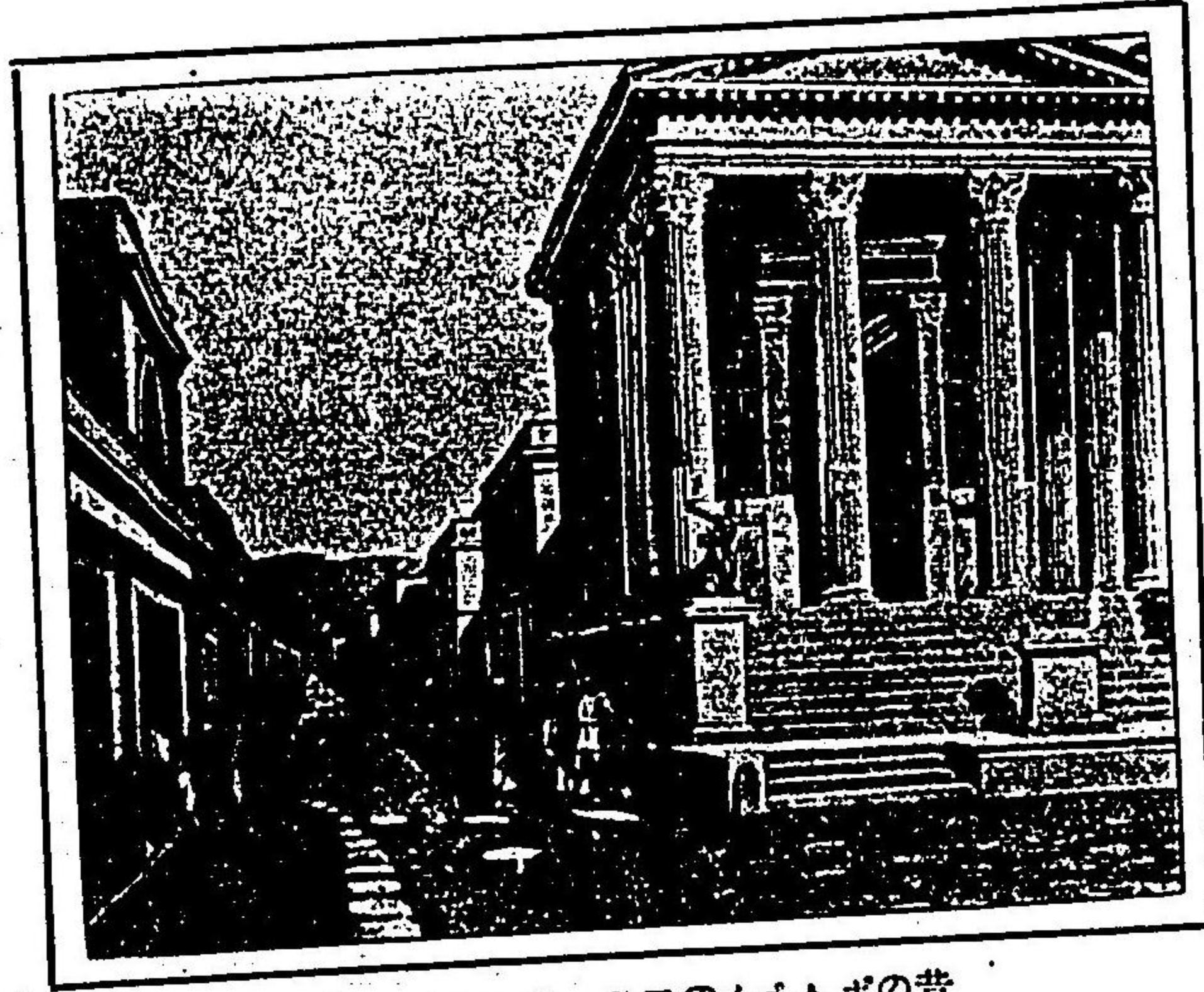
ボムベイの市街  
少し町を歩いて見やう。

九、ボムベイ市街

或る金持の家が焼けたとする。家財諸道具は一生懸命になつて、やつと持ち出したが、唯金銀珠玉の類は、周章狼狽の餘り、兎も角もと、井戸の中に投げ込んで置いた。所で、持ち出した家財諸道具は、息子が道樂のお蔭で、二三十年の間に何處へ行つたか分らなくなつて仕舞つたが、井戸の中へ投げたのは、四五百年の後ひょっくりと掘出されて、思ひもかけず、元の主に歸つたといふやうなことが、世間に能く有る。思へば無事に持ち出された様な羅馬の町は、今や殆ど昔日の俤を留めぬが、井戸の中へ投げ込まれたと同様なボムベイの町は、却つて何やら無事に遺つてゐる。何が何やら、世の中は分らぬものだ。此の生れ還つたボムベイの町々こそ、實に伊太利中の見物である。大道廣きは三十尺狭い小路になると十尺内外。夫が前にも言つた通り、ちやんと敷石で疊んで、人道車道

の區別をつけてゐるから驚く。其の敷石の上に、荷車の轆ががっくりと窪んでゐる。斷つておくが、轆は荷車に限るまいと横轆を入れる人があるかも知れぬが、ボムベイには人力車といふものがないし、馬車に乗るとは禁せられてゐたので、小面憎い精神の徒は、就ち一種の釣臺に乗つたものださうだ。近頃日本でも、通行人の迷惑を構はず、無暗に自動車を乗り廻す者があるが、英國では、之が國民間に階級の念を盛ならしむる弊があるとして、昨今大分喧しい問題になつてゐる。斯な物に乗る人に限つて、餘り急用のない閑人が多いから、寧ろそのこと、馬車自動車を禁止して、ボムベイ式に釣臺に乗らせることにしたら、何んな物だらうか。さうすれば、悪疫流行の時などに徴發して、避病院送りに使ふ便利もあるといふものだ。御賛成の方は起立ッ！ なアんで、之は冗談だ。道の角々には、處々飛石が有つて、人道から人道に涉る用に供してゐる。人道が車道より一尺許り高く出来てゐるので、雨降りなどに、車道は水だらけになるといふのである。尤も、ボムベイには、下水の設備もあつて、町々を流れた水は、結局城門際の大水道へ





ボムベいの市街

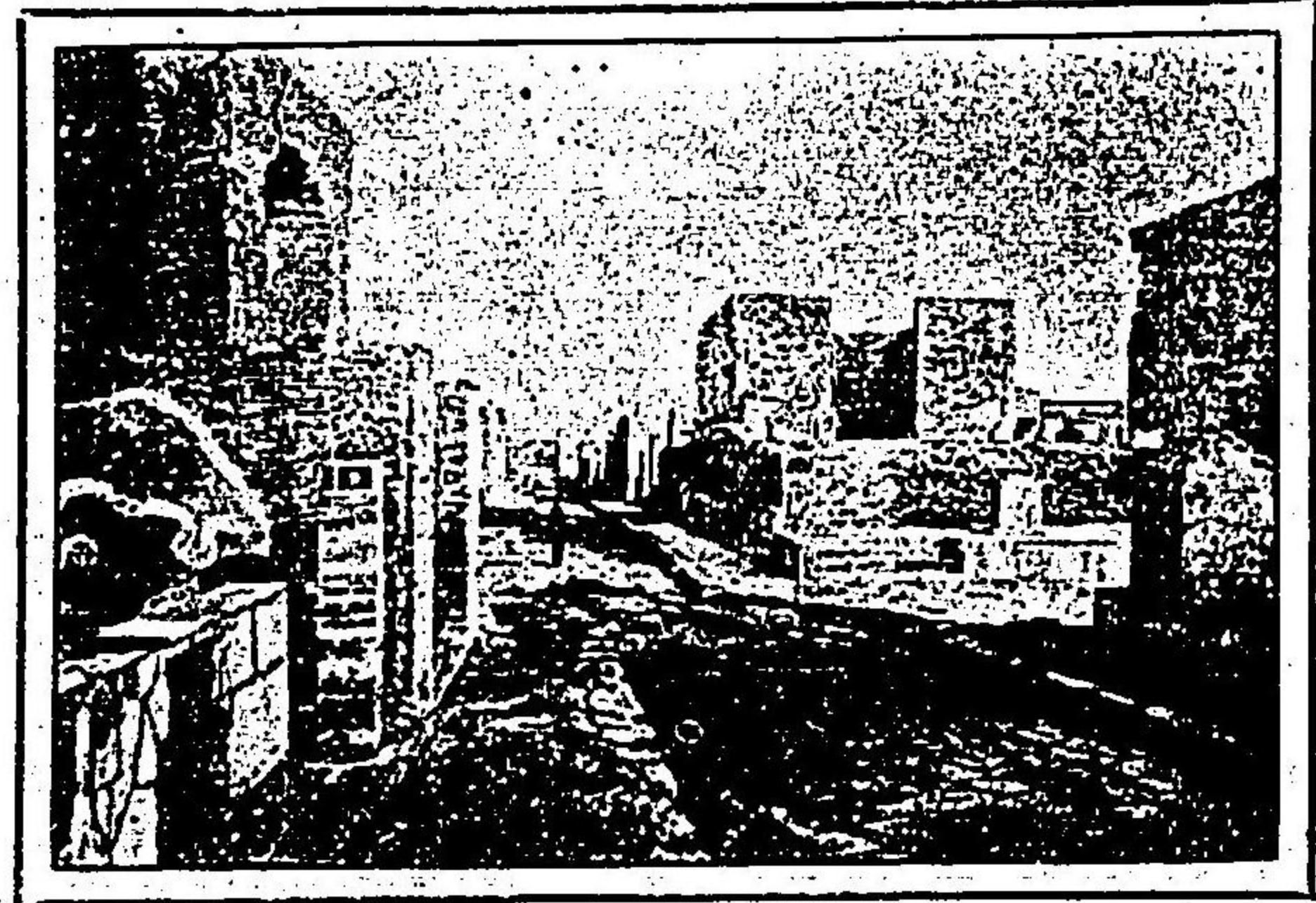
昔のボムベいのイヌチーヌチーヌ街

落ち込むことになつてゐたのだといふ。殊に驚くべきは、家々から流し出す汚物は人道の下に設けた埋設下水に流れ出る仕組であつたといふことだ。蘇西以東第一の都會で候ふの威張つてる東京市にして、千八百年前のボムベイ市に如かざるべけんやである。

また「如かざるべけんや」なものがある。上水道だ。町々には、處々に石の頑丈な井戸側が残つてゐて、水を汲む時手かけた跡といふのが、あり／＼其の石に擦り耗されて、残つてゐる。此の井戸は皆掘

抜でなくて、水道を引いたものである。一寸今の共用栓に異らぬ。又處々に貯水池があつて、之から各戸に引いたものもある。之は専用栓である。而して其の水を引くには、水の分量に従つて、其の壓力に相當した大小様々の鉛管を用ひてゐるが、其の鉛管が、鉛の継ぎ目こそ不細工なれ、其の形殆ど今日のと異なる所はない。所で其の水を何處から何う引いたかといふと、例の羅馬式の高い煉瓦作りの水道で、市外十數哩の彼方から引いたらしい跡はあるが、確と其の水源は分らぬといふ。之が市内の最高地にある海拔百五十尺の高さの水塔へ、平氣で水を送り

ボムベいの市街跡



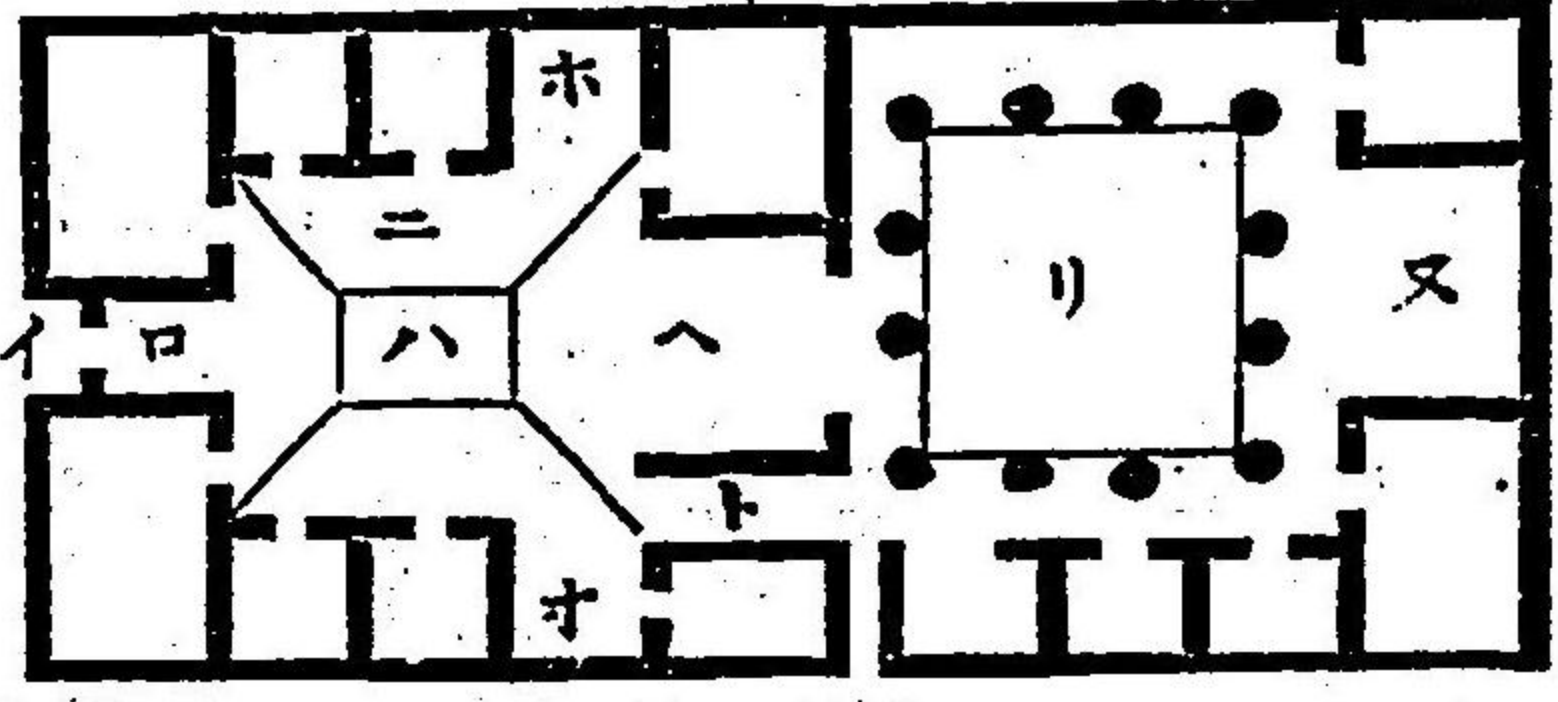
ポムペイの家々  
 三百二十六  
 上げたといふから、其の設備の完全であつたことが知れる。大阪の梅原七君、慨然として嘆じて曰く、何と阿呆らしいやないかいな、二千年前の真似も出来んのやがな。——口にこそ言はね、此の感を感じたのは、恐らく梅原君許りであるまい。

商家軒を列べた街道がある。店と覺しくて、がらんと家の前が押開いてゐる。又屋敷町とも見ゆる、住宅らしい家の列んだ街道がある。此處には儼しい塙を高く廻らして、處々に小さな入口がついてゐる。

先づ順々に家内の様子を見に入るこする。

十、ポムペイの家々

ポムペイの家々は、概して平家許りで、二階建は極めて少かつたといふ。夫に入口が小さく、窓が殆どなくて、今でこそ天井も何も毀れて仕舞つて、からりとした明るい家の様に見えるが、有りし昔は、随分薄暗い間取の家であつたに相違ない。總じて伊太利の古い



ポムペイの家々の間取

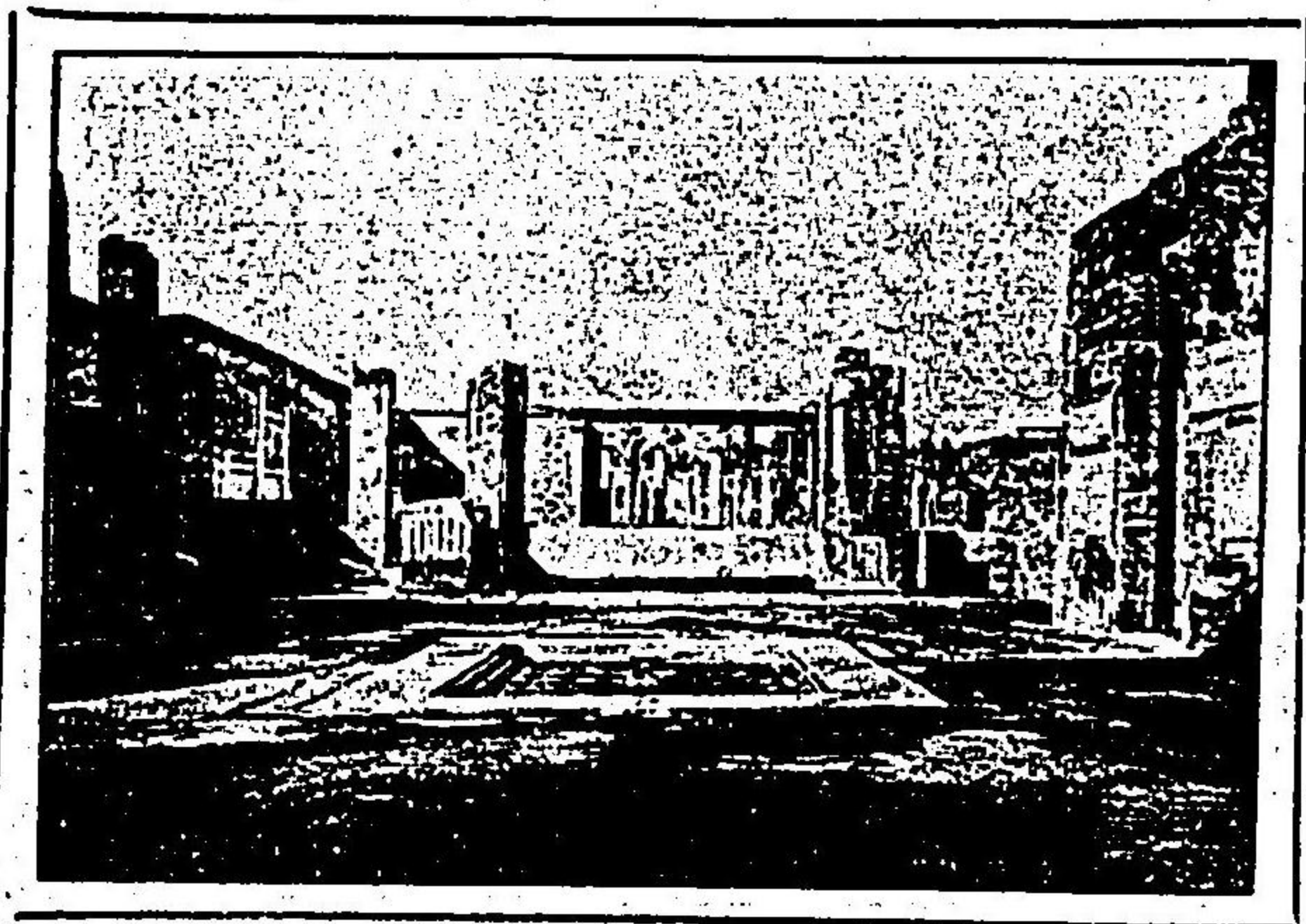
家といふと、必ず窓の小さい、廊下の細い、薄暗い家が多いが、ポムペイのは殊に甚しかつた。暑さの烈しい所だけに、成るべく日光を避けて外氣に遠ざかる勘辨をしたものらしい。

家の間取は、大小貧富の別に依つて、一樣には言へぬが、夫でも大凡を定つた所はある。先づ街道に沿つて、車寄とも言ふべき、少し引込んだ所がある。ベスタブリアム(イ)といふ。其處に戸口がある。戸口を入ると、短い廊下の様なフワウチエス(ロ)がある。其の先はアトリウム(ニ)とて、大きな廣間になる。ポムペイの家を畫くと、必ず此のアトリウムを畫くが、之が此處の特色であつた。此處にはコムブルビウムと唱ふる天窓から光を取つて、此の天窓の真下に、イムブルビウムなる水道から引いた水が、晝夜をすてず、滾々と流れて居

ポムペイの家々

ボムセイの家々  
 て、中には噴水を設けたのもあつたさうな。又  
 其の兩側には、様々の彫像を飾つてゐたともい  
 ふ。此の廣間は、客間にも、食堂にも、仕事場  
 にも、休息室にも使はれたが、此の廣間の兩側  
 には、寢室が幾つか列んで立つてゐる。片隅に  
 アレー(ホ)といふ狭い小さな部屋がある。何の  
 用に供したものだか分らぬ。更に廣間から正面  
 に突き當ると、タブリナム(へ)と唱ふる廣間が  
 ある。初は食堂に使つたものだが、後には、主  
 として應接の間に用ひたさう。其の横には奥  
 庭に通ふ通路アンドロン(ト)があつて、其の脇  
 には東門とも見るべきボスチカム(チ)がある。

昔のアトリの



アトリの跡

ボムセイの家々

更に進めば、奥には四方圓柱で取圍まれた庭  
 園(リ)があつて、此處に草木の類を植ゑてあ  
 る。大きな家になると、此の庭の今一つ奥に一  
 寸離座敷と言つたやうな風に、エキセドラ(ヌ)  
 といふが有つた。此の外に料理場、浴室、物置な  
 どが、夫々然るべき所に設けられてゐたことは、  
 今更言ふを待たぬ。家の中の裝飾には、銅の鏤  
 物、大理石の彫刻、モザイクなどがあるが、殊に  
 一同の目を怡ばせたのは、壁に畫いた鍔細工の  
 畫で、之が二千年前の色彩依然として、紅や、  
 黄や、紫が鮮かに存つてゐる。夫から、——い  
 や待てよ、面白くもない家の講釋は、大抵此處

ボムペイの家々

らが切り上時だ。叱ッ！叱ッ！案

内者が何か言ひ居る。

『さうか男の方だけ入らしつて下

さい。』案内者が高聲に呼ばふつた。

そりやこそ、豫て聞き及んだ珍妙不

思議のものを見るこそぞと、一同ぞ

ろくろ、其の後に尾いて、細い小

路の奥に入つて行く。案内者はつこ

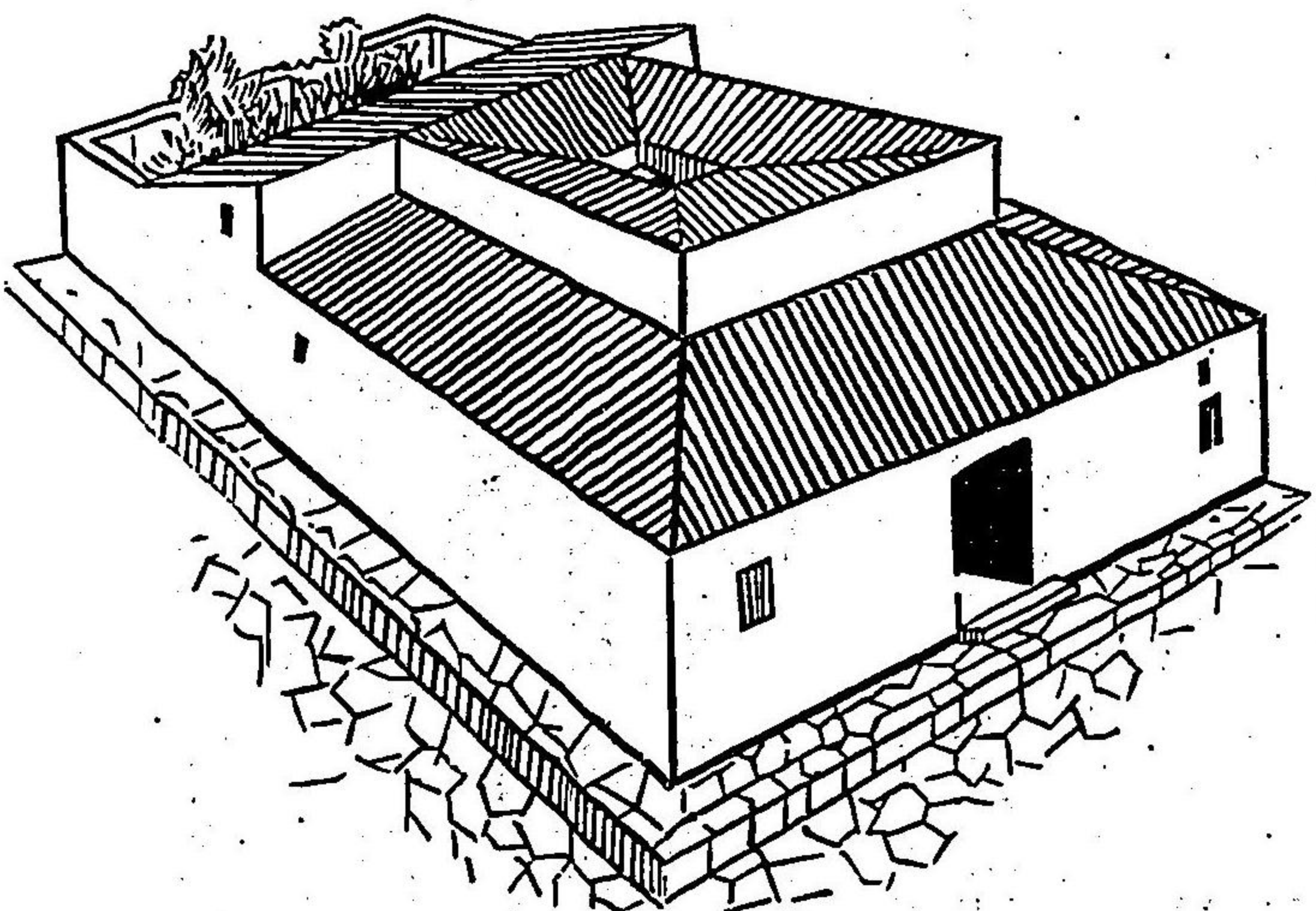
立ち止つた。にたりと笑ひながら、

手を舉げて、兎ある家の軒端を指さ

した。指さした處へ、五十人の目は

一齊に注がれた。——成程男許りに

ボムペイの家



三百三十

来いと言つた筈だ。

十一、ボムペイの秘密

禪の商量でもするやうだが、此處の記事だけは、希くは目を瞑つて讀んで呉れ。

我等の導かれたのは、ボムペイの娼家である。案内者の指さした此の家の軒端には、看

板代りに掲げた、一尺五寸許りの男子の生殖器が、によつきとばかり突き出て居る。之を

見た時の一同の顔といふものは、實に笑ひもならず、さりとて泣くほどのことではなし、

何とも名状すべからざる珍妙不思議のものであつた。中へ入ると、例のアトリアムの四圍

には、小さく仕切つた部屋が幾つとなくある。如何さま娼家と言へば娼家らしい。是れ昔、

あだめいた姿の女が、羅旬風の衣を着すやの肌露はな衣をつけ、胭脂粉黛濃やかに粧ひ

なして、朝に希臘の客を送り、夕に埃及の阿郎を迎へた所だ。懐ふに、其の頃互に戀ひ焦

れて、天に在つては比翼の鳥、地に在つては連理の枝位なことを言ひ交した者もあつたら

ボムペイの秘密

三百三十一